

兵庫縣文化財調查報告書 第47冊

推定布勢駅家跡

# 小犬丸遺跡 I

昭和62年3月

兵庫縣教育委員會

推定布勢駅家跡

# 小犬丸遺跡

## I

— 県道姫路・上郡線道路改良工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和62年 3月

兵庫県教育委員会

## 例 言

1. 本報告書は、県道姫路・上郡線道路改良工事に伴い、兵庫県竜野土木事務所の委託を受けて、昭和57年度と昭和58年度に兵庫県教育委員会が実施した小犬丸遺跡の発掘調査報告書である。
2. 遺跡は龍野市揖西町小犬丸字大道ノ上に所在する。
3. 本文中の龍野市の漢字表記については、国の住居表示に従い、竜野市とはせず、龍野市と表記した。但し、県の地方行政機関名等は慣行的に竜野と表記しているもので、これに従った。
4. 遺物番号の表示は図版、図面、本文を通して統一した。
5. 図面上の方位は磁北をあらわす。発掘基準点の国土座標値は第1章第3節に別記した。
6. 本書で使用した地図については、龍野市市史編集係と兵庫県竜野土木事務所より提供を受けたものを使用した。
7. 瓦の胎土分析は奈良教育大学 三辻利一教授による。結果についても玉稿を頂いた。
8. 本報告書の執筆については、分担して行い、本文目次に氏名を記した。構成・編集については別府洋二が担当した。
9. 遺物写真の撮影は森 昭氏の手による。
10. 古大内遺跡出土瓦の拓本掲載については、加古川市教育委員会の配慮を得た。
11. 本報告書に関する資料については、兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 兵庫県埋蔵文化財調査事務所に保管している。
12. 発掘調査にあたっては、地元、東村地区総代 船引登氏をはじめ、東村地区の理解と協力を得た。厚く御礼申し上げたい。
13. 調査および報告書の作成にあたっては、下記の方々の御指導と御教示を仰いだ。記して深く感謝の意を表するものである。  
秋枝芳（姫路市教育委員会）・市村高規（龍野市教育委員会）・今里幾次（日本考古学協会員）・岡本一士（加古川市教育委員会）・志水豊章（龍野市市史編集係）・高井佛三郎（辰馬考古資料館館長・兵庫県文化財審議委員）・高橋美久二（京都府教育委員会）・菱田哲郎（京都大学）・水谷寿克（京都府埋蔵文化財センター）・三辻利一（奈良教育大学）・森郁夫（京都国立博物館）・森田稔（神戸市立博物館）・山本博利（姫路市教育委員会）・吉本昌弘（立命館大学）

(50音順、敬称略)

# 本文目次

第1章	発掘調査の経過	(森内秀造・平田博幸)	1
	第1節	発掘調査に至るまで	1
	第2節	試掘調査の実施	2
	第3節	全面調査の実施	3
	第4節	遺物整理の実施	4
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	(森内)	5
	第1節	遺跡の立地	5
	第2節	周辺の遺跡	5
第3章	調査の成果		9
	第1節	調査	(別府洋二) 13
	第2節	西区の遺構	(森内・別府) 14
	第3節	東区西半部の遺構	(別府) 21
	第4節	東区東半部の遺構	( ♡ ) 26
第4章	遺物		29
	第1節	土器	(森内) 29
	第2節	瓦	(山根実生子) 36
	第3節	鉄製品	(別府) 53
	第4節	水晶玉	( ♡ ) 54
	第5節	弥生土器	( ♡ ) 54
第5章	小犬丸遺跡出土瓦の胎土分析	(三辻利一)	55
第6章	まとめ		61
	第1節	小犬丸遺跡出土の土器について	(森内) 61
	第2節	小犬丸遺跡出土の瓦について	(山根) 65
	第3節	小犬丸遺跡について	(別府) 71

## 挿 図 目 次

第1図	小犬丸遺跡位置図	1
第2図	試掘調査グリッド配置図	2
第3図	第2グリッド下層瓦群	2
第4図	基準点埋設位置	3
第5図	砂による遺構の保護と道路拡幅完成後	4
第6図	龍野市の位置	5
第7図	小犬丸周辺遺跡分布図	6
第8図	遺跡から南を望む	8
第9図	西区、南1・2トレンチ遺構配置図	9・10
第10図	東区東半部・西半部遺構配置図	11・12
第11図	全面調査地区設定図	13
第12図	西区・南2トレンチ土層断面図	15
第13図	流路北壁土層断面図	16
第14図	上層瓦群、S B 01、S K 01・02	17
第15図	S K 01・02土層断面図	18
第16図	下層瓦群、S B 02	19
第17図	S K 03	20
第18図	S D 01	21
第19図	S D 02	22
第20図	S D 03	23
第21図	S D 04	24
第22図	S D 05土層断面図	25
第23図	S D 01 (東から)	25
第24図	S B 03・04	26
第25図	S E 01	27
第26図	琴坂から見た遺跡	28
第27図	S B 01柱跡	35
第28図	N H 06・N H 07拓影	38
第29図	丸瓦布痕跡拓影	40
第30図	丸瓦法量分布図	41
第31図	平瓦法量分布図	43

第32図	平瓦側面・端面の模式図	43
第33図	平瓦叩き目の各種(1)	44
第34図	平瓦叩き目の各種(2)	45
第35図	甍斗瓦実測図	48
第36図	水晶玉	54
第37図	弥生土器	54
第38図	小犬丸遺跡出土瓦のクラスター分析	55
第39図	C群の瓦の Rb—Sr 分布図	58
第40図	A・B・C群の瓦の K 量の比較	59
第41図	A・B・C群の瓦の Ca 量の比較	59
第42図	A群の瓦の Rb—Sr 分布図	60
第43図	B群の瓦の Rb—Sr 分布図	60
第44図	古大内遺跡出土の軒瓦	66
第45図	平瓦分類別の百分比	67

## 表 目 次

第1表	基準点測量成果表	3
第2表	軒丸瓦計測表	50
第3表	軒平瓦計測表	50
第4表	軒瓦出土別一覧表	51
第5表	丸瓦計測表	51
第6表	平瓦計測表	52
第7表	釘計測値	53
第8表	小犬丸遺跡・古大内遺跡出土瓦の分析値	56・57
第9表	小犬丸遺跡同文・同系列瓦出土一覧表	70

## 図 面 目 次

- 第一図 土器(1)
- 第二図 土器(2)
- 第三図 土器(3)
- 第四図 土器(4)
- 第五図 土器(5)
- 第六図 軒丸瓦(1)
- 第七図 軒丸瓦(2)・鬼瓦
- 第八図 軒平瓦(1)
- 第九図 軒平瓦(2)
- 第十図 九瓦
- 第十一図 平瓦(1)
- 第十二図 平瓦(2)
- 第十三図 平瓦(3)
- 第十四図 平瓦(4)
- 第十五図 平瓦(5)
- 第十六図 平瓦(6)
- 第十七図 平瓦(7)
- 第十八図 平瓦(8)
- 第十九図 平瓦(9)
- 第二十図 平瓦(10)
- 第二十一図 鉄製品

## 図 版 目 次

- 図版一 (上) 小犬丸遺跡航空写真  
(下) 小犬丸遺跡遠景(南から)
- 図版二 (左上) 西区上層瓦群出土状況(東から)  
(右上) 西区S B 01、S K 01・02(東から)  
(下) 西区S B 01、S K 01・02(北から)
- 図版三 (上) 西区下層瓦群出土状況(西から)  
(下) 西区下層遺構完掘後(西から)

図版四 (左上) 東区S D01～S D03 検出状況 (西から)

(右上) 東区S D02・03 検出状況 (西から)

(左下) 東区S D01～S D05 完掘後 (東から)

(右下) 東区S D02・03 完掘後 (東から)

図版五 (左上) 東区東半部 遺構検出状況 (西から)

(右上) 東区東半部 S E01 (東から)

(左下) 南2トレンチ上層遺構面検出状況 (東から)

(右下) 南2トレンチ下層瓦群検出状況 (西から)

図版六 水晶玉・緑釉・灰釉・越州窯青磁

図版七 土師器 (碗・杯)・須恵器 (碗・杯・蓋)

図版八 土師器 (皿・杯)

図版九 土師器 (鍋・羽釜)・須恵器 (甕)

図版十 軒丸瓦・鬼瓦

図版十一 軒平瓦

図版十二 丸瓦

図版十三 平瓦(1)

図版十四 平瓦(2)

図版十五 平瓦(3)

図版十六 平瓦(4)

図版十七 平瓦(5)

図版十八 平瓦(6)

図版十九 平瓦(7)

図版二十 平瓦・丸瓦・熨斗瓦

図版二十一 軒瓦細部

図版二十二 丸瓦・平瓦細部

図版二十三 鉄製品(1)

図版二十四 鉄製品(2)

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至るまで

小犬丸遺跡は龍野市揖西町小犬丸に所在する。同遺跡内には、多数の瓦が散布していることから、以前は、廃寺跡と考えられてきた。しかし、近年では、古代山陽道の「布勢駅家」跡とする説が発表され、現在では、廃寺とするよりも駅家跡とする説が有力である。

小犬丸遺跡の南端には旧県道、中央付近を現県道の姫路・上郡線が東西に横断している。県道姫路・上郡線については、近年の交通量の増加に伴い、国道2号線と並ぶ主要幹線として、昭和48年より、道路の幅員の拡張及び整備が実施されてきた。相生から揖保川以西の区間については、昭和56年までに、小犬丸遺跡周辺を残してほぼ工事が完了している。

県道姫路・上郡線拡張に伴う小犬丸遺跡の取り扱いについては、昭和57年に、県野野土木事務所と協議を実施した。その結果、小犬丸遺跡については、遺跡の実態が明らかではないので試掘調査を実施し、遺跡の範囲及び遺構の状況を把握したうえで、改めて遺跡の取り扱いについて協議することにした。



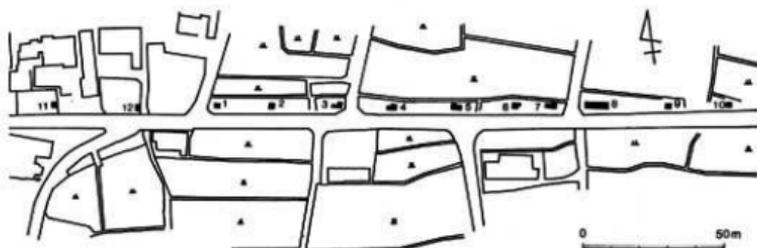
第1図 小犬丸遺跡位置図

## 第2節 試掘調査の実施

兵庫県教育委員会より、社会教育・文化財課の森内秀造と平田博幸が派遣され、昭和57年10月18日から22日の5日間、試掘調査を実施した。

試掘の範囲は、現在の小犬丸の東村地区西端から琴坂峠に至る約200mの区間である。調査方法は第2図で示した通り、県道の北側の拡幅予定地の水田に約20m間隔で12個のグリッドを設定した。基本的には2×2mの大きさのグリッドを設定したが、遺構等の検出状況により、拡張あるいはトレンチ調査に変更した箇所もある。

試掘調査の結果、西側の第11グリッド・12グリッドおよび東側の第9グリッド・10グリッドについては、遺物の出土もほとんどなく、遺構も検出されなかったが、第1グリッドから第7グリッドにかけての約100mの区間で、建物の柱穴の遺構あるいは瓦の地積層や遺物包含層が発見され、遺跡の範囲および遺構の所在が明らかになった。



第2図 試掘調査グリッド配置図



第3図 第2グリッド下層瓦群

### 第3節 全面調査の実施

#### 1. 調査経過

昭和57年の試掘調査に基づき、協議の結果、遺構等が確認された第1グリッドから第7グリッドにかけての約100mの区間について、全面調査を実施した。

全面調査の実施にあたって県竜野土木事務所と委託契約を締結し、昭和58年12月5日より、調査を開始し、3月16日に完了した。

検出した柱穴等の遺構については、道路の掘削深度が遺構面まで及ばない為、断ち割り等の調査は行っていない。遺構については、竜野土木事務所の配慮により、調査区全面に砂を置いて、保存を計った。

#### 2. 調査担当者

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 森内秀造 同 別府洋二

発掘調査補助 井上進次 竹山嘉夫 深沢良章 福井教 (関西学院大学)

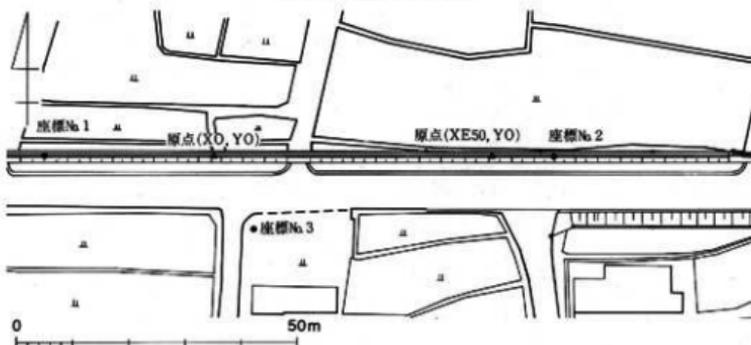
発掘作業委託 (一部) 三和共同建設

#### 3. 基準点の設定

今後予想される小犬丸遺跡の調査のため、オリエンターベイ社に委託して、基準点を3点埋設した。基準点の埋設位置及び基準点測量成果は下記の通りである。

点名	X	Y	H	備考
No. 1	-127.056.657	+14.746.966	45.382	埋石点
No. 2	-127.044.754	+14.708.843	44.896	埋石点
No. 3	-127.042.163	+14.798.911	45.232	金属標
発掘原点(X0・Y0)	-127.043.947	+14.739.835	44.582	発掘図根点
発掘原点(XE50・Y0)	-127.042.254	+14.789.805	44.318	発掘図根点

第1表 基準点測量成果表



第4図 基準点埋設位置

#### 第4節 遺物整理の実施

出土遺物の整理については、下記の通り実施した。

出土遺物

瓦 コンテナ330箱、 土器 コンテナ20箱

実施場所

兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課 兵庫県埋蔵文化財調査事務所

(神戸市兵庫区荒田町2丁目1の5)

実施年度

昭和59年度 水洗い・ネーミング・接合・復元・実測・拓本・トレース・レイアウト

昭和61年度 調査報告書執筆・刊行

整理補助

水 洗 西原美知代・橋本佳代子・松村テミ・米沢礼子

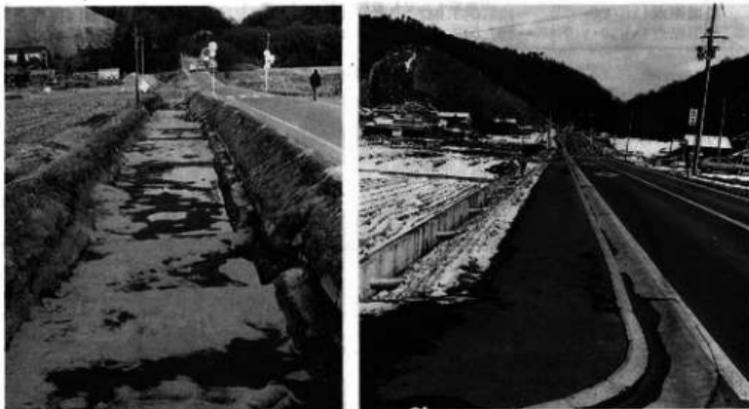
接合・復元 大西俊幸・金山恵子・木村淑子・二階堂康子・伴悦子・平井美鈴

実 測 岡村真理子・社領育代・中沢貴美子・原香代美・前田陽子・山根実生子

拓 本 茨木恵美子・植田弥生・中谷邦子・山根実生子

ト レ ース 社領育代・山根実生子

レイアウト 社領育代・斉藤海子子・中北敦子・山根実生子・和田寿佐子



第5図 砂による遺構の保護と道路拡幅完成後

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 遺跡の立地

小犬丸遺跡は龍野市揖西町小犬丸に所在する。揖西町小犬丸は龍野市域のうちで、最も西に位置し相生市との市境にある。小犬丸は以前のうすべ村・東村・小犬丸村が明治13年に合併して小犬丸となったもので、小犬丸遺跡そのものは、旧東村に所在する。

東村は、南に開口する谷の扇状地に形成された集落で、東村地区の南端には、古代山陽道と考えられている旧県道が東西に走る。この旧県道を挟んで南の字名を「大道ノ下」北の字名を「大道ノ上」と呼んでいる。今回の調査地は字名「大道ノ上」に含まれる。

龍野市域を横断する古代山陽道は、龍野・上郡断層に沿って走る。小犬丸遺跡もこの断層の上に立地しており、小犬丸遺跡の東の琴坂峠は断層によって形成された断層線谷である<sup>(1)</sup>。



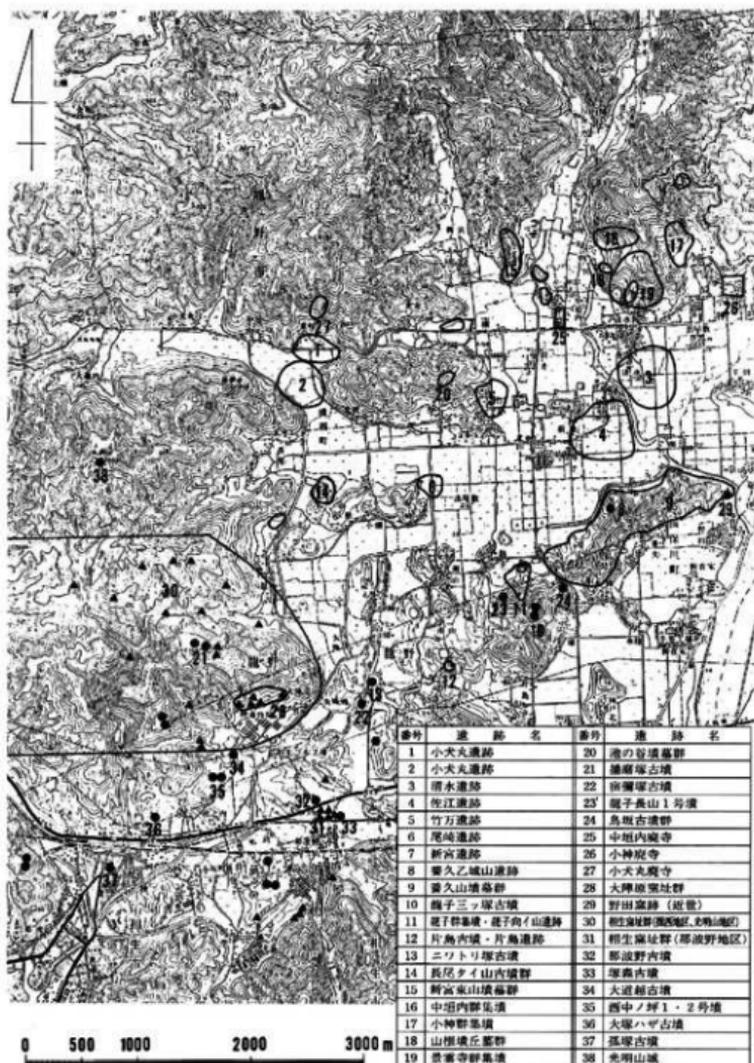
第6図 龍野市の位置

### 第2節 周辺の遺跡

周辺の遺跡として揖保川以西の遺跡を概観すれば、まず、縄文時代の遺跡としては、縄文後期の土器が採集された揖西町清水の清水遺跡がある。また、小犬丸周辺でも、南の小犬丸川の改修の際に縄文時代後期から晩期にかけての土器が採集されている。

弥生時代の遺跡としては、揖西町尾崎の尾崎遺跡<sup>(2)</sup>、同町佐江の佐江遺跡<sup>(3)</sup>があり、弥生中期の土器が採集されている。近年では、山陽自動車道建設に伴い龍子向イ山遺跡<sup>(4)</sup>（揖西町龍子）・養久乙城山遺跡<sup>(4)</sup>（揖西町佐江）・片島遺跡<sup>(5)</sup>（揖西町南山）など丘陵上から、弥生中期の住居址群が発見されている。

古墳時代の遺跡については、集落址の調査例は少ないが、古墳については、いくつかの注目されるものがある。まず、発生期の古墳として著名な養久山墳墓群<sup>(6)</sup>が龍野市と揖保川町にまたがる丘陵上に立地する。前期古墳としては揖西町龍子の龍子三ツ塚があり、波文帯神獸鏡が出土している。中期古墳としては、龍野町日山の西宮山古墳<sup>(7)</sup>があり、馬具を始め、埋納品の豊富さで知られる。同じ中期古墳として、小犬丸遺跡の南正面の丘陵に長尾タイ山古墳群<sup>(8)</sup>があり、馬鐙や形象埴輪などが、出土している。このほか、山陽自動車道関連で片島古墳群<sup>(9)</sup>・



第7図 小犬丸周辺遺跡分布図

龍子向イ山古墳群・龍子長山古墳群（以上龍野市）・笹田古墳（揖保川町）などの古墳が発掘調査され、当地方の古墳群の様相が次第に明らかになりつつある。また、生産地としては、南に下るが、相生市那波野に6世紀初頭から7世紀にかけての窯址群があり、昭和57年に発掘調査が行われている。

歴史時代の遺跡としては、古代山陽道に沿って、龍野町小神に白鳳期まで遡る瓦が出土した小神廃寺や揖西町中垣内に奈良時代の中垣内廃寺があるが、正式な調査は行われていない。また、小神廃寺に隣接して揖保郡衙の推定地がある。

小犬丸遺跡の西南の標高262.9mの光明山から派生する丘陵には、奈良時代から平安時代の須器の窯址群が存在している。窯址群の大半は相生市側にあるが、龍野市側に、これまでのところ、奈良時代の窯4基、平安時代の窯が6基発見されている。平安時代の窯はいずれも瓦陶兼業窯である。山陽自動車道関連で揖西町土師で奈良時代の窯址1基と平安時代の瓦陶兼業窯址2基の発掘調査をおこなっている。

中世の遺跡としては、光明山の頂上に、赤松政秀の居城といわれる光明山城がある。また、小犬丸遺跡の背後の山腹に中世瓦が散布しており、廃寺と考えられている。

## 註

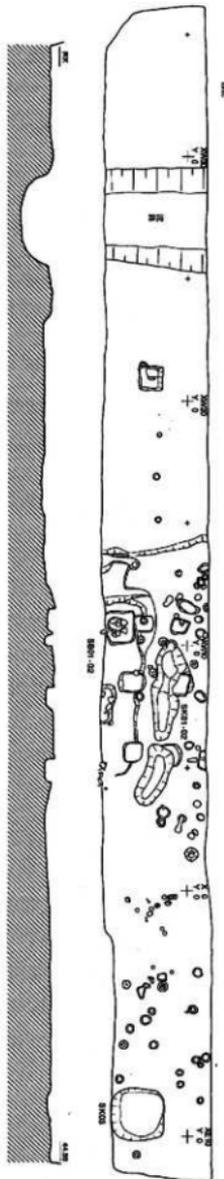
- ① 田中真吾・後藤博彌「龍野とその周辺の地質と地形」（『龍野市史』第1巻 昭和53年 龍野市）
- ② 志水豊章・森下大輔「尾崎遺跡」 昭和52年 尾崎遺跡発掘調査団
- ③ 渡辺昇・村上賢治「龍子向イ山」 昭和59年 兵庫県教育委員会
- ④ 昭和57年 兵庫県教育委員会発掘調査
- ⑤ 昭和55年 兵庫県教育委員会発掘調査
- ⑥ 近藤義郎他「養久山墳墓群」 昭和60年 兵庫県揖保川町教育委員会
- ⑦ 八賀晋「西宮山古墳 富雄丸山古墳出土遺物」 昭和57年 京都国立博物館
- ⑧ 上田哲也・河原隆彦・足川長「長尾・タイ山古墳群」 昭和57年 龍野市教育委員会
- ⑨ 註⑤に同じ
- ⑩ 註③に同じ
- ⑪ 渡辺昇・市橋重喜・村上賢治「龍子長山1号墳」 昭和59年 兵庫県教育委員会
- ⑫ 西口和彦・種定淳介「笹田古墳」 昭和57年 兵庫県教育委員会
- ⑬ 松岡秀夫「那波野丸山窯跡」（『兵庫県埋蔵文化財調査年報—昭和57年度—』 昭和60年 兵庫県教育委員会）
- ⑭ 森内秀造「相生の古代窯業」（『相生市史』第1巻 昭和59年 相生市・相生市教育委員会）
- ⑮ 種定淳介「大塚原古窯址群」（『昭和55年度兵庫県埋蔵文化財調査年報』 昭和58年 兵庫県教育委員会）

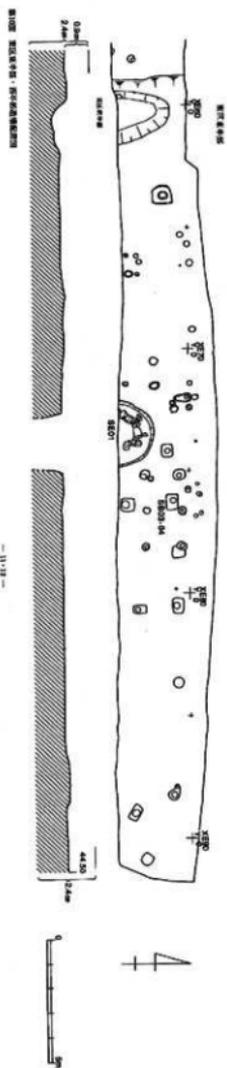
04 吉田東伍「大日本地名辞書」第2巻 明治33年

※遺跡名等は「龍野市史」を参考にした。

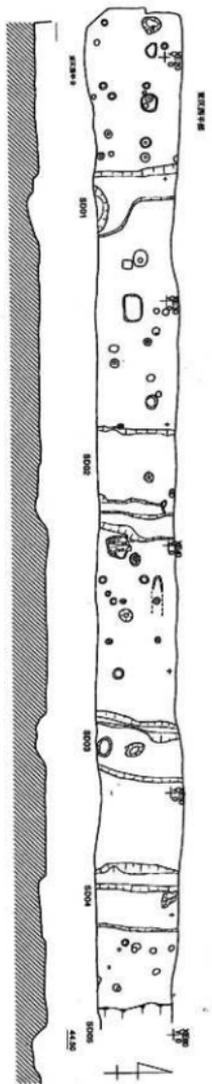


第8図 遺跡から南を望む





— 11 —



## 第3章 調査の成果

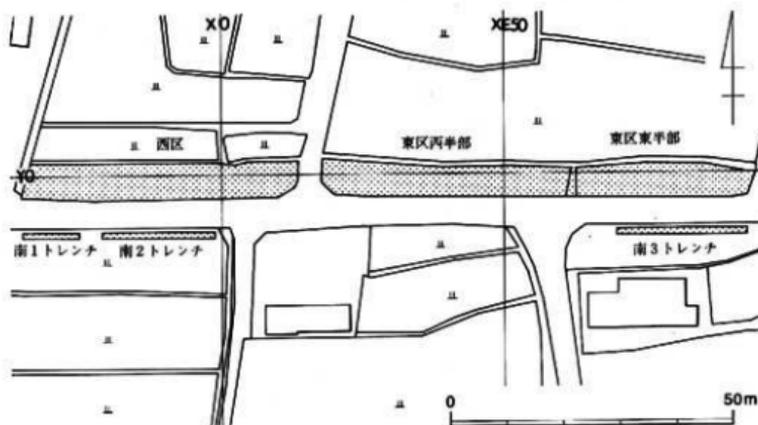
### 第1節 調査

今回の調査は、県道姫路・上郡線の拡幅工事に伴うものであった為、現道に沿った幅約4mの調査区となった。確認調査の成果を踏まえて、県道から北へ分かれる道で東西の調査範囲を設定し、西区・東区と呼称した<sup>(1)</sup>。なお、東区は便宜上、現地形で水田が大きく段差を持つ位置で東区西半部・東半部と分けている。また、県道の南側でも部分的に幅約1mの3本のトレンチを設定し、西から南1トレンチ・南2トレンチ・南3トレンチと呼称した。

調査は、現水田に伴う耕土・床土を小型重機によってとりはずし、それ以下を人力で掘り下げて行った。遺構の断ち切りは、遺構面に砂を入れて道路下に保存することになった為、極力避けた<sup>(2)</sup>。

#### 註

- (1) 今回の調査範囲には入っていなかったが、調査区の東西の外にも部分的に試掘溝を設けて、遺構がひろがらないことを確認している。
- (2) 西区と東区間の道路部分については、昭和59年度に排水管理設工事に立ち会って、ほぼ中央に瓦群と西へ落ちる段を確認している。
- (3) 調査区の基準線は、調査に沿って東西に任意に設定した。図上北や文庫中の北はこれによっている。なお、座標北とこの東西基準とは $N88^{\circ}3'39''E$ の角度にある。
- (4) 図上の土層断面図で特に註記のないものは調査区南壁を実測したものをを用いている。



第11図 全面調査地区設定図

## 第2節 西区の遺構

### 1. 土層

耕土・床土の下に暗灰褐色シルト層が堆積する。暗灰褐色シルト層は若干の須臾器・土師器を含んでいるが、時代を特定するには至らない。

この暗灰褐色シルト層を取り去ると、後述の通り、S B01の土壇の上面が顕れ、土壇を囲むように、上層瓦群（黒褐色シルト層）が広がる。上層瓦群（黒褐色シルト層）中には瓦のほか平安時代を中心とした遺物を大量に含む。また、土層中には、ブロック土を多く含んでおり、自然堆積というよりも、人為的に埋め込んだ堆積状態を示す。S B01倒壊後の整地層と考えられる。土壇の北側は上層瓦群一層であったが、土壇の東側と西側には、次に述べる通り、さらに下層に別の堆積土がみられた。

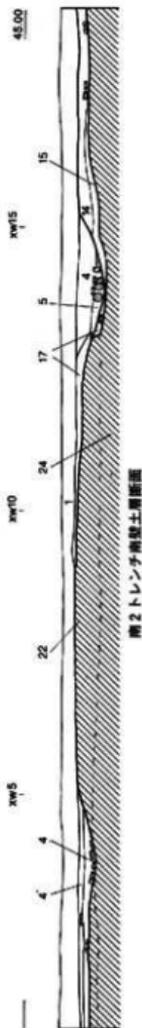
土壇の東側には上層瓦群（黒褐色シルト層）の下に暗灰褐色シルト層の堆積層がある。断面では、黒褐色シルト層と暗灰褐色シルト層の境目に、ごく薄い灰層が確認できたので、両土層の区分ができたが、発掘作業時においては、両土層の区分は容易ではなかった。このため、発掘にあたっては、上層瓦群（黒褐色シルト層）上面、上層瓦群（黒褐色シルト層）下面～暗灰褐色シルト層の2群に分けて、遺物を採集した。暗灰褐色シルト層中にも、平安時代の遺物を含んでいる。

土壇の西側は、東側と違い、複雑な堆積状態を示す。耕土・床土の下には西に灰褐色礫と東に灰褐色シルトの堆積土がみられるが、層序としては灰褐色礫層のほうが上層になる。この両土層の下を掘り下げると、基準線XW25前後の暗黄褐色礫をそれぞれの肩口として、西側に通路、東側には、土壇との間に浅い窪地をつくる。

上層瓦群（黒褐色シルト層）は、この窪地がほとんど埋まった後に堆積している。上層瓦群の下には下層瓦群（茶褐色シルト層）がある。下層瓦群は断面レンズ状の溝の堆積状況を示している。この下層瓦群の堆積は南2トレンチでも確認しており、土壇に沿った南北の溝であることは、ほぼ間違いなからう。南2トレンチでは瓦群とともに、20cm大の石が集積していた。下層瓦群にはわずかながら、平安時代前・中期の遺物を包含している。

下層瓦群の下には暗灰褐色砂礫層の堆積がある。暗灰褐色砂礫層中にも下層瓦群ほどではないが、瓦の堆積がみられる。暗灰褐色砂礫層以下の層序は暗灰褐色砂礫（シルト混じり）・暗褐色砂礫・黒褐色シルト・暗青灰色シルト・青灰色粘土となる。いずれの土層中からも瓦が断片的に出土している。

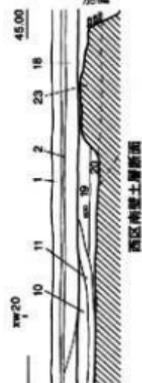
なお、土壇は灰褐色砂礫（シルト混じり）層から形成されているが、特に版築された形跡もないので、もとの地山面を削り出したものと考えられる。土壇と基準線XW25前後の暗黄褐色礫の間の窪地はこの土壇を造る為に削り出した結果できたものと考えてよからう。



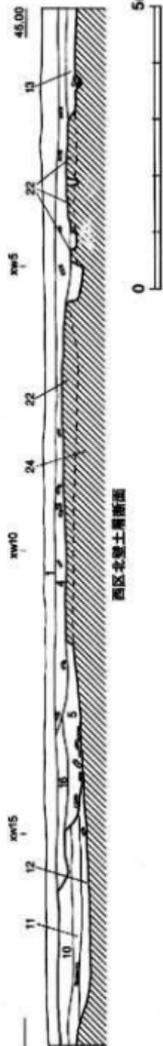
南2トレンチ南壁土層断面



西区南壁土層断面



西区南壁土層断面



西区北壁土層断面



- 20. 青灰色粘土
- 21. 黒褐色礫
- 22. 灰褐色砂礫(シルトを含む)
- 23. 暗黄褐色礫
- 24. 黄褐色シルト

- 10. 暗褐色砂礫
- 11. 黒褐色シルト
- 12. 暗黄褐色シルト
- 13. 暗黄褐色砂礫
- 14. 黄茶褐色砂礫(シルト混り)
- 15. 暗褐色シルト(シルト混り)
- 16. 黄褐色シルト
- 17. 暗褐色シルト
- 18. 暗黄褐色砂礫(水レキを含む)
- 19. 暗青灰色シルト

- 1. 粘土 床土
- 2. 床土 暗褐色シルト
- 3. 暗黄褐色シルト(上部互層)
- 4. 黄褐色シルト(泥多量を含む)
- 5. 暗褐色シルト(下部互層)
- 6. 暗褐色シルト
- 7. 床土 暗褐色シルト(レキ混り)
- 8. 暗黄褐色砂礫(シルト混り)
- 9. 暗青灰色シルト

第12図 西区・南2トレンチ土層断面図

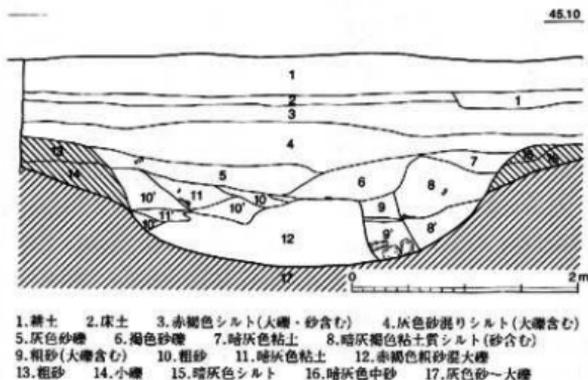
## 2. 流路 (第13図)

調査区の西端で調査区を南北に横切って検出された。上幅約4m、深さ1mをはかり、礫層を切り込んでいる。現在の水路は更に西側をながれているが、この流路も礫層を通過してかなりの湧水が見られる。流路西半の埋土は、砂礫と一部粘土の瓦層になっておりその中に瓦片が含まれている。下層は大礫層となる。東半ではその大礫層を切り込んで砂とシルトの層が見られ、中には12世紀代の羽笄片が含まれていた。流路が埋没したその上面には、礫を多く含んだ層が覆っているが、整地層の可能性<sup>3)</sup>がある。

流路の更に西側では黄褐色粘土の所謂地山面は確認されているが、遺構は一切検出されていない。この為、この流路を遺跡の西限と考えてよからう。

### 註

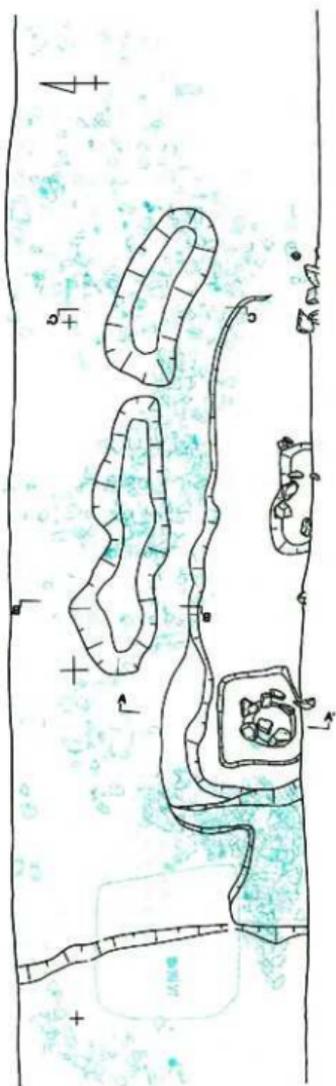
- (5) 流路の東側で高さ20cm程の砂礫の高まりが見られ、高橋美久二氏から築地の可能性があるとの教授を得た。もしそうであるなら、この流路は築地外の側溝としての機能があてはめられよう。



第13図 流路北壁土層断面図

## 3. 上層瓦群 (第14図)

西区のはは中央に瓦が集中して出土する箇所があり、確認調査で上下2層に分かれることがわかった為、上層瓦群と呼称した。上層瓦群はL字形に分布しており、その内側には見られない。上面の一部には焼土がひろがり、炭化材片が見られたことから、全てが屋根から落ちたままの状態ではなく、整地されたものと思われる。瓦層を切り込んだ遺構は確認できなかった。



ブルーは上層瓦群  
は緑土



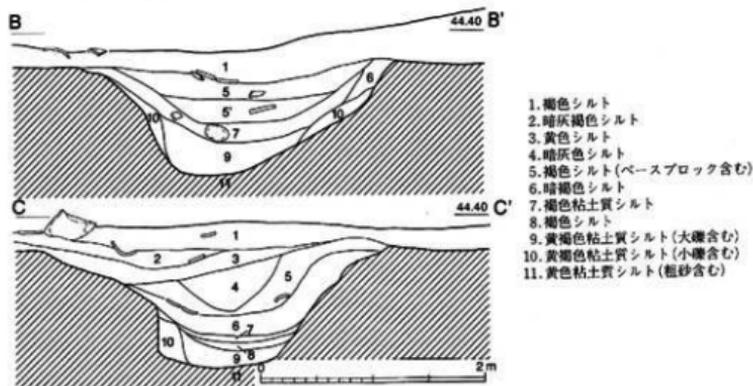
第14図 上層瓦群、SB01、SK01・02

#### 4. S B01 (第14図)

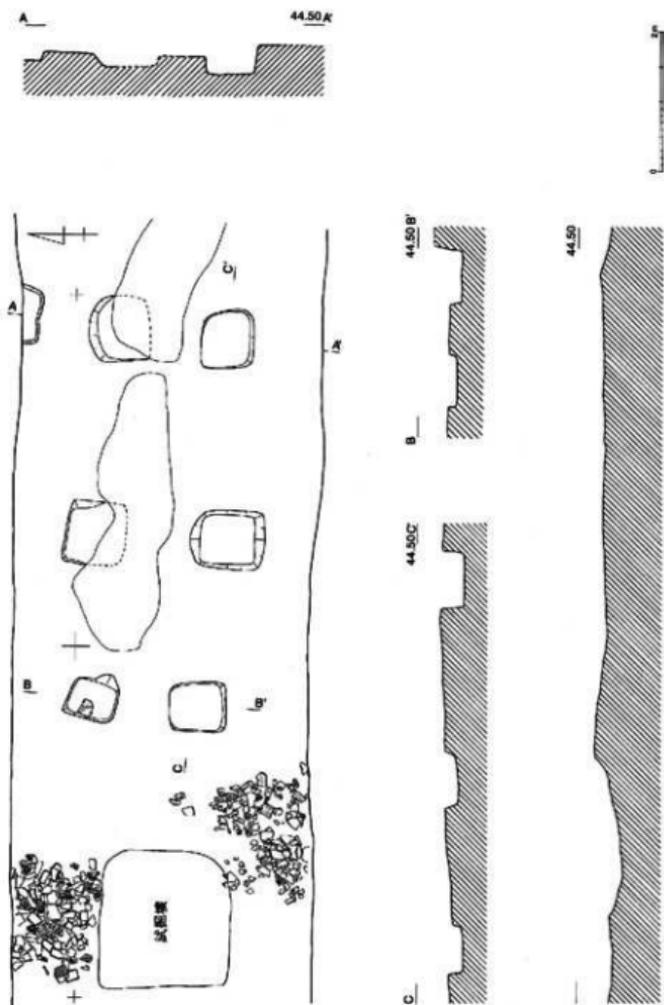
上層瓦群をとり除くと、瓦群に囲まれていた内側が一段高い基壇状を呈しており、上面に集石のある落ち込みを3ヶ所検出した。基壇状高まりは東西上端幅約8mの方形をなし、北端部にあたる。上面を削平されていると考えられ、現状での高さは約20cmを測る。この基壇状高まりは、版築等の地固めは行われず、ほとんどが地山を整形して作りだされており、化粧石などの外装は見られないことから、土壇と呼ぶ方が良いかも知れない。壇上には3ヶ所の柱跡を確認した。やや角度を振っているが、ほぼ東西に並び、東の2基は調査区外に過半を残している。西端のものは、一辺約1.2m、深さ約20cmの隅円方形の穴に約10個の根石を入れている。礎石そのものは存在しておらず、獨立柱の根がらみの可能性もあるが、ここでは礎石の根石としておきたい。柱間は約3.3m。基本的の上層瓦群はこの建物に伴うものと考えている。

#### 5. S K01・02 (第14・15図)

上層瓦群下で検出、S B01の北辺を囲む様に東西に連っており、当初溝と考えていたが、2基に分かれることがわかった。更に、S K01は底の高低から東西に分かれる可能性をもつ。S B02の柱穴掘り方を切っている。S K01は東西約4m、南北約1mの東西に長い形をしており深さは約0.4mであるが、中央部が約0.1m高くなっている。S K02は東西約2.5m、南北約1mで東端がやや南向きに曲がっている。深さは約0.4m。S K01・02とも南側の壁は北側のものと比べて急であり、垂直に近い。埋土の堆積状況はレンズ状を呈しており、一時に埋められたものではない。またS K02では薄い炭層が確認された。埋土を水洗選別して遺物をとりあげたところ、多数の須恵器・土師器・瓦に混じって、緑釉陶器片や水晶玉が出土している。



第15図 S K01・02土層断面図



第16図 下層瓦葺、SB02

## 6. 下層瓦群 (第16図)

上層瓦群をとり除くと、その西側の部分では、10cm~20cmの遺物包含層を挟んで更に一群の瓦が検出された。瓦の集積の状況は、上層瓦群とは異なり、幅約2mでほぼ南北に帯状に分布する。断面観察の結果、幅約2m、深さ約20cmの溝内に堆積したものと考えられるが、溝の西側の肩は平面的に確認されなかった。

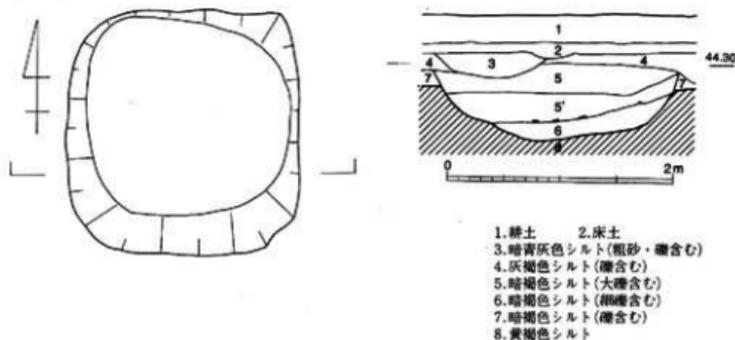
この下層瓦群は瓦群の東側で検出されたS B02に伴うものと考えられるが、S B02の東側では一層しか瓦群を確認していないことや、下層瓦群の西側に築地塀の存在が想定されることから、今回の調査では結論は保留する。

## 7. S B02 (第16図)

上層瓦群下で検出され、下層瓦群の東にある掘立柱建物址である。東西約6mの2間、南北2間以上で、柱掘り方は一辺約80cmの方形状を呈している。柱痕は確認できなかった。S K01・02に切られており、また一部掘り方がS B01に伴う土壇にかかっている。深さが浅いことから、本来かなり上面から切り込まれていたものがS B01の土壇を作り出す際に削られ、更に後世削平を受けたものと考えられる。

## 8. S K03 (第17図)

西区の東端で確認調査の際に検出された。一辺2m強の隅円方形を呈しており、包含層から切り込んで約0.5mの深さをもつ。埋土の中層から、完形の平瓦数枚と、鬼瓦片が出土している。平瓦は一部土壇に集水する機能を持つものかも知れない。土壇自体は人為的に埋められた可能性が高い。



第17図 SK03

### 第3節 東区西半部の遺構

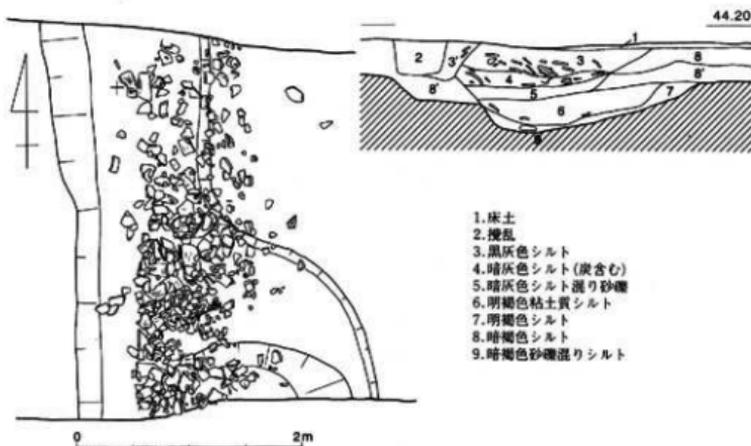
#### 1. 上面の遺構

表土を取り除いた段階でもいくつか遺構が確認されているが、全てがS D01とS D02の間からの検出である。調査区と平行に調査区のほぼ中央を幅40～90cm、深さ10cmの溝が走る。溝の両端は明確ではないが長さ約17m続く。溝内の堆積土は表土に類似する。溝内から羽釜の小片が出土している。その溝の南側では直径40cm弱の焼土面が検出され、砥石が出土している。

#### 2. S D01 (第18図)

東区西端から約6.5mで検出された南北溝で、現水田に伴う土管理設の際に一部攪乱を受けている。溝の幅は約1.3m、深さ0.4mで、西側の肩がやや急な傾斜をもつ。埋土中には多量の瓦片が含まれており、大きく3層に分かれる。瓦片は西区のものに比べて細片が多く、特に最上層の瓦は細かく整地の際に埋め込まれた可能性が高い。溝内から鉄製刀子が出土している。

S D01の西側からはいくつかの柱穴が検出されているが、柱穴内からの遺物の出土が見られないため時期を決定しかねる。東西2間南北1間で柱並びが通っているが、各々の規模に差がある。西区と東区を分ける現道に水道管を埋設する際に立ち会ったところ、瓦群や石及び西へ落ちる基壇状の高まりを確認している。この瓦群とS D01間に瓦葺建物があったと想定されるが、調査区内では水田にする際に大きく削平されている。

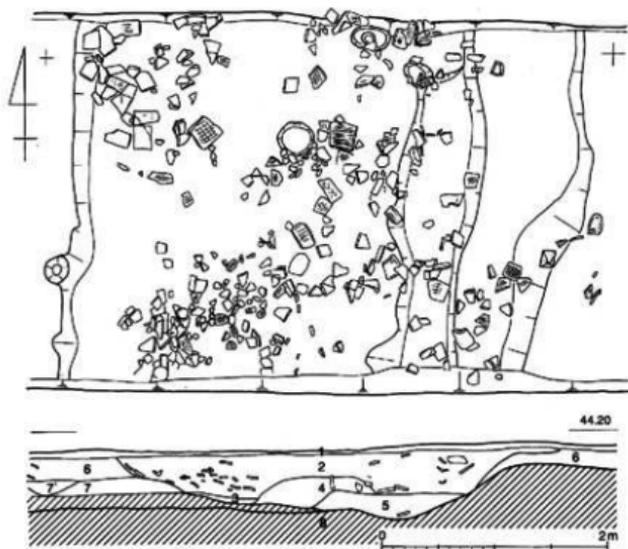


第18図 S D01

### 3. S D02 (第19回)

S D01から約9.5mの位置にある南北溝で、幅約4.5m、深さが0.5mある。溝の底東側は更に一段低くなるため、東側の傾斜が急になる。溝内には瓦が層をなして堆積しており、個々の瓦片も比較的大きい。

溝の東側ではいくつかの柱穴が見られるが、建物を想定できるまでには至っていない。西区のS B01で検出された根固めをもつ柱穴に類似するものもあるが、出土した土器細片から見て12世紀代以降のものと考えられる。



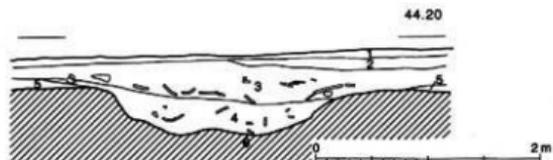
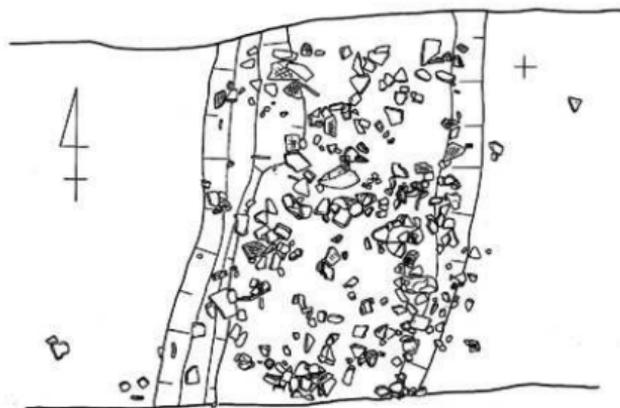
1. 床土
2. 褐色シルト
3. 明褐色粘土質シルト
4. 明褐色シルト
5. 灰色粘土質シルト
6. 暗褐色粘土質シルト
7. 暗褐色シルト
8. 暗褐色砂礫

第19回 S D02

#### 4. S D 03 (第20図)

S D 02から約9mの距離をもつ南北に走る溝である。調査地区内では方向をやや東へふる傾向が見える。溝は西側がわずかに急な傾きをもってたちあがる。幅2.4m、深さ0.4mを測るが、底の高さは一定ではない。

溝内にはやはり瓦が多く堆積しているが、ほとんどのものが細片である。



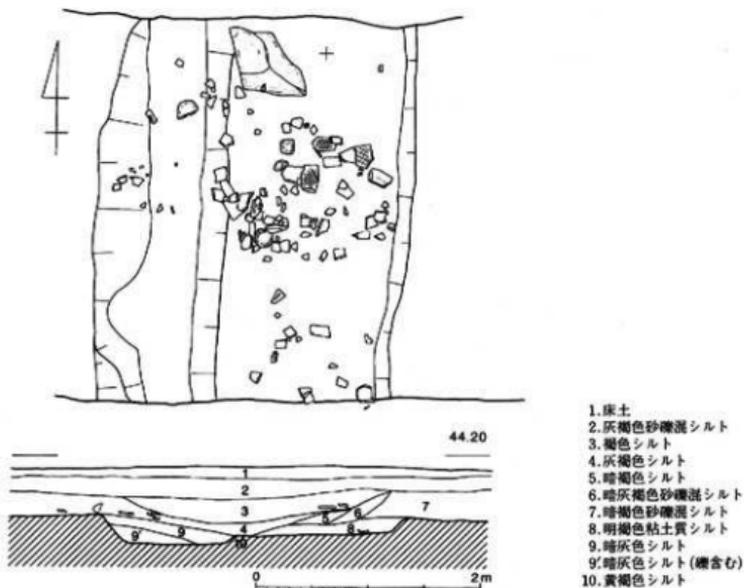
1. 床土
2. 灰褐色砂礫混シルト
3. 暗灰褐色シルト
4. 褐色シルト
5. 暗褐色シルト
6. 暗褐色砂礫混リシルト

第20図 S D 03

### 5. S D04 (第21図)

S D03と約4mの距離をおいてある南北溝で、幅約2.8m。西側が更に一段深くなっておりその部分の深さが0.25mある。埋土中には他の溝と同様瓦片が含まれているが、他の溝と比較して量は少ない。また一辺50cm程の石が溝底に見られる。

溝底のほぼ中央付近で直径10cm程の漆喰と考えられるものを検出している。



1. 床土
2. 灰褐色砂礫混シルト
3. 褐色シルト
4. 灰褐色シルト
5. 暗褐色シルト
6. 暗灰褐色砂礫混シルト
7. 暗褐色砂礫混シルト
8. 明褐色粘土質シルト
9. 暗灰色シルト
9. 暗灰色シルト (燻含む)
10. 黄褐色シルト

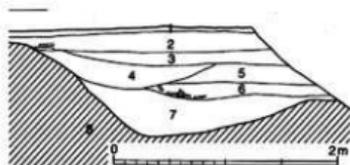
第21図 S D04

### 6. S D05 (第22図)

東区を東西に大きく分ける溝である。溝を挟んで約30cm東側が低くなる。またこの溝以東では瓦の出土が極めて少なくなる。

東側を擾乱で失われているため、詳細な規模はわからないが、幅約2m、深さは西側からでは約0.5mの規模をもつものである。埋土中にはやはり瓦を多く含んでいるが他の溝のように層をなしているものではない。

44.20



- 1.床土
- 2.灰褐色シルト(砂含む)
- 3.明褐色砂質シルト
- 4.明褐色シルト
- 5.褐色中砂
- 6.褐色粗砂
- 7.暗褐色中砂
- 8.黄褐色シルト

第22図 SD05土層断面図



第23図 SD01(東から)

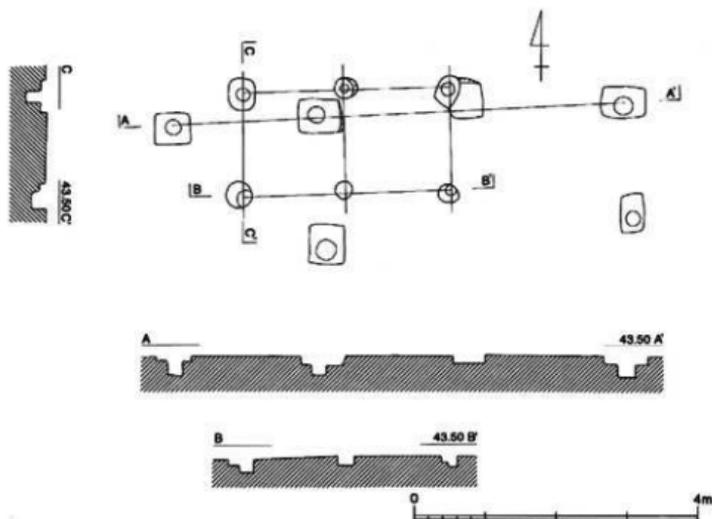
#### 第4節 東区東半部の遺構

##### 1. S B 03 (第24図)

東区東半で検出された方形の掘り方をもつ建物址と思われる。東西方向の3間しか確認されていないが、調査区の南北にひろがるものと考えられる。柱間距離は2.1~2.2mである。更に2基の方形掘り方の柱穴が近接するが、ここでは別の建物の可能性を示すに留める。個々の掘り方は60cm×50cmの長方形を呈しており、長軸方向を東西に揃えている。掘り方自身の深さは10cm程しか残されていないが、直径約25cmの円形の柱根部分のみが更に30cm程深くなっている。本来この様な形態をもっていたものか、建物の重量によってシルト質の地盤が沈降したものが判別できなかった。根石等は見られない。周辺からはほとんど瓦が出土していないことから、瓦葺の建物とは考えられない。

##### 2. S B 04 (第24図)

一部S B 03の柱穴を切ってつくられている円形掘り方の柱穴をもつ建物址である。東西は2間、南北は調査区内では1間分しか確認されてなく、更に南北とも調査区外へ続く可能性がある。



第24図 S B 03・04

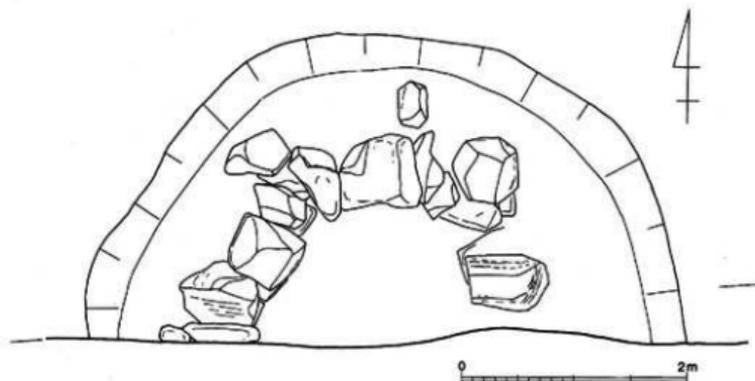
柱間距離は0.75m、個々の柱穴は直径が24~40cmと較差がある。深さは約20cmである。遺物は出土しなかった。

### 3. S E01 (第25図)

東区東半で検出された石組み井戸である。過半が現県道下であり、湧水が激しく県道路肩が崩壊する恐れがあるため、完掘することができなかった。

掘り方は直径約5.3mの円形を呈する。石組みの内法は現状で直径約2mである。石材は角のある周辺で普通に見られるもので、大きさも大小があり一定していない。小口面を内に向けて積まれているが、5段約1.5mの深さまでで見る限りでは粗雑に積まれている。井戸内埋土

43.80



第25図 S E01

には転落石も含めて大小の石が詰まっております人為的に埋められた可能性が高い。埋土は全て水洗選別を実施したが、瓦片以外の遺物はなく、井戸埋没時期の下限をおさえることはできなかった。また現状保存のため掘り方を断ち割ることも行わなかった。



第26図 琴坂から見た遺跡

## 第4章 遺物

### 第1節 土器

#### 1. 土器の分類

出土遺物の大半は、奈良・平安時代のものであるので、ここでは、奈良・平安時代の遺物に限定して、説明を加えておきたい。説明の都合上、各器種について次の通り便宜的に分類しておく。

#### 土師器

出土土師器の種類としては、皿・杯・碗・羽釜・鍋などがある。皿については、高台をもたないものと高台をもつものがある。前者は1～6（第一図）のように、手づくねによるものと29・85・86（第一・二図）のように体部と底部が明確に分かれるものがあるので、それぞれ、皿A・皿Bと区分しておく。皿Bについては、底部糸切りのものとそうでないものがあるが、出土数が少ないので敢えて細分はしていない。高台をもつものについては、10～15（図版一）のように底部糸切りによるものと69（第二図）のように付高台を付すものがあるので、皿CⅠと皿CⅡに分けておく。

碗については、26（第一図）のように付高台を付すものを碗A、糸切りの平高台をもつものを碗CⅠとする。碗Cのうち、100（第三図）のように外観上高台外面は高いが、内面は屈曲して段をもつものを特に碗CⅡとしておく。

#### 須恵器

種類としては、杯・碗・皿などがある。杯については、平底のものを杯A、奈良時代の付高台をもつものを杯Bとする。碗については、80・88・130（第二・三図）のようにヘラ切りの底部に付高台を付すものを碗A、53（第二図）のように底部ヘラ切りの平高台をもつものを碗B、糸切りの平高台をもつものを碗C（例えば、55など）とする。

#### 2. 出土土器の概要

##### 〔西区〕

##### 黒褐色シルト層〔上層瓦群〕（第一・二図）

#### 土師器

##### 皿A（1～6）

いずれも手づくねによるものである。作りは余りていねいではなく、ひずんだものが多い。1・4～6は口縁部をつまみあげ、上方にわずかに立ち上がらせている。1の胎土は砂粒を多く含んでいる。2は口縁部をつまみあげ、端部を内側にわずかに折り曲げている。

##### 皿B（29）

底部糸切りである。体部下半を強く横なでしている。

#### 皿C I (7~15)

底部はいずれも糸切り痕を残す。高台の高さによって、2つのタイプに分かれる。1つは高台の高さが低く、器高が2.5cm前後のもの(10・11)、後の1つは高台の高さが高く器高が3.5cmのもの(12~15)である。皿の口径は両者とも11cm前後である。高台の径は小さいもので4cm大きいもので6cm程度である。胎土はいずれも精良である。

#### 碗C I (17・18・20~23)

底部糸切りの平高台をもつ碗である。ほとんどが底部の破片で、口縁部まで復元できたのは18だけである。底部の形態としては、高台径が大きいもの(20・21)と小さいもの(22・23)がある。18は口径10.6cm、器高4.4cmの小型の碗である。17は皿になる可能性がある。

#### 碗C II (16・19)

16の高台側面はやや内側に傾く。19の体部はほぼ直線的に斜め上方に立ちあがる。

#### 碗A (24~28)

高台の高さが高く、外側に踏ん張る。27は形態としては皿と呼ぶべきであろう。24・25も皿になる可能性があるが、ここでは、一応、碗Aに包括しておく。

#### 杯 (30~35)

30~32は胎土に砂粒を多く含み、底部内面に凹凸があり、器壁はやや厚い。33~35はろくろ成形によるもので、底部にヘラ切り痕を残し、器壁も薄い。

#### 羽釜 (39・40)

口縁部は短く直立し、断面四角形のつばをもつ。頸部に指押さえ痕跡が残る。外面にハケで整形した跡が残る。

#### 甕 (41)

口縁部が大きく外反し、肩の張りが無い器形である。胎土に砂粒を多く含む。

#### 須恵器

#### 碗C (42~52・54~56)

ほとんどが底部片である。底部径は5.5cmから6.5cm前後である。42は高台の高さが8mmとやや高いが、それ以外は4mm前後の高さである。54は底部径8.2cmと大きく、体部が直線的に伸びる。55は底部径に対して口径が大きく、体部がやや開き気味に伸びる。また、口縁部はわずかに外反する。

#### 碗B (53)

底部ヘラ切りの碗である。底径は7.2cmとかなり広い。

#### 杯A (36~38)

36と38は口径に対して、底部径が小さく体部が斜め上方に伸びる。38は体部と底部の境が丸

く不明瞭である。37は前者に比べ底径が大きく、体部はやや直上方向に伸びる。

その他 (57-59)

壺の口縁部 (57) と底部 (60) がある。いずれも、近くの相生窯址群中で見られる双耳壺の一部であろう。このほか蓋 (58) と杯 (59) がある。

灰釉陶器 (62-63)

皿 (63) はわずかに外反する口縁部のみであるが外面につけがけの跡が残る。瓶 (62) の外面はハケによる施釉が行なわれ、頸部は体部の上に乗せて接合している。

越州窯青磁 (61)

底部は削り出しの蛇の目高台である。高台側面はへら状の工具で斜めにカットされている。内面は目あとが残る。全面施釉であるが、内外面とも釉が剥落している。外面は灰白色、素地はにぶい橙色である。高台の置付けは露胎である。

黒褐色シルト層下面～暗褐色シルト層 (第二図)

土師器

皿 C I (65-68)

いずれも高台の高さが低く、器高が2cm前後の皿で、口径は10cm前後である。胎土は68を除いて良好である。

皿 C II (69)

皿 C I と同様、ほぼ水平に開く皿部をもつが、底部に付高台を貼り付ける。口径は11cm、器高は2.5cmである。

碗 C I (70-75・77・78)

底部糸切りの平高台をもつ碗である。74・75の高台は側面が内側に傾き、断面が台形状になっている。体部は直線的に斜め上方に立ち上がる。72と73の体部は高台側面からカーブを描いて立ち上がり、体部と高台の境は不明瞭である。また、78は高台径7.5cm、高さ7mmの高台をもち、体部はゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口縁部付近で角度を変えて上方に立ち上がらせる。口縁端部はわずかに肥厚する。口縁部外面に4条の沈線を通らす。

碗 C II (76)

底部径は9cmとやや大きい。体部は高台からやや外側を開いて立ち上がる。

碗 A (79)

外側に踏ん張るやや高い高台をもつ。高台の貼り付けの痕跡をそのまま残す。

須恵器

碗 A (80) ・杯 B (81) や環状のつまみのある蓋 (82) ・鉢 (84) などが出土している。80はへら切りの底部に短い付高台を付す。内面には整形時のなでによる段が残る。

#### 暗茶褐色シルト層〔下層瓦群〕(第二図)

土師器の器種としては皿B(85・86)と碗C(87)がある。87は高台側面を内側に傾けた底部をもち、体部は底部から緩やかなカーブを描いて立ち上がる。

須恵器には、碗A(88)や双耳壺の口縁部(89)がある。88はへら切りの底部に短く外側に踏ん張る高台をもつ。体部はやや直線的に上方に立ち上がる。89は相生窯址群中にみられる双耳壺の一部であろう。

#### SK01・02(第三図)

##### 土師器

##### 杯(102~104)

体部がやや開き気味のもの(102・104)とやや深さが深く、体部と底部の境が丸くなるもの(103)がある。いずれも底部はへら切りである。

##### 皿CⅠ(90~92)

高台は8mm前後の低いもの(90)と3cm前後の高いもの(91・92)がある。

##### 碗CⅠ(93~96・99)

95・96・99は内面に段をもつ。99は高台の直上から直線的に立ち上がり、口縁部を外反させる。93・94は底部内面に段をもたない。

##### 碗CⅡ(97・100)

100の体部は直線的に立ち上がり、口縁部をわずかに外反させる。97の底部は9.4cmと大きく高台側面は直立する。

##### その他(98・101)

付高台をもつ98・101がある。いずれも上部を欠いているが、98は碗、101は皿になるものと思われる。

##### 須恵器

##### 杯A(105・106)

105は体部と底部の境が丸いが、106は体部と底部の境が明瞭で、体部はやや開き気味に直線的に斜め上方に立ち上がる。

##### 碗C(107~110)

いずれも破片で底部から口縁部まで復元できるものはないが、底部の高台径は6cm前後で、110は外反する口縁部をもつ。

##### 壺(111)

口縁の端面が水平である。体部は外面に平行叩き、内面に青海波文を残す。

##### 緑釉陶器(112~114)

113と114は軟質の緑釉陶器で、釉は淡いうぐいす色に発色する。素地の外面は灰白色に還元しているが、断面内部は黒く炭化した状態のまま残り、充分還元していない。内面に目あとが残る。112は前者よりもやや淡いうぐいす色に発色する。焼きも硬質で、須恵質である。

#### SK03 (第三図)

##### 須恵器 (131・132)

糸切りの平高台をもつ底部が出土している。131は底部径が5.7cmと小さいが、132は高台径が8cm、高台の高さ0.9cmと大きい。131は明らかに椀であるが、132は鉢の底部になる可能性がある。

#### 流路 (第五図)

土師器・須恵器のほか瓦の破片が大量に出土した。土師器の大半が羽釜・鍋である。

羽釜には、189・190のように口縁部が直立し、体部の張りがないものと191・192のように口縁部が内傾し、体部が丸く張りをもつものがある。両者とも内外面に指押さえによる凹凸がある。また、189・191は内面に横ハケの跡を顕著に残す。

鍋 (193～197) は頸を「く」の字形に屈曲させ、口縁部を上方に立ち上がらせる。口縁端面は平坦である。羽釜と同様、内外面に指押さえによる凹凸と内面は横ハケの跡を顕著に残す。

#### 〔南2トレンチ〕 (第三図)

##### 土師器

##### 椀C I (119・121)

高台の高さが低く、体部の立ち上がりの角度が緩やかなもの (119) と高台の高さが高く、体部の立ち上がりが急なもの (121) がある。

##### 椀C II (120)

高台側面はわずかに内傾し、体部は直線的に斜め上方に立ちあがる。

##### 皿C I (117)

底部の径が6cmとやや広く、皿部の立ち上がりもやや急である。皿の中央部はくぼむ。

##### 皿B (115・116)

やや大きいものと小さいものがある。磨滅のため底部の切り離しについては不明である。

##### 黒色土器 (118)

内黒の黒色土器であるが、口縁部を欠く。高台は断面三角形の付高台である。

##### 須恵器

##### 蓋 (125・126)

126は口縁部を丸く納め、あまり屈曲させない。125は天井部と口縁部の境の稜が甘い。口縁端部はほとんど屈曲させず、外側に開く。

碗A (130)

碗Aは口径18.2cm・器高8.0cmの大型の碗である。体部はほぼ直線的であるが、成形時の凹凸が著しい。底部はヘラ切りの後、付高台を付す。

碗C (124)

底部径8cmの大型の碗で、体部下半は屈曲して段をもつ。

その他 (127~129)

杯B (128)・鉢 (129)・皿 (127)がある。129は底部糸切りの平高台をもつものと思われる。

緑釉陶器 (122)

淡い黄色に発色した緑釉陶器である。素地は灰白色で、土師質の軟陶である。内外面とも施釉している。

[東区] (第四園)

SD01 (133~142)

土師器皿C Iの133~136はいずれも高台の高さが1.5cmと高い。139は皿部の中央にくぼみをもつ。また、付高台をもつ皿C II (140)も出土しており、体部はほぼ水平に近い。碗は付高台をもつ碗A (137)、糸切りの平高台をもつ碗C I (141)及び碗C II (142)がある。

SD02 (143~151)

143は底部糸切りで、高台をもたない。碗C Iはいずれも底部片で、底部内面に段をもつもの (151)ともたないもの (146~150)がある。また、144は底部糸切りで高台をもたない。145は外側に長く踏ん張る高台をもつ。

SD03 (152~168)

皿C Iについては、152のように高台径も小さく、高さも低いものと154のように高台径も大きく、高さも高いものがある。155はわずかに外反する口縁部をもつ。碗については、碗C I (157~159・161)と碗C II (160)が出土している。

須恵器については166のように、底部径が8cmあり、碗よりも鉢の底部と思われるものや蓋 (165)・杯A (162)・杯B (164・167)などが出土している。また、168は壺の底部であろう。

SD04 (169~173)

土師器としては、169・170・171がある。いずれも糸切りで、169・171は皿になると思われるが、170は碗になると思われる。須恵器としては杯B（172～175）の出土がある。172は壺の底部であろう。

#### SD05（174～175）

須恵器杯Bの底部（174）や壺の底部（175）が出土している。

#### 東区上層（176～183）

手づくねの土師器皿A（176・177）、杯（178・179）がある。178・179は胎土に砂粒を多く含み、底部内面に成形時の凹凸を残す。須恵器は杯B（181）、瓶の底部（182）、蓋（180）や糸切りの壺の底部（183）などが出土している。



第27図 SB01柱跡

## 第2節 瓦

本調査では、西区の上・下層瓦群及び東区のSD 01からSD 05で多量の瓦が出土した。瓦には、出土量の大半を占める丸瓦・平瓦の他に軒丸瓦・軒平瓦・鬘斗瓦・鬼瓦がある。

以下では、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦（鬘斗瓦・鬼瓦）の順に観察を進めることにする。なお、軒瓦の型式番号については、軒丸瓦をNM、軒平瓦をNHの頭文字であらわし、数字番号は任意にあたえたものである。

### 1. 軒丸瓦（第六図、第七図4～6、図版十一～5）

今回出土した軒丸瓦は総数56点である。瓦当文様によって分類した結果、4型式に分かれる。NM 01（第六図、図版十一～3）単弁13葉蓮華文軒丸瓦。やや突出する中房に1+5の蓮子を置く。蓮弁は子葉とそれを囲む1重の輪郭線で表現される。外縁は素文の直立縁である。胎土は緻密で砂粒が少ないものと、きめが粗く細砂を含むものがある。前者は焼成がやや堅緻で黒色を呈し、後者は軟質で灰褐色を呈する。

NM 01は、「播磨国府系瓦」の「古大内式」と呼称されている軒丸瓦に属するが、古大内遺跡出土の軒丸瓦より蓮子が1粒少ない。「古大内式」軒丸瓦は、ほかに17遺跡からの出土が知られており、そのうちNM 01と蓮子数を同じくするものは播磨国分寺・落地遺跡にみられる。

NM 02（第七図4、図版十一～4）単弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の1/3程の破片である。文様構成は、NM 01に類するものと思われるが、子葉の先端に切れ込みがはいる点が異なる。NM 01よりやや小振りである。灰白色を呈し、焼成はやや堅緻。胎土には2mm前後の砂粒を多く含む。

NM 03（第七図5、図版十一～5）単弁8葉蓮華文軒丸瓦。中房は小さく、圏線で囲まれる。中房の1部を欠くため蓮子数は不明である。蓮弁は先端の尖る子葉を2重の輪郭線で囲むもので、弁間に珠文を配する。外縁は素文の直立縁。色調は灰褐色を呈し、焼成は軟質である。胎土はやや粗く細砂を多く含む。

NM 03は、「播磨国府系瓦」の「毘沙門式」と呼称されている軒丸瓦である。<sup>(3)</sup>

NM 04（第七図6）複弁蓮華文軒丸瓦。瓦当面の下端部をわずかに残す小破片である。蓮弁は子葉の間に後縁がはいるものである。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。胎土はやや粗く、細砂を多く含む。薄手の軒丸瓦である。

製作技法 丸瓦部が遺存するものはNM 01のみである。したがって、以下ではNM 01の製作技法についてみていくことにし、NM 02以下については補足的に述べることにする。瓦当と丸瓦との接合方法は、瓦当裏面上半に半円弧状の溝をつけて丸瓦を差し込み、接合部の内外面に粘土を補充するものである。差し込まれる側の丸瓦の先端部は、凹面側を削り落としている。また、少数ではあるが丸瓦凸面に刻み目をつける例が認められる。接合の際、粘土を補充した部分は、丸瓦部内面を縦方向になでつけており、外面を縦方向のヘラケズリで仕上げている。

る。また、接合ののち、瓦当裏面を縦方向のヘラケズリで調整する。なお、NM 03の場合も瓦当裏面に溝がつけられており、同様の接合方法を用いていたものと思われる。

NM 01では、瓦当外周の下半に范端の痕跡が認められ、瓦范が外縁外周に及んでいたことが知られる(図版二十一①)。范端の痕跡より瓦当裏面側には、横方向のヘラケズリが施されている。瓦当外周と瓦当裏面のなす角度はほぼ直角を呈し、境界は鋭い稜をなす。また、瓦当外周に調整が及んでいない例には、范端の位置にひれ状の突線がめぐっている。これらの痕跡から、瓦范の上にさらにもう1段枠を置き、瓦当外周を規定したものと推定される<sup>(4)</sup>。

## 2. 軒平瓦(第八・九図、図版十一)

今回出土した軒平瓦は65点である。瓦当文様によって分類した結果、7型式8種に分かれる。NH 01(第八図、第九図13・14、図版十一—11—14)均正唐草文軒平瓦。中心飾は、一對の鋸をもつ樹幹の上部から背向形にひらく蕨手と、蕨手の間に置かれる山形の蕾からなる。中心飾から左右に蕨手2葉と蕾を各5反転させる。

NH 01には范傷をもつ個体が存在する。范傷は下外区の左から3粒目の珠文の位置に1ヵ所(図版十一①)、内区右1反転目の支葉の先に1ヵ所認められる。ほかに、内区右5反転目の蕾の下に小さな長方形の凹みが認められる(図版十一②)。前述した2ヵ所の范傷をもつ軒平瓦には、同一の位置に必ずこの凹みが存在することから、范傷と同じ性格をもつ凹みとして、同范認定の一要素になり得るものと判断した。これらの范傷の有無により、范傷のないものをa、范傷のあるものをbと区別する。aとbが同范か異范かについては、断定し得る要素を欠くが、唐草の巻き込みの特徴、唐草と珠文との位置関係からみて同范であった可能性が高い。

NH 01 a(第九図13・14、図版十一—13・14)は8点出土しているが、いずれも破片資料である。胎土はきめが粗く細砂を多く含む。焼成は軟質で灰白色及び茶褐色を呈する。

NH 01 b(第八図、図版十一—11・12)は32点出土しており、軒平瓦のうちで最も出土量が多い。また、唯一全形を知り得る資料でもある。胎土は、緻密で砂粒をほとんど含まないものと細砂を多く含むものがある。前者は、断面が乳白色で表面のみいぶしたような黒灰色を呈し、後者は、灰白色から灰色を呈する。焼成は前者がやや堅緻、後者がやや軟質である。

NH 01は「播磨国府系瓦」の「古大内式」と呼称されている軒平瓦で、本遺跡のほかに10遺跡から出土することが報告されている<sup>(5)</sup>。

NH 02 A(第九図15・16、図版十一—15・16)均正唐草文軒平瓦。瓦当文様は、NH 01を模倣しており、やや簡略化されている。中心飾は樹幹と蕨手が連続し、蕨手の間に置かれる蕾の中に1点が付加される。左右に反転する蕨手の基部に付く蕾は、宝珠を失い支葉状を呈する。内外区を区画する界線がなく、珠文はNH 01に比較して疎らである。胎土はきめが粗く、細砂を多く含む。焼成は軟質で灰褐色を呈する。



22



23

第28図 NH 06・NH 07 拓影(1/2)

NH 02 B (第九図17、図版十一—17)

均正唐草文軒平瓦。NH 02 Aに内外区を区画する界線を加えたものである。胎土は緻密であるが、砂粒を多く含む。焼成は比較的堅緻で、灰白色を呈する。なお、2点出土したうちの1点は隅軒平瓦

である。これは平瓦部左隅を焼成前に切りとって作られている。

NH 03 (第九図18・19、図版十一—19) 均正唐草文軒平瓦。小片しか出土していないが、いわゆる「播磨国府系瓦」の「本町式」と称されている軒平瓦である。中心飾は、向い合う「C」字<sup>(7)</sup>形の中に「小」字状の三葉文を配し、中心飾から左右に蕨手3葉を各5反転させるものである。珠文は上・下外区のみ配し、脇区には置かない。胎土は緻密で少量の砂粒を含む。焼成は軟質で、灰白色を呈する。

NH 04 (第九図20、図版十一—20) 均正唐草文軒平瓦。瓦当の左1/2弱を残すのみである。巻きの強い草状の主葉が連続して反転し、支葉は界線から派生している。左脇区<sup>(8)</sup>の界線と外縁の間に箔傷が認められる。胎土は細砂を多く含む。青灰色を呈し、焼成は堅緻である。

NH 05 (第九図21、図版十一—21) 瓦当の右1/2弱を残す。外巻きの蕨手文が連なって配されている。内・外区の区画はない。胎土はきめが粗く、細砂から大粒の砂粒まで多量を含む。焼成はやや堅緻。色調は、断面が灰白色、表面は黒灰色を呈する。

NH 06 (第28図22) 小片しか出土していない。下向する外巻きの蕨手文が配されている。内・外区の区画はない。胎土はきめが粗く砂粒を多く含む。焼成は軟質で灰褐色を呈する。

NH 07 (第28図23) 小片のため、文様の詳細は不明である。胎土は緻密で細砂を含む。にぶい橙色を呈する。

製作技法 軒平瓦はすべて凸面を丁寧にヘラケズリし、叩きしめの痕跡を残さない。また、平瓦に比べかなり厚みがあることから、瓦当部を欠くものでも平瓦との区別は容易である。また、NH 01・NH 02・NH 07では側面に布目がまわり込む例がみられ、平瓦部が一枚作りによって成形されたことを示している。顎の形態はNH 01・NH 02・NH 03が曲線顎、NH 04・NH 05・NH 07が直線顎を呈する。

NH 01の調整手法には次の2種がある。(イ)：凸面には縦方向の短いヘラケズリをまんべんなく施し、さらに瓦当裏面を横方向にナデる(図版二十一—⑥)。凹面は瓦当縁から8～16cm程の幅に横位のヘラケズリを施す。以下は未調整、布目匠痕が残る(図版二十一—⑤)。側面はヘラケズリののち、凹面側のみ面取りを行う。(ロ)：凸面は瓦当裏面から狭端縁にかけて縦位のヘラケズリがほぼ一気<sup>(9)</sup>に施される(図版二十一—⑥)。凹面は縦位のナデののち、瓦当縁から4cm程の幅を横方向にヘラケズリする(図版二十一—⑦)。側面はヘラケズリののち、凹面側に面

取りを施す。平瓦部端面は未調整のものが多く、布目が狭端面にまわり込むものがある。

(イ)の調整を行うのはNH 01 a 及びNH 01 b の胎土に砂粒を多く含むもので、NH 01 b のうちでも胎土が緻密なものは(ロ)の調整を行っている。

NH 02 A は、(イ)と同様の調整を行っている。NH 02 B ・ NH 03 は、凸面では縦位のヘラケズリが一気に施されており、(ロ)に類する手法をとるのに対し、凹面では10cm以上の幅に横位のヘラケズリが施され、手法は(イ)に類する。

NH 04 は、凸面を縦方向の短いヘラケズリで丁寧に調整し、凹面には瓦当縁から約4cmの幅に横位のヘラケズリを施す。側面は1度のヘラケズリで整形する。NH 05 も調整手法は同様であるが、ヘラケズリの単位が明瞭でなく、ケズリともナデともとれる。側面はヘラケズリののち、凹面側に面取りを行っている。NH 07 はNH 04 に類する調整手法をとっている。

調整以外の痕跡についてみると、NH 01 と NH 02 には、凹面両側縁に横位の棒状圧痕が認められる(図版二十一④)。棒状の圧痕は瓦当縁から約5cmと約30cmの各々2ヵ所にみられる。これは、あらゆる調整の上に認められることから、乾燥する際、2本の細い棒を平行に並べ、その上に凹面を下にした軒平瓦を載せたものと推定される。

また、平瓦部凸面に赤色塗料が付着した軒平瓦がある。赤色塗料は瓦当縁に平行して線状に付着しており、瓦当縁から約4cmないしは約10cmのところのみられる。赤色塗料の付着はNH 01 a ・ NH 01 b ・ NH 02 B ・ NH 05 の各1点と瓦当を欠いた破片6点の計10点に認められた。

### 3. 丸瓦 (第十図、図版十二、図版二十一⑤・55、図版二十二⑨)

丸瓦は平瓦について出土量が多いが、その大部分が破片資料である。出土した丸瓦はすべて玉縁式丸瓦で、行基式丸瓦は認められなかった。分量は、計測可能な資料が少ないが、筒部長28.0～32.9cm、玉縁長4.3～6.1cm、筒部径12.7～15.0cm、玉縁径9.8～11.4cm、厚さ1.0～2.1cmを測る(第5表)。次に製作工程で生ずる痕跡について各部位ごとにみてゆくことにする。

凹面の痕跡には、糸切り痕、粘土板合せ目、布目、布綴じ合せ目、ナデがある。これらの痕跡のうち、糸切り痕や粘土板の合せ目から、第1次成形が粘土板巻きつけ技法によって行われたことがわかる。粘土板の重ね方は、玉縁方向からみて、右まわりに巻きつけられており、合せ目面の形状がZ字状を呈する。布目は、筒部から玉縁部まで連続しており、筒部と玉縁部が同時につくられたことを示している。布には、1枚の布の両端を重ね、縦に縫い合わせた筒状の布と、端を綴じ合せない1枚布を成形台に巻きつけて用いているものがある(第29図)。凹面のナデは、施される範囲が狭く、ごく少数の丸瓦に認められる程度である。

凸面の痕跡には叩き目とナデがある。叩き目には格子目と縄目の2種類が認められるが、大半の丸瓦は、横位のナデ調整によって叩き目が磨り消されている。

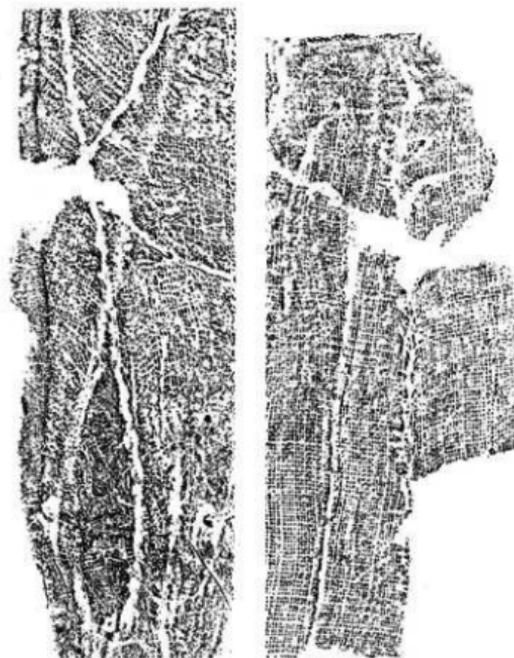
凸面の調整が終わると、円筒状の丸瓦は成形台から外され、分割線を入れた後2分割され

るわけだが、分割後に側面全体にヘラケズリを施しているため、分割断面及び破面の凹凸はほとんど残らない。さらに、ヘラケズリののち凹面ないし凹凸両面に面取りを施す。

玉縁部は、先に述べた通り筒部から連続してつくられており、筒部との境に後で粘土を足して段部をつくり出している。これは段部の接合粘土が剝離した例によって知ることができる。

丸瓦について部位ごとに痕跡を観察してきたが、形態的にみても玉縁式の1種のみ、第1次成形技法についても粘土板巻きつけ技法の1種を示すのみで、分類の要素が少ない。そこで、ここでは、第2次成形技法による叩き目の種類によって分類を行うこととし、格子叩き目を残すもの-A、縄叩き目を残すもの-B、叩きしめの後のナデ調整によって叩き目が不明のもの-Xの3群に分けることにした。量的には、X群が圧倒的に多く、A群・B群はそれぞれ数例を抽出し得たにすぎない。それでは、各々の概観をみていくことにする。

丸瓦A（図版二十二-⑨） 2点のみ抽出し得た。破片資料のため、第1次成形技法は不明である。凸面は、細かい正格子の叩き目が施され、横及び縦方向のナデ調整が行われる。凹面には



第29図 丸瓦布痕跡拓影(1/4)

は布目圧痕が残る。側面はヘラケズリののち、凹凸両面に面取りを行い、筒部端面は凹面側にのみ面取りを行う。胎土は緻密で砂粒が少ない。焼成は、硬質で赤褐色を呈するもの、軟質で灰白色を呈するものがある。計測できるのは厚さのみであるが約2cmを測り、厚手の部類にはいる。

丸瓦B（図版二十一-54）

凸面に縦位の縄叩き目が施される丸瓦である。叩きしめののち横位のナデ調整を行うため、縄叩き目は痕跡的に残っているにすぎない。凹面には粘土板合せ目と布目圧痕が残る。粘土板合せ目面の形状はZ字状を呈する。布は、縦じ合せた

ものと縦じ合せていないものの2種類が用いられている。側面・端面ともにヘラケズリで整形し、凹面側に面取りを行う。

胎土には細砂をやや多く含むものと、細砂と黒色粒を多量に含むものがある。後者はとくに、丸瓦A・Xの胎土とは明らかに異なる。前者は焼成軟質で赤褐色を呈し、後者は焼成が堅緻で灰色を呈するもの、軟質で灰白色を呈するものがある。丸瓦Bは筒部の長さで比較する限り他の丸瓦より小型である(第30図)。

丸瓦X(第十図、図版十二、図版二十一-55)

凸面に丁寧なナデ調整を施すことによって、叩き目を残さない丸瓦を一括して、丸瓦Xとした。ナデ調整は、回転を利用して横位のナデを施し、さらにその上を縦位にナデるものである。

凹面には、糸切り痕、粘土板の合せ目、布目圧痕が残る。粘土板の合せ目はすべてZ字状を呈している。布目圧痕は段部から玉縁部にかけて絞り目を有する。布は、縦じ合せたものと、縦じ合せていないものの2種類が認められる。側面はヘラケズリによって整形されるが、分割時の破面の凹部が削り残る例が若干認められる。いずれも凹面側に面取りを行う。筒部端面はヘラケズリで整形する場合と、さらに凹面側に面取りを行う場合がある。前者は薄手の丸瓦に限られるようである。

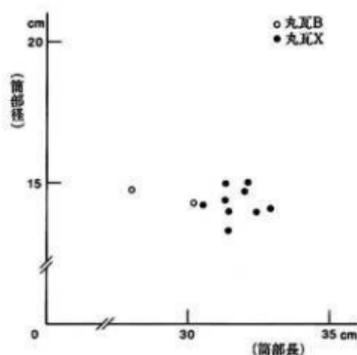
玉縁部凹面は、布目圧痕をそのまま残すものと面取り風に横方向のヘラケズリを施すもの、横方向のヘラケズリが玉縁部のほぼ全面に及ぶものがある。また、玉縁部凸面に2条の突線<sup>筋</sup>をめぐらせる例が認められる(図版二十一-55)。

胎土は、緻密で砂粒が少ないものと、砂粒を比較的多く含むものがある。焼成は堅緻で灰色を呈するもの、軟質で灰褐色及び黒灰色を呈するものがある。

法量は、筒部長30~33cm、筒部径が13~15cmとさほど差はないが、厚さは1~2cmを測り、2倍の差があらわれている。現段階では資料が少なく傾向をとらえ難いが、玉縁の形態、厚み等から細分が可能かもしれない。

#### 4. 平瓦(第十一~二十図、図版十三~十九、図版二十一-41)

平瓦は出土瓦のうちで最も出土量が多い。ほとんどが破片資料であるが、全形を知り得る資料もいくつか存在する。ここではまず、平瓦の形態、法量、製作工程で生ずる痕跡などを概観していくことにする。



第30図 丸瓦法量分布図

平面形では、台形を呈するものと両端部の差がほとんどなく長方形に近い形をとるものに大別できる。断面形は、全体的に曲率が弱く、中央部とその両側で曲率が異なるものが多い。法量は、全長33.5～38.5cm、広端幅24～29cm、狭端幅21～28cm、厚さ1.3～2.5cmを測る。なかでも、全長は36cm前後、広端幅は26cm前後、狭端幅は24cm前後に集中する（第6表）。次に製作工程で生ずる痕跡について各部位ごとにみていくことにする。

凹面の痕跡には糸切り痕、布目や布端圧痕、ナデがある。糸切り痕は丸瓦ほど明瞭に残っていない。布端圧痕は、端面及び側面に平行してあらわれる。布端の始末は、ほつれないようにまつているものと切りっぱなしにしているものがある（図版二十二⑬・⑭）。凹面の調整はナデ調整を行うものと同行わないものの2者がある。

凸面の痕跡には、叩き目や叩き目のつぶれ、ナデがある。叩き目には、原体に線刻するものと縄を巻きつける2方法がみられる。ナデ調整は、施される場所が両端部付近に限られる場合と、全体的に縦位に施される場合、行われない場合がある。ナデのなかには、砂粒の移動が認められるなど、ケズリとの中間的な様相を呈するものがある。叩き目は多くの場合、曲面の各所で圧せられてつぶれており、凹面をナデ調整する際の支持台として凹型台を使用したことが想定される。また、端縁・側縁にそって、凹型台端部の圧痕が残る例も認められる。

側面はヘラケズリによって整形され、さらに、凹面側・凸面側・凹凸両面を面取りする場合が多い（第32図）。また、ヘラケズリが及ばず、凹面からまわり込んだ布目がそのまま残る例がある。端面もヘラケズリで整形されるが、面取りは凹面側のみ施される（第32図）。

これらの痕跡のうち、布端圧痕が側縁に平行してあらわれる例や、側面に布目がまわり込む例などは、平瓦が一枚作りによって成形されたことを示すものである。さらに、粘土板の接合痕、布の縦じ合せ痕、模骨痕など桶巻作りの際にあらわれる痕跡が全く認められない<sup>65</sup>。よって、平瓦の第1次成形は、すべて凸型台の一枚作りによって行われたと判断される。

以上の観察により、平瓦はすべて第1次成形技法を同じくするため、第2次成形技法の叩きしめによって分類を行うことにする。まず、叩きしめの方向であるが、円弧に叩きしめるものを1点抽出し得たのみで、他はすべて側縁にそって、平行に叩きしめを行っている。次に、叩き目の種類であるが、前述したように、叩き目は原体に線刻するものと縄を巻きつけるものの2種類に大別できる。前者による叩き目は大半が格子目を呈し、格子の種類、大きさともに多様である。また、前者のなかには、叩き目が不明瞭な一群がある。これは叩き目が圧せられてつぶれた様子を呈しており、ナデ調整や磨滅によって叩き目が消されてしまったものとは明らかに区別される。以下、叩き目の各種について記述する（第33図参照）。

#### A：刻線による叩き目

I…叩き板の長辺・短辺にそれぞれ平行に線刻するもの。格子目は正格子になる。

II…刻線が叩き板の長辺・短辺に対してそれぞれ斜行し、斜格子に交わる。

- Ⅲ…叩き板の長辺に平行する線刻と斜行する線刻によって斜格子をつくるもの。
- Ⅳ…斜行する線刻がⅢとは逆方向に傾斜するもの。
- V…叩き板の長辺に平行する線刻と、各々斜行して交わる線刻を組み合わせたもの。
- Ⅵ…叩き目が明瞭でないもの。

さらに、Ⅰ～Ⅲの格子目には大きさに違いがみられることから、格子目の大小によって細分を行うことにした。格子目の小さいものから順に a、b、c を付す。

B：縄叩き目

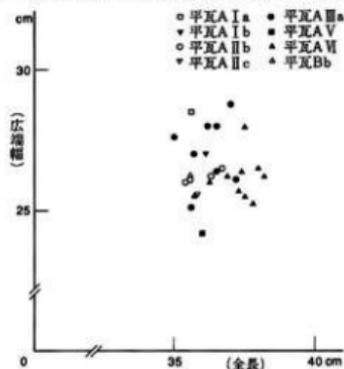
- a…3cmに16条以上の縄目があるもの。
- b…3cmに11～15条の縄目があるもの。
- c…3cmに縄目が10条以下のもの。

なおA類の中には、他に第34図の様な叩き目も認められるが数的には極めて少ない。それでは、分類に従って、それぞれ調整の特徴、胎土、焼成等をみていくことにしたい。

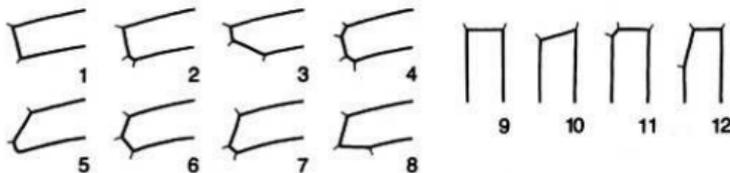
平瓦AⅠa（第十一図28、図版十三-28）叩き目が正格子を呈する平瓦である。格子の大きさは0.4×0.7cmを測る。平面形は、両端部の差がほとんどなく長方形に近い。凹面は全面に弱い縦位のナデが施される。また、糸切り痕が認められる。側面の整形は第32図2、端面は11である。側面調整ののち、広端両隅を削り落としている。胎土はきめが粗く砂粒を多く含む。焼成はやや堅緻、灰色を呈する。

平瓦AⅠb（第十一図29、図版十三-29）

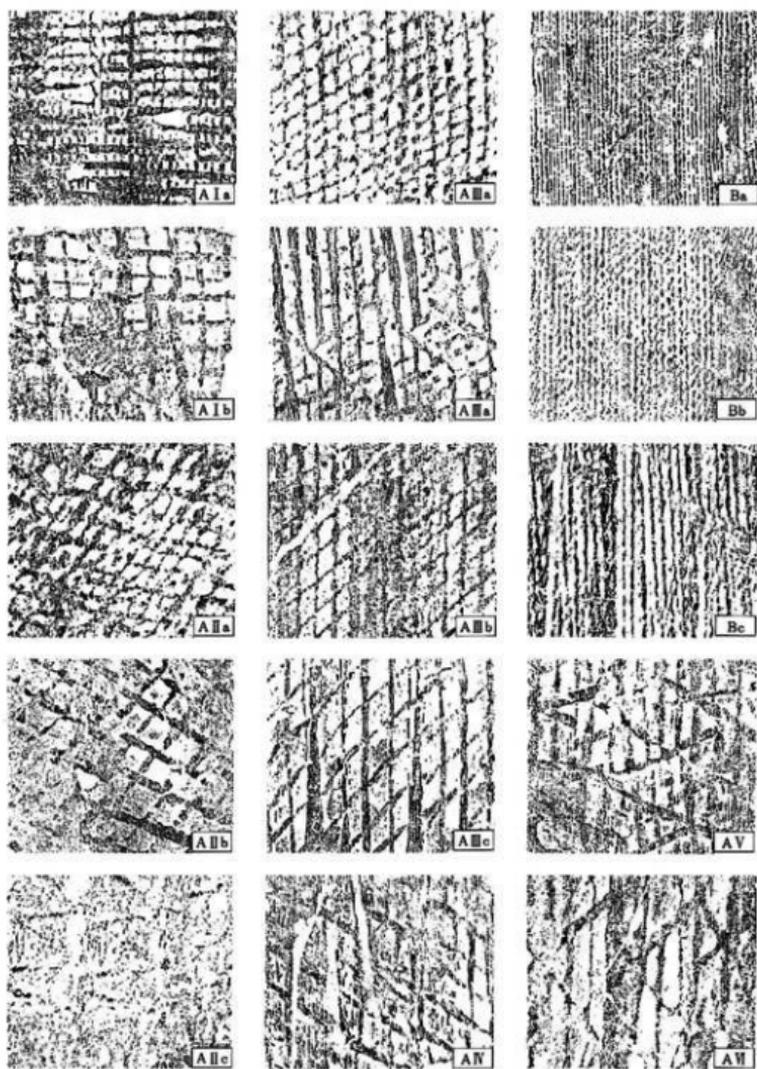
叩き目が1辺約1cmの正格子を呈する平瓦である。凹面はナデ調整を行わないものとはほぼ全面に疎な縦位のナデを施すものがある。また、布端圧痕から大小2枚の布を重ねていた例が知られる。側面の整形は第32図6・7、端面は9である。ヘラケズリが及ばず、側面にまわり込んだ布目が残る例がある。胎土は緻密で砂粒を少し含む。焼成は堅緻で灰色を呈するものと、



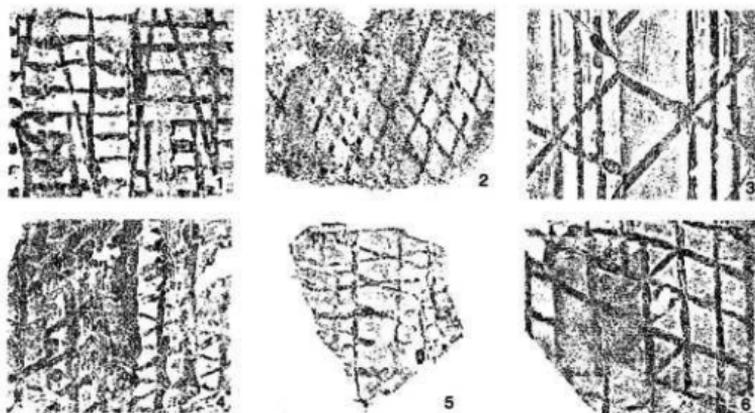
第31図 平瓦法量分布図



第32図 平瓦側面・端面の模式図



第33圖 平瓦叩き目各種(1)



第34図 平瓦叩き目各種(2)

軟質で灰白色や灰褐色を呈するものがある。

平瓦AⅡa(第十二図、図版十四) 叩き目が1辺約1cmの斜格子を呈する平瓦である。凸面は叩きしめののち、狭端部近くに弱い横位のナデが施される。凹面は、ほぼ全面を縦位にナデ調整するものと、狭端部付近のみ横位にナデるものがある。側面の整形は第32図6・7、端面は10である。平面形は長方形を呈し、広端両隅を削り落している。胎土はきめが粗く、砂粒を多く含む。焼成は堅緻で灰色を呈するものと、軟質で灰白色を呈するものがある。後者は、形状・胎土ともに平瓦AⅠaによく似ている。

平瓦AⅡb(第十三図、図版十五) 叩き目が1辺約1.4cmの斜格子を呈する平瓦である。凸面は、叩きしめののち、両端部近くにナデを施す。また、叩き目は、圧せられてつぶれており、狭端縁にそって凹型台端部の圧痕が認められる例が多い。凹面は中寄りの約1/2を縦位にナデ調整している。また、側縁に平行する布端圧痕が認められる。側面の整形は第32図4・7、端面は9である。法量は、全長35.4~38.0cm、広端幅26.0~26.5cm、狭端幅21.0~22.3cm、厚さ1.3~2.0cmと似かよった大きさを示す。胎土は緻密。焼成は堅緻で灰色を呈するものと、や軟質で灰白色や黒灰色を呈するものがある。

また、平瓦AⅡbの多くのものには、凹面の左側縁から約6cmと11cmの2ヵ所に、側縁に平行する段が認められる。さらに、段の左右に跨がるような長方形の凹みが、2条の段のそれぞれに3ヵ所ずつ、等間隔で配されている。なお、内側の段はナデによって磨り消され、凹みのみ残る場合が多い。この段と凹みの性格であるが、凸型成形台を継合させた際の継目と留め具の痕跡と推定される。

平瓦 A II c (第十八図43、図版十七-43) 叩き目が1辺約3cmの斜格子を呈する平瓦である。凸面は狭端部近くのみ縦方向にナデる。凹面はほぼ全面に縦位のナデが施される。また、糸切り痕が認められる。側面の整形は第32図6、端面は11である。胎土はきめが粗く、砂粒を少量含む。焼成はやや堅緻、灰白色を呈する。叩き板のはなれがよくなかったためか、叩き目が明瞭に出ていない。

平瓦 A III a (第十四図、第十五図36、図版十六) 叩き目が1辺約1cmの斜格子を呈する平瓦である。さらに、いくつかの叩き板が識別できる。まず、縦位の刻線が広端から狭端まで連続していることから、平瓦の全長に匹敵する長い叩き板が想定されるが、叩き板の長辺に平行する刻線に対して斜行する刻線の角度が叩き板の先と手前で異なるものがある(第十四図、図版十六-35)。これには、叩き目の重複が顕著なものとそうでないものがあり、叩き目は曲面の各所でつぶれており、狭端縁から約1cmのところには凹型台の端圧痕が認められる。凹面のナデ調整は中寄り約2/3に縦位に施されており、最右端のナデを「ノ」字状に強く施すのが特徴である。

次に、格子目の縦2つが繋がった平行四辺形の突起が、横位に、3~4cm間隔で繰り返しあらわれるものがある。凸面には、側縁に平行して凹型台の端圧痕が認められる。凹面は、縦位の弱いナデが疎らに施される。側面の整形は第32図6、端面は9である。

その他に、斜行する刻線に比べて縦位の刻線が太く、叩き板の1ヵ所に×形の刻線がはいるものがある(第十五図36、図版十六-36)。叩き目は、曲面の各所でつぶれている。凹面のナデ調整は、中寄り約2/3に縦位に施される。側面の整形は第32図7、端面は11である。

いずれも胎土は緻密である。焼成堅緻で灰色を呈するものから、やや堅緻で灰白色及び黒灰色を呈するものがある。法量は、全長33.5~37.5cm、広端幅25~28cm、狭端幅23.5~25cm、厚さ1.3~2.0cmとややばらつく傾向がある。

平瓦 A III b (第十六図39、第十七図40・41、図版二十一-41) 平瓦 A III a に比べると刻線が細く、叩き目は縦に長い平行四辺形を呈し、約1.2×1.5cmを測る。凸面は叩きしめののち、狭端部近くに横位のナデが施される。凹面は、ほぼ全面を縦位にナデ調整するが、狭端部近くには横位のナデが施される。側面の整形は第32図2・4、端面は11である。胎土は緻密で細砂を多く含む。焼成は堅緻で、灰色を呈するものとやや軟質で黒灰色を呈するものがある。また、凹面の左側縁から約6.5cmのところには平瓦 A II b と同様の段と凹みが認められるものがある。

平瓦 A III c (第十六図38) 約1.5×2.0cmの斜格子の叩き目が施される平瓦である。凹面はほぼ全面を縦位のナデで調整し、狭端部近くに横位のナデを施す。側面の整形は第32図2、広端面は11、狭端面は9である。胎土は緻密、焼成はやや軟質で灰白色を呈する。

平瓦 A IV (第十五図37、図版十九-37) 斜行する線刻が平瓦 A III 類とは逆に傾斜するもので、格子目が1辺約1.4cmを測る平瓦である。凹面は縦位のナデが疎らに施される。側面の整形は

第32図4、端面は9である。胎土は緻密。焼成はやや堅緻で灰褐色を呈する。

平瓦A V (第十八図44、図版十七-44) 斜格子に交わる線刻と、平行する縦位の線刻を組み合わせた叩き目をもつ平瓦である。斜行する線刻は、1辺約3cmの斜格子をつくる。凸面は叩きしめののち、側縁と広端縁にそって部分的にナデを施す。凹面は中寄り約2/3に縦位のナデ調整を行う。側面の整形は第32図2、端面は11である。胎土は緻密で細砂を少し含む。焼成は堅緻、灰色を呈する。

平瓦A VI (第十九図、図版十八) 刻線による叩き目が施されているが、全体的に叩き目が不明瞭な一群を平瓦A VIとした。中には平瓦A Vに類する叩き目が認められるもの(第十九図45)もあるが、叩き板のはなれがよくないうえに、形状・調整手法からみても他のA VIと区別するのは困難であった。凸面には、叩きしめののち狭端部近くを横位にナデしたもの、全体に縦位のケズリ的なナデを施すものがある。凹面は、ほぼ全面に縦位のナデが施され、狭端部近くには横位のナデが施される。側面の整形は第32図2、端面は9・11である。狭端面は直線ではなく、弧状にややふくらむ。胎土はきめが粗く砂粒を多く含む。焼成は堅緻で灰色を呈するもの、やや堅緻で灰褐色を呈するものがある。法量は、殆どのものが全長35~38cm、広端幅25~26.5cm、狭端幅22.5~23.5cmにおさまる。

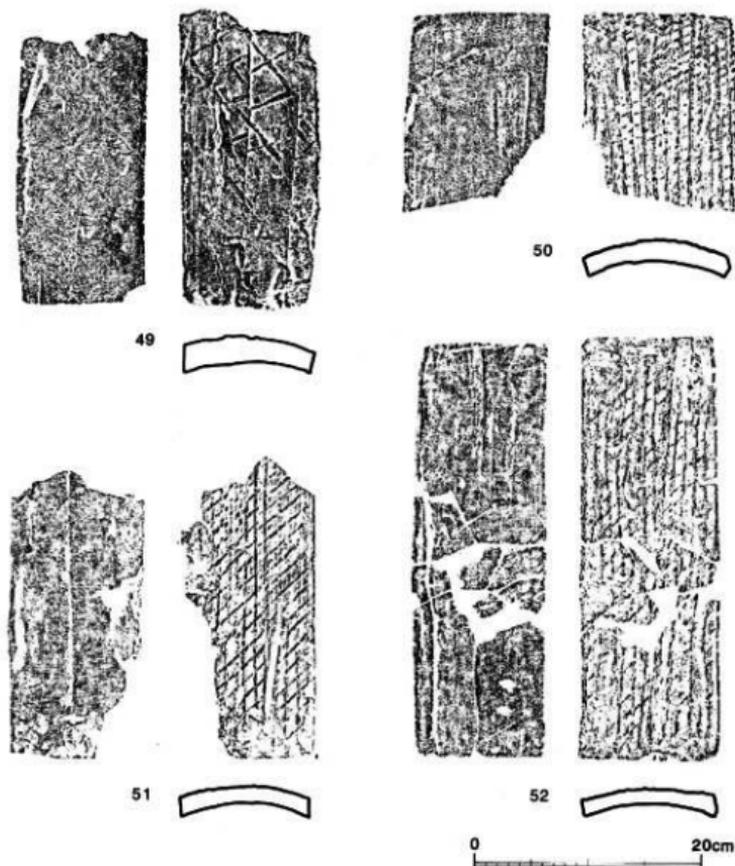
平瓦B a (第二十図48) 3cm幅に16条以上の縄目がはいる平瓦である。縄目は広端から狭端まで通っている。凹面は調整を行わない。側面の整形は第32図5、端面は9である。布目が側面にまわり込むものが多い。胎土はきめが粗く砂粒を多く含む。焼成は軟質で灰白色を呈す。

平瓦B b (第二十図47、図版十九-47) 3cm幅に12~15条の縄目がはいる平瓦である。縄目は、広端から狭端まで通っているものと、途中で不整合を生じているものがある。叩きしめののち狭端部近くに横位のナデを施す例がみられる。凹面は調整しないものが大半であるが、部分的に弱いナデを施すものもある。側面の整形は第32図5・8、端面は10・12である。胎土は、緻密で凸面にハナレ砂が多量にうちこまれているものと、きめが粗く砂粒を多く含むものがある。焼成堅緻で青灰色を呈するもの、やや堅緻で橙白色を呈するものがある。

平瓦B c (第十七図42) 3cm幅に11条以下の縄目がはいる平瓦である。凹面は調整を行わず、糸切り痕、布目圧痕が残る。側面の整形は第32図3・4、端面は9・10・12である。胎土はきめが粗く砂粒を多く含む。焼成は堅緻で青灰色を呈するもの、やや堅緻で灰白色を呈するものがある。

## 5. 道具瓦

製斗瓦(第35図、図版二十一-49・52) 製斗瓦は、平瓦を長軸にそって半載して作られている。半載は焼成前に行われ、半載された面はヘラケズリで平滑に仕上げられる。叩き目はすべて格子目で、次の3種類が認められる。



第35図 製斗瓦実測圖

I：線刻が叩き板の長辺及び短辺に対してそれぞれ斜行し、斜格子に交わるものである。格子の1辺は約3cmを測る（第35図49）。

II：叩き板の長辺に平行する線刻と斜行する線刻によって斜格子をつくるものである。格子目は、1.1×1.6cmを測る（第35図51・52）。

III：IIと同様の線刻方法をとるが、格子目が1.0×0.7cmと小さく、さらに、斜行する線刻と

は傾きが逆方向の斜線がはいる（第35図50）。

これらのうち、Ⅰ類は平瓦にはみられない。Ⅱ類は平瓦でいうAⅢbである。平瓦AⅢbにみられる段と凹みがこの鬘斗瓦でも同様の位置に認められる。Ⅲ類は平瓦でいうAⅢaであるが、そのなかでも叩き板の1ヵ所を×形に線刻するものである。

鬼瓦（第七図7～9、図版十一7～9）小片であるが、古大内遺跡出土の鬼瓦と同文のものが3点出土した<sup>94</sup>。7は右眼の部分の破片で、8・9はともに右の口から顎鬚にかけての破片である。いずれも胎土は緻密で砂粒が少ない。焼成は、やや堅緻で灰白色を呈するもの、断面のみ灰白色を呈し表面が黒灰色のものがある。

## 註

- (1) 瓦の部分名称、成形技法に関する用語は、〔奈良国立文化財研究所 1974〕に従った。
- (2) 〔今里 1960・1984a・1984b〕による。
- (3) 〔今里 1960・1984a・1984b〕による。
- (4) 〔星野 1981〕でいうところの分割型分類のa形式、〔近藤 1982〕のAⅡタイプ（外枠二段型）と考えられる。
- (5) 〔今里 1960・1984a・1984b〕による。
- (6) NH 02Bと同文の軒平瓦が、中井庵寺・中井瓦窯から出土している。〔今里 1984b〕〔井内・1969〕
- (7) 〔今里 1984a〕による。
- (8) 同文の軒平瓦が中井庵寺から出土している。〔今里 1984b〕
- (9) 棒状瓦痕をもつ平瓦は、悉仁京でも出土している。〔上原 1984〕
- 00 布の使用法については〔奈良国立文化財研究所 1978〕を参考にした。
- 01 玉縁部凸面に突線がめぐる丸瓦については、〔上原 1984〕でも報告されている。
- 02 凹面の調整に際して、凹型台が使用されたことは、〔上原 1984〕〔奈良国立文化財研究所 1978〕〔高野 1982〕で報告されている。
- 03 〔佐原 1972〕による。
- 04 小大丸遺跡出土の鬼瓦と同文のものが、西条庵寺から出土している。〔岡本・西口 1984〕

第2表 軒丸瓦計測表 (単位mm、カッコ内推定)

型式番号	直種	瓦当面							個体数
		内区				外区			
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	外線幅	外線高	
NM01	156	52	1+5	127	21	T13	14	7	53
02					18	T	11	7	1
03		33		126	33	T8	16	7	1
04						F(8)	10		1

第3表 軒平瓦計測表 (単位mm、カッコ内推定)

型式番号	瓦当面												全長	型の形態			個体数	
	上弦幅	弧深	下弦幅	厚さ	内区厚さ	内区文様	上外区厚さ	上外区文様	下外区厚さ	下外区文様	脇幅	脇区文様		文様の深さ	直	曲		段
NH01	255	50	275	61	24	KK	18	S26	19	S27	16	S5	2	356		○		54
02A				56	27	KK	14	S	15	S	17	S3	2			○		3
02B				52	25	KK	14	S	13	S		S(3)	2			○		2
03				53	23	KK	14	S	16	S	14	—	2			○		2
04				54	33	KK	8	—	13	—	11	—	3		○			1
05				47	30		9	—	8	—	13	—	2		○			1
06							6	—		—		—	1					1
07								—		—		—	2		○			1

- 凡例 1. 表中の空欄は数値不明、「—」は該当事項を欠くことを意味する。  
 2. 表中の記号は、T：単弁蓮華文、F：複弁蓮華文、KK：均正唐草文、S：珠文を表わす。  
 3. 内区と外区の境は、文様部を区画する突線の頂部を基準とした。ただしこの突線を欠くもの（NM全部、NH04・05・06）は周縁の下端を境界にした。なお、NM02Aについては、唐草の最も出っ掛けているところと珠文帯の中点を境界とした。

第4表 軒瓦出土別一覧表

地区	型式	軒 丸 瓦				軒 平 瓦							鬼 瓦	計				
		NM 01	NM 02	NM 03	NM 04	NH01			NH02		NH 03	NH 04			NH 05	NH 06	NH 07	
						a	b	不明	A	B								
西 区	上層瓦群	18	1			2	11	6	3	2	1			1			1	46
	下層瓦群	6					9	1										16
	SK01	7		1		3	2	4										17
	SK02	2																2
	SK03	2															1	3
	他	6			1		3	2									1	13
東 区	SD01				1													1
	SD02	1																1
	SD03	1				2	3					1						7
	SD04										1							1
	SD05																	0
	他	1					2	1										4
南2トレンチ	1					1										1	3	
南3トレンチ	1																	1
他	7						1									1		9
計		53	1	1	1	8	32	14	3	2	2	1	1	1	1	1	3	124

第5表 丸瓦計測表

番号	分類	筒 部 長 (cm)	玉 縁 長 (cm)	筒 部 径 (cm)	玉 縁 径 (cm)	厚 さ (cm)	図 面 番 号	図 版 番 号
1	B	30.2		14.3		1.6	—	図版二十-49
2	B	28.0		14.8		2.1	—	—
3	X	30.5	6.1	14.2	11.1	1.7	第十圖24	図版十二-24
4	X	31.3	5.2	14.4	11.0	1.8	第十圖27	図版十二-27
5	X	31.4	4.3	13.3	10.2	1.2	第十圖25	図版十二-25
6	X	32.1	4.9	15.0	11.4	2.0	第十圖26	図版十二-26
7	X	32.9	4.3	14.1	10.0	1.4	—	—
8	X	31.4		14.0		1.7	—	—
9	X	32.0		14.7	11.0	1.3	—	—
10	X	32.4		14.0	10.5	1.0	—	—
11	X	31.5	5.0			1.5	—	—
12	X	31.3		15.0	10.8	1.5	—	—

第6表 平瓦計測表

番号	分類	全長 (mm)	広幅幅 (mm)	狭幅幅 (mm)	厚さ (mm)	国産番号	国産番号
1	A I *	35.6	29.5		2.0	第十一図28	国産十三-28
2	A I b	37.2			1.8	第十一図29	国産十三-29
3	A I b	36.2			1.8	—	—
4	A I b	36.1	27.0	24.3	1.3	—	—
5	A I b	38.4			1.6	—	—
6	A Ⅱ *	33.0		25.3	1.8	第十二図30	国産十四-30
7	A Ⅱ *	35.4		27.8	2.5	第十二図31	国産十四-31
8	A Ⅱ b	35.4	26.0	21.2	2.0	第十三図32	—
9	A Ⅱ b	36.7	26.5	21.1	1.7	第十三図33	国産十五-33
10	A Ⅱ b	36.3	26.2	21.8	1.7	—	国産十五-53
11	A Ⅱ b	38.0			1.5	—	—
12	A Ⅱ b	35.5	26.1	22.3	1.4	—	—
13	A Ⅱ b	36.5			1.3	—	—
14	A Ⅲ c	35.7	25.5	22.9	2.2	第十八図43	国産十七-43
15	A Ⅲ *	35.7	27.0	24.0	1.8	第十四図35	国産十六-35
16	A Ⅲ *	36.5	28.0	24.5	1.7	—	—
17	A Ⅲ *	35.6	25.1		1.6	第十四図34	—
18	A Ⅲ *	33.6			1.7	—	—
19	A Ⅲ *	37.0	28.8	24.5	1.4	—	—
20	A Ⅲ *	36.5		24.8	1.8	—	—
21	A Ⅲ *	35.8		23.4	1.4	—	—
22	A Ⅲ *	37.5			1.6	—	—
23	A Ⅲ *	36.5	26.4		1.4	—	—
24	A Ⅲ *	36.4		23.5	1.9	—	—
25	A Ⅲ *	35.0	27.6		1.5	—	—
26	A Ⅲ *	34.6		23.4	1.4	—	—
27	A Ⅲ *	37.7		24.2	1.7	—	—
28	A Ⅲ *	36.2	28.0	24.8	2.0	—	—
29	A Ⅲ *	35.5		23.5	1.7	—	—
30	A Ⅲ *	35.5			1.6	—	—
31	A Ⅲ *	35.7			1.3	—	—

番号	分類	全長 (mm)	広幅幅 (mm)	狭幅幅 (mm)	厚さ (mm)	国産番号	国産番号
32	A Ⅲ *	37.2	26.1		1.8	—	—
33	A Ⅲ *	37.5			1.8	—	—
34	A Ⅲ *	37.3		25.0	2.0	—	—
35	A Ⅲ *	36.3		23.5	2.0	第十五図36	国産十六-36
36	A Ⅲ b	35.8			2.0	—	—
37	A Ⅲ b	35.4			1.7	—	—
38	A Ⅲ b	36.1		21.8	1.6	第十六図39	—
39	A Ⅲ b	35.1			1.6	第十七図40	—
40	A Ⅲ c	36.0			2.2	第十六図38	—
41	A Ⅲ c	35.5		22.0	1.7	—	—
42	A Ⅳ	35.7			1.8	第十五図37	国産十九-37
43	A V	36.0	24.2		2.1	第十八図44	国産十七-44
44	A Ⅳ	36.3	26.0		1.6	第十九図45	国産十八-45
45	A Ⅳ	36.8			2.1	—	—
46	A Ⅳ	36.4			1.8	—	—
47	A Ⅳ	37.5	25.5		2.1	—	—
48	A Ⅳ	37.6	25.2	22.4	2.2	—	—
49	A Ⅳ	36.0	26.5		2.1	—	—
50	A Ⅳ	37.3	25.7		1.9	—	—
51	A Ⅳ	36.2	26.2	22.8	2.0	—	—
52	A Ⅳ	36.5	26.2	23.2	1.6	—	—
53	A Ⅳ	37.5	28.0	23.3	2.1	—	—
54	A Ⅳ	37.4	26.4		2.0	第十九図46	国産十八-46
55	A Ⅳ	35.2			2.1	—	—
56	A Ⅳ	35.5			1.2	—	—
57	B *	34.3		24.0	2.1	第二十図48	—
58	B b	35.5	26.2	24.5	2.0	第二十図47	国産十九-47
59	B b	35.7			1.9	—	—
60	B b	34.9		23.4	1.8	—	—
61	B b	34.4			2.0	—	—
62	B b	35.0			2.1	—	—

### 第3節 鉄製品 (第二十一回)

西区の基壇建物S B01周辺や、東区の溝から釘・刀子などの鉄製品が出土している。釘はほとんどがS B01周辺から出土している。1は表面が剥落した下の地金がラセン状にねじられており、製作工程に関係するものかと思われる。25は方形の頭をもつ太いもので、紙の形態に近い。26は「く」字形の頭をもつもので、つくりが丁寧で折り曲げて作られたものではない。先端はノミ状を呈する。27はクサビ形の身に扁平なかぎ形をとりつけたもの。28も同様の形態であるが、先端は普通のものでクサビ形ではない。長方形の座金具が伴う。27・28とも飾り釘である。1～24は和釘(角釘)である。大きさによって小型(1～4)、中型(5～16)、大型(17～24)に分けられる。小型のものは長さ5cm前後、厚さ・幅が0.5cm程度のもので、4の様に頭を平らに叩きつぶしたのものもある。中型のものは長さが8cm弱、厚さ・幅が0.6～0.7cm程度のもので、5～8の様に頭を叩きつぶして折り曲げたものもある。大型のものは長さ13～14cm、厚さ・幅が0.8～0.9cmのもので頭がやや大きくつくられている。これらの釘は出土層によって偏りが見られる。中型のものは半数以上が上層瓦群を取りはずした下から出土しているのに対し、大型のものはほとんど全て上層瓦群の上から出土している。

また8・19の様に炭化材が残っているものや12・14の様に二次的に火を受けているものが出土している。

29は東区S D03の下層から出土した鏝である。一方の先端しか残存していない。扁平な板状のものを折り曲げている。

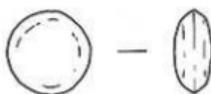
30は東区S D04出土の板状の鉄片である。鏝であろうか。S D04からはこの他にも釘片が出土している。31も鏝であろうと思われる。

32・33はS D01から出土した刀子である。32は背閘をもつ。また33は目釘をもっており、やや大きなものであろう。34もS D01出土のものである。

番号	出土位置	法量 (cm)			番号	出土位置	法量 (cm)		
		長さ	幅	厚さ			長さ	幅	厚さ
1	西区S B01周辺 上層	(4.1)	0.6	0.4	13	西区S K02 下層	(6.9)	0.6	0.6
2	西区S B01周辺	5.4	0.5	0.5	14	西区S K01 上層	7.6	0.6	0.5
3	西区S K01 下層	(4.9)	0.6	0.6	15	西区S K01・02 上層	(7.8)	0.6	0.6
4	西区S K01 下層	(3.7)	0.5	0.4	16	西区上層瓦群 下面	(7.6)	0.7	0.7
5	西区S B01周辺	(5.9)	0.6	0.6	17	西区上層瓦群 上面	(12.0)	0.9	0.9
6	西区S K01・02 上層	(6.5)	0.6	0.9	18	西区上層瓦群 上面	(12.2)	0.8	0.8
7	西区S B01周辺	(6.9)	0.7	0.6	19	西区S B01周辺 上層		0.8	0.9
8	西区	(7.1)	0.6	0.7	20	西区	12.9	0.8	0.8
9	西区上層瓦群 下面	(5.9)	0.7	0.6	21	西区S B01周辺 上層	12.0	1.0	0.9
10	西区上層瓦群 下面	7.0	0.6	0.6	22	西区S B01周辺 上層	13.3	1.0	0.8
11	西区上層瓦群	7.6	0.6	0.6	23		14.3	0.9	0.8
12	西区S K01 上層	7.2	0.7	0.7	24	西区S B01周辺 上層	(14.1)	0.9	1.0

第7表 釘計測値

#### 第4節 水晶玉 (第36図)



第36図 水晶玉 (実大)

S K 01埋土の水洗選別中に出土したもので、半透明の水晶を直径約1.45cmのはほぼ円形に成形している。断面形は算盤玉状に近い扁平な長円形で、厚さは約0.68cmである。基石であろうか。同様のものは平安京や周防国府、大宰府などからも出土しており、近辺では相生市の下土井遺跡で例が見られる。

#### 第5節 弥生土器 (第37図)

東区S D 01などから若干の弥生土器片が出土している。

1 口径11.8cmの小形の広口壺口縁部である。やや外傾してひろがる頸部から、更に大きく外反する口縁部に続く。頸部外面には縦方向の刷毛目調整の後、3条の幅ひろい凹線を施す。口縁端部を上下に拡張し、端面には3条単位の櫛描き波状文を施す。

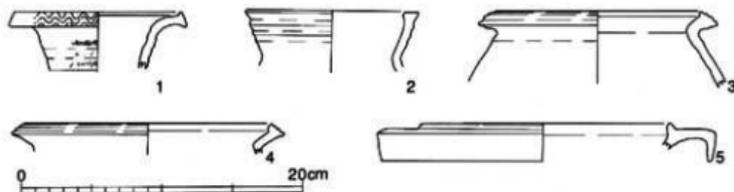
2 口径約12cmの直口壺の口縁部である。やや外方にひろがる口頸部に、内外にわずかに拡張して水平な端面をもつ口縁部が続く。端面は中央をナデによってくぼませている。口縁端直下に幅の広い3条の凹線を施す。

3 口径14.4cmの甕口縁部。口縁部は体部から「く」の字形に屈曲してひろく。口縁端は上下にナデによって拡張させ、端面には3条の凹線を施す。外面は縦方向の刷毛目調整を残している。

4 3と同じく甕の口縁部である。

5 水平に張り出す口縁部をもつ高杯。端部を下方に幅広く拡張し、内面には突帯をもつ。

これらの土器は1が古い要素を残しているが、総じて畿内第IV様式に属する。おそらく北側に同時期の集落が存在すると思われる。



第37図 弥生土器

## 第5章 小犬丸遺跡出土瓦の胎土分析

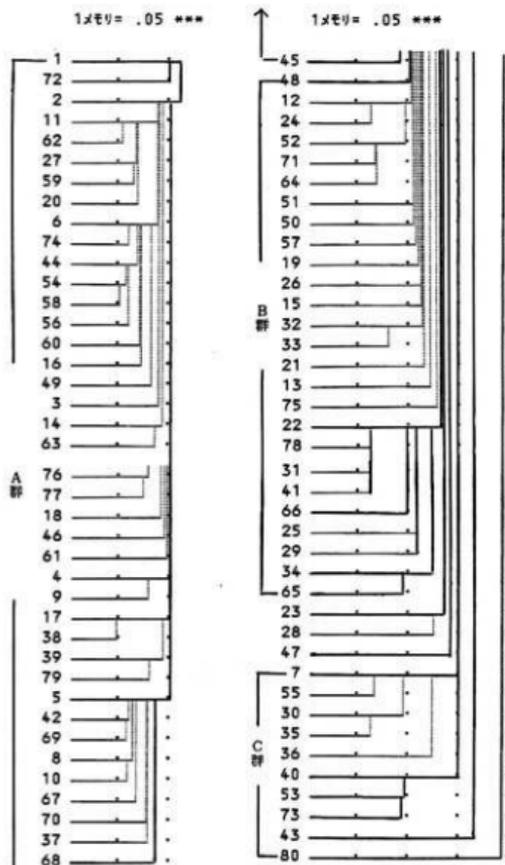
奈良教育大学教授 三 辻 利 一

### 1. はじめに

瓦も粘土を素材としているという点で土器の一種とみることができる。したがって、胎土分析によって産地を推定することは可能である。しかし、窯跡が多数あったと考えられているにもかかわらず、殆ど発掘されていないところから、縄文・弥生土器と同様、産地推定は難しい。まだまだ、各地の瓦を分析し、基礎データを集積している段階である。本項では小犬丸遺跡から出土した瓦の分析結果から何がいえるか模索した結果について報告する。

### 2. 分析結果

第8表には小犬丸遺跡出土瓦の分析結果を示す。これらの瓦がいくつかのグループに分類できるかどうかをみるためにクラスター分析を行った。使用した因子はK、Ca、Rb、Srの4因子である。Fe因子は使用しなかった。これは兵庫県内の窯跡出土須恵器の分



第38図 小犬丸遺跡出土瓦のクラスター分析

第8表 小丸遺跡・古大内遺跡出土瓦の分析値

(分析値は岩石標準資料JG-11による標準化値で示す)

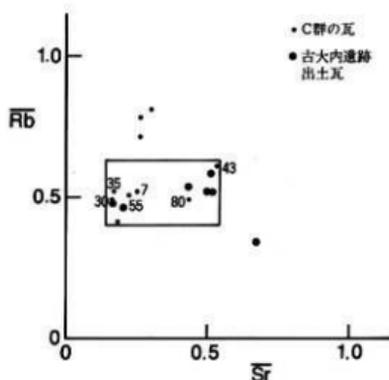
No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	備考
1	0.561	0.283	1.18	0.632	0.603	NM 01 (第六図1)
2	0.623	0.266	1.38	0.711	0.535	☆
3	0.640	0.277	1.26	0.748	0.578	☆
4	0.621	0.290	1.40	0.597	0.503	☆
5	0.655	0.256	1.63	0.601	0.406	☆
6	0.530	0.251	1.55	0.820	0.472	NM 02 (第七図4)
7	0.368	0.118	2.29	0.515	0.246	NM 03 (第七図5)
8	0.653	0.214	1.85	0.593	0.368	NH 01 a
9	0.657	0.270	1.03	0.621	0.517	☆
10	0.655	0.233	1.64	0.583	0.388	☆
11	0.584	0.281	1.19	0.776	0.478	NH 01 b
12	0.630	0.321	1.21	0.815	0.526	☆
13	0.677	0.242	1.02	0.654	0.595	☆
14	0.593	0.273	1.07	0.658	0.514	☆
15	0.684	0.198	0.997	0.823	0.371	☆ (第八図12)
16	0.608	0.204	0.924	0.768	0.373	☆
17	0.559	0.194	1.00	0.695	0.389	NH 02 B
18	0.533	0.277	1.04	0.691	0.445	☆ (第九図17)
19	0.769	0.215	1.74	0.570	0.318	NH 02 A (第九図16)
20	0.568	0.233	1.38	0.766	0.483	NH 03 (第九図19)
21	0.683	0.191	1.60	0.728	0.471	NH 04 (第九図20)
22	0.547	0.099	1.06	0.594	0.242	NH 05 (第九図21)
23	0.866	0.167	1.73	0.606	0.306	軒平瓦
24	0.641	0.290	1.51	0.804	0.526	NH 07 (第28図23)
25	0.509	0.167	2.72	0.469	0.350	軒平瓦
26	0.768	0.291	1.80	0.584	0.348	☆
27	0.642	0.265	1.14	0.731	0.480	丸瓦 X
28	0.787	0.155	1.42	0.659	0.306	☆
29	0.548	0.135	1.92	0.494	0.294	☆
30	0.370	0.050	2.69	0.490	0.163	丸瓦 B
31	0.570	0.109	2.90	0.555	0.219	丸瓦 B
32	0.620	0.249	1.62	0.874	0.527	平瓦 B b
33	0.619	0.242	1.50	0.912	0.494	☆
34	0.549	0.127	1.33	0.577	0.338	☆
35	0.387	0.064	2.54	0.514	0.166	平瓦 B c
36	0.382	0.102	2.94	0.414	0.176	☆
37	0.703	0.186	1.77	0.606	0.324	平瓦 A I a
38	0.565	0.195	0.995	0.694	0.406	平瓦 A I b
39	0.574	0.194	1.99	0.633	0.388	(図版二十二-d)
40	0.605	0.100	1.06	0.712	0.255	平瓦 A II a
41	0.549	0.108	2.07	0.531	0.229	平瓦 A II b
42	0.679	0.237	1.61	0.622	0.416	平瓦 A II c
43	0.411	0.275	1.70	0.609	0.529	☆

No.	K	Ca	Fe	Rb	Sr	備考
44	0.556	0.228	1.06	0.799	0.430	平瓦 A V
45	0.679	0.205	1.60	0.672	0.362	(第34圖3)
46	0.677	0.237	0.906	0.820	0.444	平瓦 A III a
47	0.567	0.345	1.32	0.735	0.657	平瓦 A III c
48	0.580	0.325	1.41	0.698	0.485	*
49	0.616	0.237	1.07	0.797	0.483	平瓦 A III a
50	0.670	0.324	1.70	0.562	0.534	平瓦 A VI
51	0.550	0.201	1.14	0.705	0.571	平瓦 A II b
52	0.573	0.287	1.26	0.796	0.583	平瓦 A I b
53	0.636	0.117	0.923	0.811	0.297	平瓦 A II a
54	0.581	0.216	0.998	0.792	0.404	平瓦 A II b
55	0.388	0.101	2.28	0.511	0.220	(第34圖2)
56	0.555	0.220	1.18	0.761	0.405	平瓦 A V
57	0.686	0.142	1.57	0.598	0.262	(第34圖4)
58	0.504	0.230	0.920	0.789	0.405	平瓦 A III a
59	0.610	0.252	1.20	0.739	0.486	*
60	0.565	0.197	0.845	0.768	0.373	*
61	0.502	0.194	1.17	0.730	0.420	平瓦 A III c
62	0.588	0.263	1.28	0.763	0.469	平瓦 A III b
63	0.522	0.244	1.85	0.645	0.466	平瓦 B b
64	0.586	0.257	1.33	0.793	0.562	*
65	0.497	0.141	1.31	0.589	0.373	*
66	0.489	0.125	2.21	0.547	0.265	平瓦 B c
67	0.630	0.246	2.71	0.558	0.386	平瓦 A VI
68	0.585	0.216	1.93	0.567	0.372	*
69	0.652	0.237	1.59	0.625	0.408	*
70	0.679	0.179	1.33	0.614	0.366	平瓦 A I a (第十一圖28)
71	0.602	0.309	1.03	0.808	0.586	平瓦 A IV (第十五圖37)
72	0.536	0.235	1.13	0.602	0.570	鬼瓦
73	0.595	0.109	1.04	0.777	0.261	平瓦 A II a (第十二圖30)
74	0.525	0.237	1.30	0.804	0.451	丸瓦 X
75	0.563	0.251	1.89	0.492	0.420	*
76	0.546	0.241	1.61	0.655	0.508	* (玉縁凸面突線)
77	0.550	0.239	1.13	0.699	0.506	*
78	0.548	0.104	2.66	0.563	0.240	丸瓦 B (圖版二十一-54)
79	0.611	0.173	0.913	0.636	0.415	丸瓦 X (玉縁凸面突線)
80	0.372	0.190	1.22	0.492	0.433	*
古 大 内 遣 跡	0.354	0.252	1.86	0.521	0.495	(第44圖5)
	0.365	0.086	2.71	0.461	0.197	(第44圖1)
	0.345	0.315	1.72	0.520	0.520	(第44圖6)
	0.345	0.261	1.73	0.586	0.524	(第44圖4)
	0.366	0.072	2.38	0.491	0.163	(第44圖7)
	0.375	0.172	1.48	0.527	0.431	(第44圖3)
	0.302	0.261	1.49	0.342	0.675	(第44圖2)

析データをみると、Fe 因子は有効識別因子ではなかったからである。クラスター分析の結果は第37図に示す。デンドログラムでは胎土の類似したものを逐次横線でつなぎ、まとめていく。縦軸は類似度を表し、類似度は第8表の分析データから計算された。したがって、同じ枝に付属する番号の試料は胎土が非常に似ていることを示す。ただこの分析法の欠点はどの枝のものから胎土が異なるかについては何もいってくれない。何らかの情報を加味してデンドログラムの枝をどこかで切らなければならない。そこで、デンドログラムで縦軸に少し間隔が開いているところで枝を切ってグループ分けし、その結果をRb—Sr 分布図やK、Ca 分布図上で比較してみることにした。

第38図をみると、左端のNo. 1 からNo.45までは縦軸上の間隔がつまっている。つまり、類似しているとみなせるので、ここまでの試料をA群としてまとめてみた。次に、No.48からNo.65までを同様にしてB群とし、No. 7 からNo.80までをC群としてみた。そうすると、B群とC群の間に挟まれるNo.23、28、47の3点をどちらにくっつけてよいのかわからないので、Rb—Sr 分布図やK、Ca 因子でくっつけ易い方につけることにした。第39図にはC群の瓦のRb—Sr 分布図を示す。この図には古大内遺跡出土瓦もプロットしてある。古大内遺跡の瓦のうち、1点は右下に大きくずれる。このことは古大内遺跡出土の瓦も、単純に同一産地のものと云う訳にはいかないことを示す。しかし、この1点を除いて他の全てをかこむようにして古大内領域をとり、他の瓦と対比する上の目安とした。そうするとC群の瓦のうち、No.40、53、73の3点以外はすべて古大内領域に入ることがわかった。第40図にはK量を比較してある。この図でみられる注目すべき点は古大内遺跡の瓦にはK量が少ないということである。そうすると、第39図で古大内領域に入ったNo.7、30、35、36、43、55、80の7点はK因子でも古大内領域に対応し、同質の胎土をもつことを示す。なお、第41図にはCa量を比較してあるが、古大内遺跡の瓦のCa量のばらつきが大きく、Ca因子はこの場合には相互識別の上に殆ど役立つことを示す。この結果、No. 7、30、35、36、43、55、80の7点は古大内遺跡の瓦と同一産地である可能性をもつといえよう。

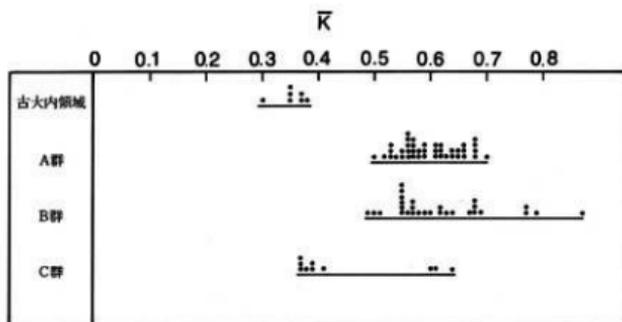
次に、A群の瓦のRb—Sr 分布図を第42図に示す。A群の瓦は第42図のRb—Sr 分布図でも、また、第40・41図のK、Ca 因子でもよくまとまって分布し、同一産地の



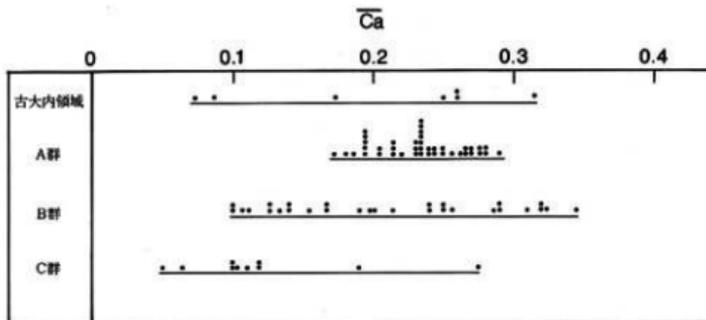
第39図 C群の瓦のRb—Sr 分布図

瓦であることを示す。これらはNo.1、2、3、4、5、6、8、9、10、11、14、16、17、18、20、27、37、38、39、42、44、45、46、49、54、56、58、59、60、61、62、63、67、68、69、70、72、74、76、77、79の41点である。第42図より、これらは古大内遺跡の瓦に比べて、Rb、Sr量が多いことがわかる。

第43図にはB群の瓦のRb—Sr分布図を示す。3群の中ではばらつきがもっとも大きい。これらを1群としてまとめることは正しくないかもしれないが、一応、ここではB群として、一まとめにしておく。よくみると、B群のものでも右上部に分布するものはA群に吸収され、左下部に分布する過半数のものは古大内領域に分布するとみなせるかもしれないが、第40図のK因子でみられるようにK量では全く古大内遺跡の瓦には対応しないので、B群として一まと



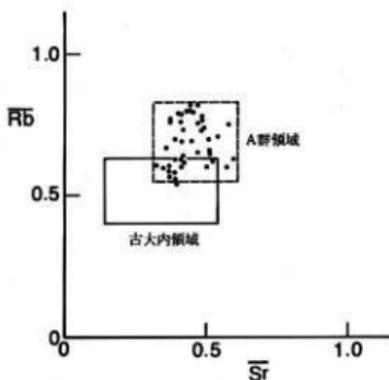
第40図 A・B・C群の瓦のK量の比較



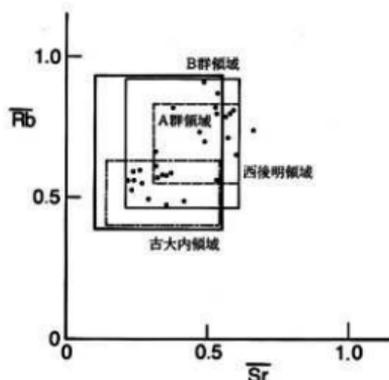
第41図 A・B・C群の瓦のCa量の比較

めにしておく方がよいと考えた。また、デンドログラムでB群とC群との間に挟まっていたNo.23、28、47の3点はK量が多く、C群よりB群に近いとみなし、B群の中に入れてデータを処理した。以上の結果、A群(No.1、2、3、4、5、6、8、9、10、11、14、16、17、18、20、27、37、38、39、42、44、45、46、49、54、56、58、59、60、61、62、63、67、68、69、70、72、74、76、77、79)、B群(No.12、13、15、19、21、22、24、25、26、29、31、32、33、34、41、48、50、51、52、57、64、65、66、71、75、78、23、28、47)、C群(No.7、30、35、36、40、43、53、55、73、80)に分類された。この分類がどの程度有効性をもつかは今後、瓦の文様等の考古学的観察結果と併せて検討されるべきであろう。とくに、A、B群は2群に分類したものの、K、Ca因子では殆ど相互識別できず、Rb—Sr分布図でも、B群の半数はA群領域に分布しているところから、むしろ、この2群は1群に統一した方がよいかもしれない。B群のうち、Rb、Sr量が少ないものと、C群の瓦の中に古大内遺跡の瓦と同質の胎土をもつ瓦があるとみられる。

なお、注目すべき点はA、B群の瓦は相生市の西後明窯跡群の須恵器の分布領域によく対応しており、相生市周辺で作られた瓦であろうと推定するのが現在のところ無難ではないかと考える。ただし、今後、窯跡出土瓦の胎土分析が進んだ場合、この推定は修正される可能性もあることを断っておく。



第42図 A群の瓦のRb—Sr分布図



第43図 B群の瓦のRb—Sr分布図

## 第6章 まとめ

### 第1節 小犬丸遺跡出土の土器について

出土遺物は、大半が平安時代のもので、奈良時代のは数が限られている。ここでは平安時代の遺物について述べることにしたい。但し、出土遺物のほとんどが底部片で、口縁部まで復元できたものは数が限られている。しかも、いずれも整地層または溝からの出土で、遺構ごとにとまって出土しているわけではない。従って、遺物の編年等の研究の上では、あまり有効な資料とはならないが、特徴的な器形をあげてまとめにかえておくことにしたい。

#### 土師器

須恵器に比べて、圧倒的に多い。器種は碗・皿・杯などの小型品が中心であるが、本遺跡で特徴的な器種として、第4章第1節で触れた通り、碗では、碗CⅠ・碗CⅡ、皿では皿CⅠがある。ここでは、以上の器種を中心に述べることにしたい。

#### 碗CⅠ

碗CⅠについては、播磨・但馬・摂津三田及び京都府北部など、平安時代の糸切り平高台をもった須恵器碗の焼成を主体とする窯址群の周辺地域に見られる器形である。明らかに糸切り平高台をもった須恵器碗を模したものである。底部の高台の形態によって、次の通り、さらに細かく分類することができる。

- 後述の須恵器碗Cそのものと共通する形態である。高台の形態から、①高台が比較的高く、高台側面を整えるもの(23・87・121・148など)と、②高台があまり高くないもの(20・73・93・119・158など)と大きく2つに分かれる。また、底部内面には成形時の段をあまり顕著に残さないものがほとんどであるが、わずかに段を残すもの(95・151・159など)もあり、さらに細分できそうであるが、今回は大まかな分類に留めておく。
- 底部内面には成形時の段を顕著に残す。体部はどちらかといえば、直線的に立ち上がらせるものが多い(96・99・151など)。高台の断面は台形になるものもある(74・75)。
- 体部と底部の接合部内外面に粘土を補強して、接合時にできる段をなくしている。このため高台の厚みは厚く、高台と体部の境が丸くなっている。体部は直線的に立ち上がらせる(72・150・170など)。

#### 碗CⅡ

外観上は高台側面が高く、高台も厚く作っているように見えるが、内面は屈曲して段をもち、実際、高台は体部の器壁程度の厚みしかない(10・19・76・100・160)。

碗CⅡについては、三田市村中遺跡・姫路市本町遺跡・相生市下土井遺跡<sup>(1)</sup>に出土例がある。また、相生窯址群の緑ヶ丘落矢ヶ谷1・3号窯出土の須恵器に碗CⅡおよび前述の碗CⅠのうち内面に段をもつbタイプのもので共通する器形が出土している<sup>(5)</sup>。両者とも、出土量は少な

いが、それ以前の須恵器碗にはみられなかったものである。須恵器の製作に土師器工人が参加したか、須恵器工人が土師器碗を模倣したかどうかの問題は別として、須恵器の編年から碗CⅡ等の年代を推定し得る参考例の1つとなりえる。

### 皿CⅠ

碗Cとともに出土量の多いのが、糸切りの平高台をもつ皿CⅠである。この種の皿については最近、各地の遺跡から出土例が報告されている。県内に限ってみれば、主な出土地としては、三田市対中遺跡・姫路市本町遺跡・龍野市宝林寺北遺跡<sup>(6)</sup>・相生市下土井遺跡・関宮町山崎A遺跡<sup>(7)</sup>・出石町宮内遺跡などがあげられる。

形態としては、皿部が水平もしくは斜めに直線的に開く。また、本町遺跡の土坑27・井戸4の埋土中から、皿部の中央部が窪んだものが出土している。本遺跡では、底部内面に窪みをもつ17・169などが本町遺跡の出土例と同様の形態の皿になると思われる。高台の高さについては、高さの高いものと低いものがある。皿CⅠの年代については、各地の報告例を見れば、平安後期から末としているところが多いようである。

続いて、以上の碗CⅠ、碗CⅡ、皿CⅠの各器種について、良好な共存資料があるので列挙しておく。

まず、本町遺跡では土坑27から土師器の皿CⅠ、碗CⅡ、碗CⅠaのうちの高台の低いもの、碗CⅠbおよび須恵器碗Cがセットになって出土している。報告書によると、時期としては平安時代末から鎌倉時代としている。

宝林寺北遺跡では、土坑42から碗CⅠbと皿CⅠおよび、土師器の小皿(糸切り)が出土している。土坑42は主体部に白磁碗・土師器杯を埋納した中世墓(方形区画墓)より、下層の遺構である。中世墓主体部に埋納された白磁碗は森田勉氏による大宰府編年種類(11世紀中頃～13世紀初頃)の段階の端反口縁をもつものである。また、中世墓を巡る周溝から12世紀前半から半ば頃に位置付けられる魚住窯跡群産の製品が出土している。

また、碗CⅡおよび碗CⅠbについては、土師器ではないが、前述の通り、相生市の緑ヶ丘落矢ヶ谷1・3号窯出土の須恵器に共通する形態のものがある。緑ヶ丘落矢ヶ谷1・3号窯の絶対年代の推定については、やや流動的ではあるが、今のところ、12世紀前半に位置付けている。

なお、昭和61年度に発掘調査を実施した龍野市の宮脇<sup>(8)</sup>遺跡では、平安時代の遺構のうち、土坑の1つから土師器碗CⅠaと須恵器碗Cが相伴して出土している。これらの遺物については、現在、整理中であるので詳しい記述は避けたいが、土師器碗CⅠaは高台の高い一群であり、須恵器碗Cは古い形態のもので、10世紀代に遡りうるものである。

以上、各地の遺構から出土した遺物のセット関係から考えてみると、まず、碗CⅠaのうちの低台の低いもの、碗CⅠb、碗CⅡ、皿CⅠについては、同一遺構の中からセットになって出

土しており、時期的にはほぼ並行すると考えてよからう。年代については、断定は難しいが、11世紀後半から12世紀前半頃を中心とする時期としておきたい。

また、椀C I aのうち、高台の高い一群については、宮脇Ⅱ遺跡の土壌内一括遺物から、上記の一群よりも、先行する形態と考えられ、出現の時期については、10世紀代に遡り得ると考えてよからう。

播磨における平安時代の土師器については、姫路市本町遺跡出土の遺物を中心に型式編年が進められているが、なお、検討課題が多い。これまで述べてきた小犬丸遺跡出土の土師器の年代観については、型式編年が確立していない現段階では、1つの目安にすぎないことは明らかである。今後、型式編年を踏まえうえて、改めて検討することにした。

#### 須恵器

椀A・B・Cおよび、杯Aの出土がある。いずれも相生窯址群で生産されたものである。椀A(80・88・130)はヘラ切りの底部に付高台を付したものである。奈良時代の付高台をもつ杯から変化したもので、椀B・Cに先行するものである。時期としては、9世紀半ばから10世紀前半に位置付けられようか。

椀Bはヘラ切りの平高台をもつもので、相生市の西後明7号窯を代表例としている。糸切りの椀Cに先行すると考えており、時期的には10世紀はじめから前半に考えている。当遺跡からは53の1点だけが出土しているだけであるので、ここでは詳しい記述は省略したい。

椀Cは糸切りの平高台をもつもので、出現時期は10世紀前半まで遡ると考えている。相生市の入野6号窯と鶴亀1・2号窯では椀Aと共存する。当遺跡出土の椀Cについては、いずれも底部片で口縁部まで復元できたものは極めて少ない。高台の高さ・径だけでは編年の目安の1つとはなっても、絶対的な基準にはならないことはすでに述べてきたことであるが<sup>(9)</sup>、高台の形態から、あえて年代推定を行うとすれば、高台径が大きく高台側面を整えている47・54などが古く、逆に高台径が小さく、高台側面もあまり整えていない45・48あたりが新しく位置付けられようか。年代については、古い段階のもので10世紀代、新しく位置付けられるもので、11世紀後半から12世紀代に位置付けられようか。

須恵器については、このほか、円化できなかつたが、備前系の椀も出土している。

#### 緑釉・灰釉・越州窯青磁

緑釉は各地のものが出土している。南トレンチ出土の122は京都市幡枝産のものであろう<sup>33</sup>。時代は9世紀半ばから後半、S K 01出土の112~114は東海系のものである。113・114は猿投産のものと思われるが、112は東濃諸窯のものである可能性が高い。いずれも、黒笹90号窯式の段階のものと思われる。上層瓦群出土の64は亀岡市蘆産の緑釉<sup>34</sup>で10世紀前半頃に位置付けられよう。

灰軸のうち62はあるいは猿投の黒笹90号窯式の段階のものと考えられるが、63はつけがけ手法を用いていることから折戸53号窯式の段階のものと考えられる<sup>08</sup>。

越州窯青磁は胎土も精良で、つくりも丁寧であるが、焼成温度はあまりあがらなかったためか、胎土はガラス化せず、釉も剥落している。器面全面に施軸しており、型式としては、森田勉氏による越州窯青磁Ⅰ類にあたろう<sup>09</sup>。兵庫県下では、但馬国府推定地（城崎郡日高町）・祢布ヶ森西遺跡（城崎郡日高町）・栄根遺跡（川西市）・下土井遺跡（相生市）について5例目の出土である<sup>09</sup>。

#### 註

- (1) 出石郡出石町宮内遺跡に類例がある。（池田正男・森内秀造 『出石・宮内遺跡』 1984 出石町教育委員会）
- (2) 昭和59年 兵庫県教育委員会発掘調査
- (3) 山本博利・秋枝芳 『本町遺跡』 1984 姫路教育委員会
- (4) 松岡秀夫他 『相生市下土井遺跡発掘調査報告書』 1984 相生市教育委員会・下土井遺跡発掘調査団
- (5) 西口和彦・森内秀造 『相生市・緑ヶ丘窯址群』 1986 兵庫県教育委員会
- (6) 岡田章一・渡辺昇・市村高規他 『宝林寺北遺跡』 1987 兵庫県教育委員会
- (7) 池田正男・森内秀造 『出石・宮内遺跡』 1984 出石町教育委員会
- (8) 昭和61年度 山陽道建設に伴い、兵庫県教育委員会が発掘調査。
- (9) 森内秀造 『平安時代の窯業生産—播磨地方の須恵器生産を中心に—』（『歴史における政治と民衆』 1986 日本史論叢書）
- 08 大阪府文化財協会 吉川義彦氏より御教示。
- 09 神戸市立博物館 森田勉氏の御教示による。
- 09 京都府埋蔵文化財センター 石井清司および水谷寿克氏の御教示による。
- 09 森田勉氏の御教示による。
- 04 森田勉・横田賢次郎 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」（『九州歴史資料館 研究論叢』 4 1978 九州歴史資料館）
- 09 岡田章一氏の教示による。

## 第2節 小犬丸遺跡出土の瓦について

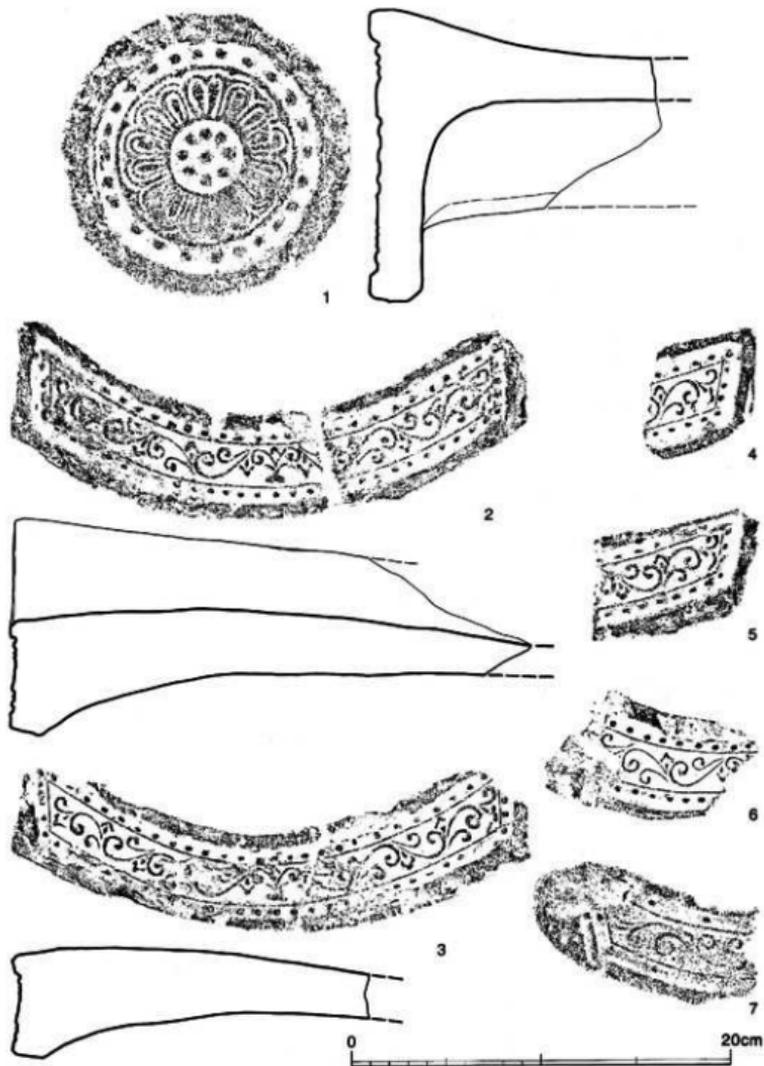
第4章第2節で、小犬丸遺跡出土の軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦について観察を行った。そこで、ここでは、観察結果に基づき、若干の検討を行うことにしたい。

今回の調査では、4型式56点の軒丸瓦が出土した。そのうちの94%をNM01が占め、NM02-04が各々2%を占める。軒平瓦は、7型式8種65点の出土があった。NH01が83%を占め、NH02Aが5%、NH02B及びNH03が各々3%、NH04-07が各々1.5%と続く。なお、NH01の内訳は、83%中NH01aが12%、NH01bが50%、范傷の有無が不明のもの21%である。これらの比率から、NM01-NH01の組み合わせが成立し、しかも、この組み合わせは、瓦葺建物創建時のものであることが想定される。NM01-NH01以外は、いずれも少数出土のため、出土比率から組み合わせを比定することはできない。しかしながら、瓦当文様から、NM01-NH01に接続するものとして、NM01に類する文様構成のNM02とNH01を模倣・簡略化したNH02の組み合わせが想定される。

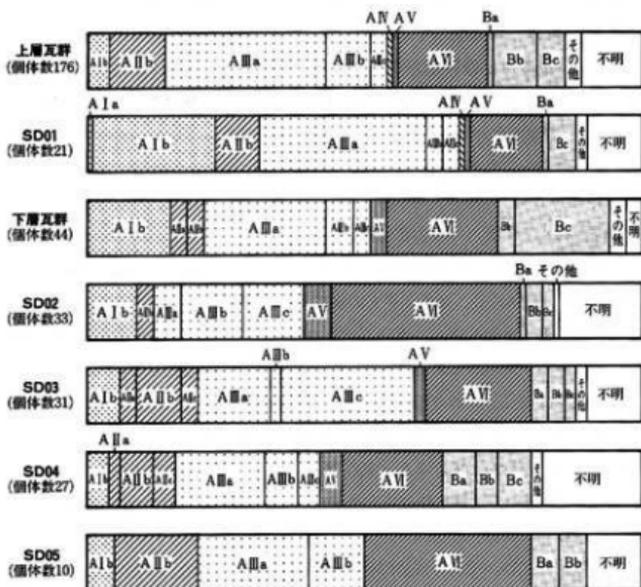
小犬丸遺跡の主要瓦であるNM01は、1+5の蓮子がやや不規則に配されていることから、中心蓮子と周囲の各蓮子がなす角度、蓮子と蓮弁の位置関係について比較を行ったところ、いずれも特徴が一致することがわかった。よって、NM01は、すべて同一范で製作された可能性が高いといえる。また、NM01と組み合うNH01は、范傷の有無にかかわらず、唐草と珠文の位置関係及び唐草の巻き込みの特徴を同じくする。よって、NH01a・bともに同范と考えられ、小犬丸遺跡の瓦葺建物創建時の軒瓦は、軒丸瓦・軒平瓦ともに各1個の瓦范で製作された可能性が考えられる。

NM01-NH01は、今里幾次氏のいう「播磨国府系瓦」の中の「古大内式」のセットである。「古大内式」軒丸瓦は、本遺跡も含めて18遺跡からの出土が知られており、「播磨国府系瓦」のなかでも最多分布<sup>(1)</sup>を示す。このなかで、蓮子が「古大内式」軒丸瓦に通例の1+6より1粒少ないNM01と同文のものが、播磨国分寺・落地遺跡から出土している。次に、「古大内式」軒平瓦であるが、これは11遺跡から出土することが知られている<sup>(2)</sup>。このうち、NH01bの同范例が、古大内遺跡(第44図2~5)・太寺廃寺から出土しており、北宿遺跡・播磨国分寺・本町遺跡出土例も同范と思われる。また、今回の調査で、少数ではあるが「古大内式」以外の「播磨国府系瓦」の出土があった。NM03は「毘沙門式」軒丸瓦、NH03は「本町式」軒平瓦<sup>(3)</sup>である。本遺跡を含めて、前者は8遺跡、後者は11遺跡から出土することが知られている。このほかに、「古大内式」軒平瓦を模倣・簡略化したNH02Bと同文の軒平瓦が、中井廃寺・中井瓦窯から出土しており、また、NH04の同文例も中井廃寺にみられる。

次に平瓦の製作技法についてみていくことにする。平瓦はすべて凸型台による一枚作りで成形されており、凹面調整に際して、凹型台の使用が想定されることは第4章で述べた通りである。製作工程は、次のように復原できる。



第44図 古大内遺跡出土の軒瓦



第45図 平瓦分類別の百分比

- ① 粘土角材から、1枚分の粘土板を糸切りによって切り出す。
- ② 布を敷いた凸型成形台に、粘土板を載せ、長軸に平行して叩きしめを行う。
- ③ 凸面を調整するものは、叩きしめののちに、縦位もしくは端部付近に横位のナデを施す。
- ④ 凸型台からはずして、凹型台に載せ、凹面を主に縦位のナデで調整する。
- ⑤ 側面・端面をヘラケズリによって整形する。
- ⑥ 凹型台からはずし、乾燥させ、焼成する。

次に、平瓦凹面にみられる痕跡について、若干の検討を行いたい。ここで言う痕跡とは、側縁に平行する段と、段上の3ヶ所にはほぼ等間隔で配される長方形の凹みを指す。段は、狭端を上にして、左側縁から約6cmと約11cmの2ヶ所にみられる。長方形の凹みは、それぞれの段に3ヶ所ずつ、約15cm間隔で、段を跨ぐように配されている。布圧痕が、段差の部分や凹みの中側でも認められることから、この痕跡は成形台に起因するものと判断される。おそらく、3枚の板材を継合せて凸型成形台がつくられており、各板材を固定するために留め具を使用した痕跡と推定される。この、成形台を継合せた痕跡は、平瓦A II b・A III a・A III bに認められる

が、AⅡbでは、ほとんどの個体に認められるのに対し、AⅢaでは、少数にみられる程度である。AⅢbでは、胎土が緻密なもののみ認められ、胎土が粗いものには認められない傾向がある。また、AⅢbを半載して製作した鬘斗瓦にも、同様の痕跡が認められる。以上から、平瓦AⅡb・AⅢa・AⅢbとも叩き原体を異にするものの、共通の成形台が使用されており、同じ瓦工場の製品と考えられる。ここでは、十分な検討を行っていないため、これ以上の記述はできないが、今後、これらの痕跡・調整手法等を検討することにより、瓦工場の復原も可能となろう。

今回の調査で出土した瓦のうち、建物址との関係が考えられる、上層瓦群・下層瓦群・SD01からSD05出土の平瓦について、分類別の百分比を求め、遺構による構成比の違い及び傾向を知ろうと試みた(第45図)。なお、平瓦の個体数は、<sup>(4)</sup>隣数計算法によって算出している。まず、西区(上層瓦群・下層瓦群)と東区(SD01～SD05)で、構成比が異なる傾向がみられる。西区では、AⅢaが構成比の3割を占め、最も高率であるのに対し、東区では、AⅢaが1割弱から2割と少なく、かわりにAⅣが2割弱から3割強を占める。さらに、西区の中で比較すると、上層瓦群では、AⅠbの占める割合が4%と低いのに対し、下層瓦群では22%と、AⅢaに次いで高い割合を示す。また、東区では、遺構によって構成比が異なるものの、SD02・SD03で、AⅢ類中のAⅢaの占める割合が、5%・13%ととくに低く、前者ではAⅢb・cが各11%、後者ではAⅢcが24%と、AⅢaよりも高率を示しており特徴的である。しかしながら、西区の瓦群については、層序関係より下層瓦群から上層瓦群への移行(建替え)が明らかであるにもかかわらず、百分比をみると、AⅢbとBbの割合が異なる以外、よく似た構成比を示しており、時期差が構成比には反映されていないようである。この傾向は、NM01～NH01のセットが、両瓦群から出土していることから何うことができる。また、雨落ち溝と推定されるSD01～SD04については、構成比の傾向をとらえ難く、建物を想定する裏付けとなるに到らなかった。

最後に、前章で報告されているが、小犬丸遺跡出土瓦の胎土分析の結果について、少し触れておきたい。まず、小犬丸遺跡出土瓦と古大内遺跡出土瓦は、1部同質の胎土をもつ瓦があるとみられるものの、大半のものが、胎土を異にし、とくに、NH01bとこれと同范瓦の胎土が異なることが明らかとなった。また、小犬丸遺跡出土瓦の分析値は、隣接する相生窯址群の須恵器のものと同く似ており、このことは、小犬丸遺跡周辺で所用瓦が焼かれた可能性を示唆するものと考えられる。<sup>(5)</sup>

今後、同范・同文瓦相互での調整手法の比較や丸瓦・平瓦の成形技法・調整手法の検討が必要となろう。さらに、胎土分析の成果を含めて、瓦工場・造瓦組織・生産地等の解明が、課題とされよう。

## 註

- (1) 「古大内式」軒九瓦は、小犬丸遺跡のほか吉田南遺跡・太寺廃寺・長坂寺遺跡・古大内遺跡・野口遺跡・溝之口遺跡・北宿遺跡・播磨国分寺・本郷遺跡・見野廃寺・市之郷廃寺・本町遺跡・姫山遺跡・辻井廃寺・向山遺跡・与井廃寺・落地遺跡から出土している。〔今里 1984 b〕
- (2) 「古大内式」軒平瓦は、小犬丸遺跡のほか太寺廃寺・長坂寺遺跡・古大内遺跡・野口遺跡・北宿遺跡・播磨国分寺・本郷遺跡・見野廃寺・本町遺跡・辻井廃寺から出土している。〔今里 1984 b〕
- (3) 「毘沙門式」軒九瓦は、本遺跡のほか吉田南遺跡・長坂寺遺跡・古大内遺跡・播磨国分寺・同国分尼寺・上原田遺跡・本町遺跡から出土しており、「本町式」軒平瓦は、ほかに古大内遺跡・今福遺跡・本郷遺跡・見野廃寺・本町遺跡・姫山遺跡・黒表遺跡・辻井廃寺・落地遺跡・溝口廃寺から出土している。〔今里 1984 b〕
- (4) 方法の命名は、〔宇野 1982〕〔上原 1984〕による。ただし、小犬丸遺跡出土平瓦の場合、広端部と狭端部の識別が困難なものを含むため、対角線上の2隅の合計を求め、そのうちの大きいほうの値を2で割って個体数とした。
- (5) 相生窯址群の中で、瓦陶兼窯が、相生市側に3基、龍野市側に6基発見されている。

## 引用・参考文献

- 井内 潔 1969 『竜野市・中井瓦窯跡発掘調査報告』井内古文化研究室報3 井内古文化研究室
- 今里幾次 1960 『播磨国分寺式瓦の研究—加古川市野口町古大内出土の古瓦—』播磨郷土文化協会研究報告第4冊 播磨郷土文化協会
- 今里幾次 1962 「古瓦より見た播磨国分尼寺」『歴史考古』第7号 歴史考古学研究
- 今里幾次 1963 「古瓦より見た播磨国分寺」『兵庫史学』第33号 兵庫史学会
- 今里幾次 1974 「山陽道播磨国の瓦葺駅家」『兵庫県の歴史』第12号 兵庫県
- 今里幾次 1978 「龍野付近の古代寺院と駅制」『龍野市史』第1巻 龍野市
- 今里幾次 1984 a 「古瓦出土遺跡」『龍野市史』第4巻 龍野市
- 今里幾次 1984 b 「姫路市本町遺跡の古瓦」「本町遺跡」姫路市教育委員会
- 稲垣晋也 1971 『古代の瓦』日本の美術66 至文堂
- 上原真人 1984 『慈仁宮跡発掘調査報告』瓦編 京都府教育委員会
- 宇野隆夫 1982 『丹波岡山窯址』京都大学考古学研究室
- 岡本一士・西口和彦 1984 『西条廃寺発掘調査報告書』加古川市教育委員会
- 小林行雄 1964 『続古代の技術』塙書房
- 近藤喬一 1982 「瓦の範と瓦当」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集—』平凡社
- 佐原 真 1972 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
- 高橋美久二 1982 「古代の山陽道」『考古学論考—小林行雄博士古稀記念論文集—』平凡社

- 高野芳宏他 1982 『多賀城跡』政庁跡 宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所  
 奈良国立文化財研究所 1974 『奈良国立文化財研究所基準資料』Ⅰ 瓦編Ⅰ  
 奈良国立文化財研究所 1978 『飛鳥・藤原発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所学報第31冊  
 林 博道他 1981 『榎木原遺跡発掘調査報告』Ⅲ 滋賀県教育委員会  
 星野敏二 1981 『甕瓦製作と分割型』『考古学雑誌』第67巻第2号 日本考古学会

遺跡名	軒 丸 瓦				軒 平 瓦							鬼 瓦	
	NM 01	NM 02	NM 03	NM 04	NH 01	NH02		NH 03	NH 04	NH 05	NH 06		NH 07
						A	B						
吉田南遺跡(神戸市)	○		○										
大寺庵寺(明石市)	○				○*								
長坂寺遺跡( + )	○		○		○								
古大内遺跡(加古川市)	○		○		○*			○					○
野口庵寺( + )	○				○								
溝之口遺跡( + )	○												
今福遺跡( + )								○					
西条庵寺( + )													○
北宿遺跡(姫路市)	○				○								
国分寺( + )	○		○		○								
国分尼寺( + )			○										
上原田遺跡( + )			○										
本郷遺跡( + )	○				○			○					
見野庵寺( + )	○				○			○					
市之郷庵寺( + )	○												
本町遺跡( + )	○		○		○			○					
原山遺跡( + )	○							○					
黒表遺跡( + )								○					
辻井庵寺( + )	○				○			○					
向山遺跡( + )	○												
中井庵寺(龍野市)								○		○			
中井瓦窯( + )								○					
与井庵寺(上郡町)	○												
落施遺跡( + )	○							○					
溝口遺跡(香寺町)								○					

凡例：\*は同范瓦の出土を表わす

第9表 小犬丸遺跡同文・同系列瓦出土一覧表

### 第3節 小犬丸遺跡について

#### 駅家について

龍野市揖西町小犬丸にある小犬丸遺跡は三方を山に囲まれ、南面のみが大きく開け眺望のきく位置を占める。ここから古瓦が出土することはふるくから知られていた。該当地に「塔ノ元」または「堂の元」と呼ばれる所があることから「小犬丸廃寺」として扱われてきたが、同時に当地が和名抄に見える布勢郷に属するところから、布勢駅家との密接な関係も示唆されていた<sup>(2)</sup>。それを出土瓦によって論証したのが今里幾次である<sup>(3)</sup>。播磨国内において同文・同范・同系列の軒瓦が多く分布することから、それらの瓦によって3期6形式の「播磨国府系瓦」を設定、その出土する遺跡に、播磨国の国庁・国分僧寺・同尼寺・国府寺・定額寺・駅家などの播磨国司の管理下にある官衙・寺院をあてはめた。その中で小犬丸遺跡を布勢駅家としたうえで、播磨国府系瓦の内の「古大内式瓦」の出土から、律令制度下における駅制のもっとも整備された時期で、平安時代初期よりさかのぼりえない時期のもとと推定している<sup>(4)</sup>。

律令制下における駅制は大化二年(646年)の大化改新詔にすでに見られるが、制度として完成するのは701年の大宝令以降とされている。しかしながら、唯一の大道であった山陽道には「瓦葺粉壁」の駅館があり、その設置された時期は8世紀前半中葉まで下がる<sup>(5)</sup>とされる。8世紀後半には律令制自身が揺らぎ始め、播磨国でも草上駅の駅田が寺田にとられる(『続日本紀』宝亀四年二月十四日条)など駅制の乱れが見られる。更に9世紀には駅家の破損(『延暦交替式』延暦十九年九月二日太政官符)や駅館の修造難堪(『日本後紀』大同元年五月丁丑条)の記事が見られ駅家経営管理の難渋が伺われる。ついには駅馬数の削減(『類聚三代格』大同二年十月二十五日太政官符)や但馬国では廃止される駅まで見られる(『日本後紀』大同三年五月癸未)<sup>(6)</sup>。このような駅の衰退の背景には、海路の利用や、駅家の修理・維持にかかる莫大な経費の問題<sup>(7)</sup>、遣唐使の廃止、官道の移動などが考えられるが、何よりもまして律令制度自体の衰退が挙げられる。では駅家としていつごろまで存在していたのであろうか。

時範記永徳三年条には明石駅家や高草(草上か)駅家に泊まった記事が見られ、11世紀末でも宿泊施設としての駅家は存続していたものと思われる。文献上に布勢駅家について見られるのは建久八年のものが最後である。これは殺會院領小犬丸保と大納言平頼盛家領布施荘との間の境相論に対するもので、「駅家」の文字が見られるのは慣例的に用いられる語句中であるがこの貫例句に「駅家」の文字を入れた例は稀有である<sup>(8)</sup>。他の官道と比べて遅くまで使われていたであろう山陽道の駅家とは言え、12世紀末まで駅家が従来の機能をそのまま維持していたとは考えがたく、ここではその呼称或いは「駅家雑事」と言う語句がそのまま残ったものと考えられる<sup>(9)</sup>。

駅家の荒廃については、播磨国西端にあたる野磨駅家(落地遺跡)に旅の僧が泊まった時に

駅館の屋根裏に3尋半の毒蛇が巣くっていたと言う今昔物語集の説話がよく語っている。

駅家の構造は駅舎（駅館院）と呼ばれる中心的建物群とそれに付随する雑舎群が存在したと考えられる。駅舎には駅館や駅楼などが含まれており、駅館は審客入朝のために瓦葺粉壁の立派な建物であったとされ、また駅楼は高層の樓閣建築で寺院などにも匹敵する偉容を誇っていたものと考えられる。これらの駅舎建物群は四面築垣で囲まれ、鳥居形の門を持っていた例も見られる。雑舎には駅田からの収穫を収める倉庫群や馬の厩舎などがあったと思われる。<sup>93</sup>

#### 小犬丸遺跡について

今回の調査は幅約4m、長さ約130mの東西に長い調査区で行われたため、遺跡の全容を把握できるものではなかった。また墨書土器・木簡などの遺跡の性格を決定できるような資料も出土していない。しかしながら瓦葺建物の検出、緑釉陶器・越州窯青磁・水晶玉などの出土から遺跡の性格はある程度限定され、小犬丸遺跡が布勢駅家であるという可能性が強まった。<sup>94</sup>

瓦葺建物は西区で2時期2棟、東区で2棟検出されている。いずれも東西幅6m程で、S B 01・S B 02では梁行2間程度の建物である。桁行の長さはS B 02で2間確認されているのだが、南2トレンチで検出された地山整形による基壇状の高まりがS B 01の基壇と続くと考えられるため9m以上の南北に長い建物を想定できる。このS B 01とS B 02からは掘立柱建物から礎石建物への移行、規模の縮小の変遷が見られる。東区で検出されたS D 01～04は建物の兩落ち溝と考えられ、東区と西区の間でも同様の溝の存在が想定される。溝土層断面等からS D 01の西側とS D 02・S D 03間に瓦葺建物があったと考えているが、今回の調査では確定できない。また出土した軒平瓦の下面にベンガラが付着しており、建物の軒などが赤く所謂丹塗りされていることがわかる。S D 04から検出された漆喰も含めて文献に見られる「瓦葺粉壁」の駅家の姿を思い浮かべることができる。

次に出土物から見た各遺構及び遺跡の年代観を見ていく。

出土した遺物の中には少量の弥生土器や15世紀以降のものも含まれているが、ここではそれらを除いて遺物の主体をなす8世紀から12世紀にかけてのものについて触れる。

西区の中央部で検出された遺構はその切り合い関係や層序関係からS B 02からS K 01・02さらに上層瓦群へ、また下層瓦群から上層瓦群への経過を示す。S K 01・02からは10世紀中頃に比定される緑釉陶器片も出土しているが、大半の遺物は11世紀後半から12世紀前半のものである。また上層瓦群は最終的に整地を受けていると思われ、その時期は12世紀代と考えられる。上層瓦群中には緑釉陶器・越州窯青磁・灰釉陶器が含まれているが、11世紀から12世紀代にかけてのものが中心となる。下層瓦群中からは10世紀中葉を下るものは出土していない。このことから10世紀代にS B 02からS B 01へと建て替えが行われたものと推測される。

東区のS D 01からS D 04までの溝からも奈良時代に遡り得る土器は少量ながらも出土している。しかしながら承切り底部をもつ須恵器・土師器の皿も含まれていることから、12世紀代に

は埋没したものと考えられる。

小犬丸遺跡の創建時期は奈良時代まで遡ることは言える。しかしながら瓦葺建物が建ち並び最も盛行するのは9世紀から10世紀にかけての時期であろう。そして12世紀代には瓦葺きの建物はなくなり調査区西端の流路までも埋められて整地される。

今回の調査で遺跡の中核部の範囲をおおよそ掴むことができた。

調査地区内での瓦の出土は西区の流路以東から東区S D 05以西及び南1・2トレンチに限られており、その外からの出土は極めて少ない。駅家の中心施設（駅館など）の瓦葺きの建物は東西幅約85mの内側に納まるものと思われる。この範囲の西側を限る流路、東側を限るS D 05とも他の溝に比べて規模が大きいこと、更に流路の内側には幅約2mの基底面の高まりがあり、版築等は確認されなかったものの築地層が想定されること、また同様にS D 05の内側にもS D 04とのあいだに幅約3mの高まりを残していることから、築地・側溝に囲まれた官衙域を復元することができる。

周辺の田面の表面踏査を行い、瓦・土器の散布状況を調べたが、北側では発掘調査地点の約60mまで濃厚に分布しており、現水田の南北方向の畦畔の内側が最も密であった。南側での散布状況は散漫であり、発掘調査地点の南約60mで行われていた石垣修復工事の際も須臾器・土師器片はいくつか見られたが瓦は採集されなかった。官衙域は南側を古代山陽道に規定された東西・南北とも約85mの方形のものを想定することができるが、これは他の駅家址の調査でも確認されており結論を出すことはできない<sup>38</sup>。調査例の増加及び小犬丸遺跡での今後の調査成果を待ちたい。

駅家は駅館を中心とした官衙域以外にも、倉や駅戸の居住域などの付随する施設が存在していたはずである。東区東半部の掘立柱建物址などもその可能性を持つが、断定できる資料は見出せない。また調査地の南東には「遠殿脇（えんどのわき）」と呼ばれる所があること、調査地の北約500mの山中でも布目瓦を採集していることから、今後は周辺の広範囲の調査が望まれる。

## 註

- (1) 遺跡の東側の畔は琴坂畔と呼ばれており、播磨国風土記に記載される地名である。
- (2) 鎌谷木三次「小犬丸廃寺」「播磨上代寺院址の研究」1942
- (3) 今里幾次「山陽道播磨国の瓦葺駅家」「兵庫県史」12 兵庫県 1974  
今里幾次「古代の駅制と布勢駅家」「龍野市史」第1巻 1978
- (4) 今里幾次「姫路市本町遺跡の古瓦」「本町遺跡」姫路市教育委員会 1984では8様式を設定している。
- (5) これは更に、高橋美久二「古代の山陽道」『考古学論考』1982によって補強されている。

- (6) 前掲註4文献  
 (7) 前掲註5文献  
 (8) 山陽道でも大同二年から延喜年間までに10駅の廃止が伺われる。  
 (9) 「延喜式」主税上に「播磨国修理駅家料四万束」と見える。

00

左弁官下文 建久八年四月三〇日「壬生文書」

左弁官下播磨国、

応且任旧跡、糺定四至境、且免除雜徭、穀倉院領当

国小大丸保事

在管攝西郡布施郷内、

四至西東海六条上坊山崎實時、南東六条上坊丸井井時、

右得彼院去年十二月廿四日解状仰、彼保解云、謹考旧

貫、当保建立之後、漸雜及二百歳、四至内田島荒野山

林等、敢無有濫妨、而去応保年中、故出羽守師元朝臣

補長官之後、平大納言頼盛卿相語国司、以布施郷被申

立庄劣之日、小大丸保貫、作田之稱、不可有山林荒地、

(中略)

永被停止勅事院事造内裏造御制事字佐勅使駅家雜事乳

牛役惣大小因役者、彌知道理之不公、全有限之公用者、

中納言藤原朝臣泰通宣、奉勅依請者、国宣承知、依宣

行之、

建久八年四月卅日

右少弁平朝臣

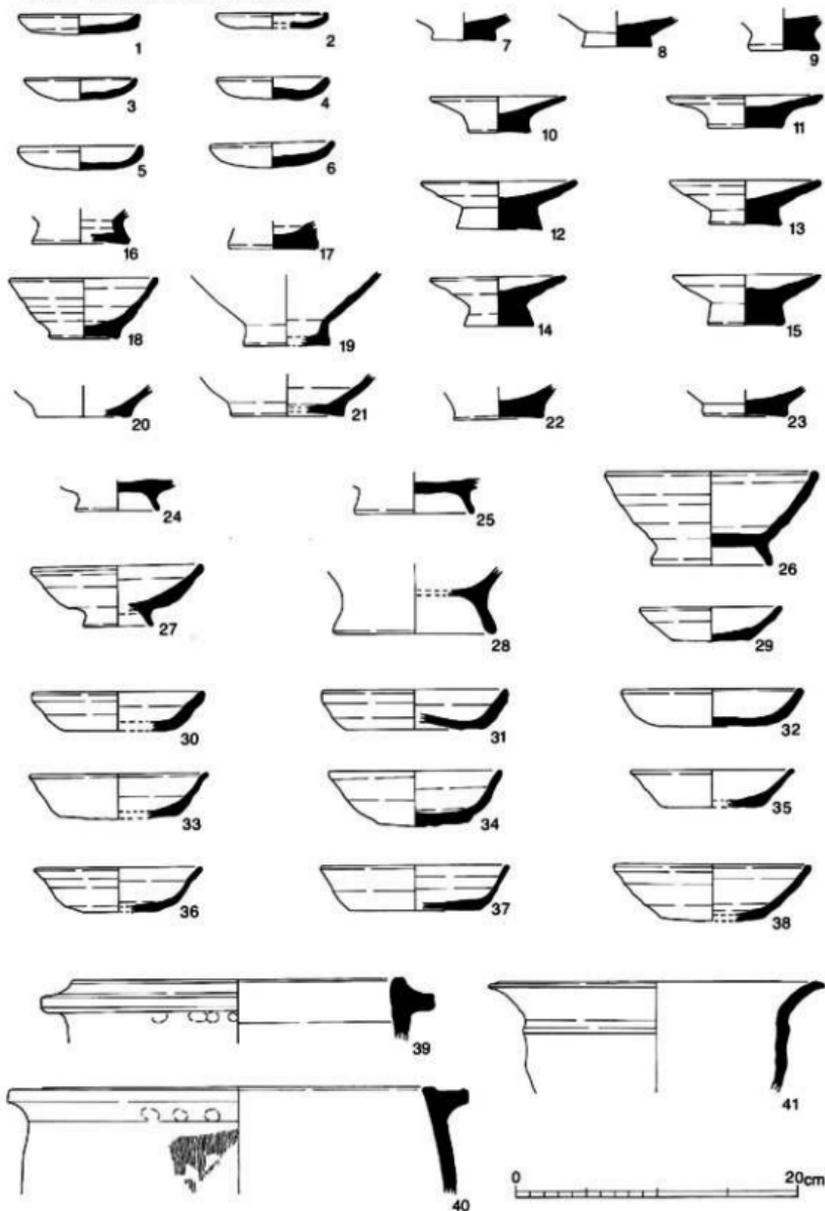
右大史三善朝臣

『大日本史料』第四編之五

- 01 梅花女子大学講師 馬田綾子氏に御教授戴いた。  
 02 「公卿勅使驛家雜事勅否注進状」文治三年(1189)卅日 でも「駅家雜事」の文字が使われている。  
 03 高橋美久二「山崎駅と駅家の構造」『長岡京古文化論叢』 1986  
 04 昭和60年度に兵庫県教育委員会が発掘調査を実施した地点の西約100mにあたり、付近には<sup>山崎</sup>遠敷跡の地名も見られる。  
 05 「鎌倉遺文」巻8「筑後国交替実録帳」には筑後国駅館に四面に築垣があると記されている。  
 06 駅家推定跡の発掘調査は、東海道栗原駅に比定される伊場遺跡(静岡県浜松市)、山陽道安芸駅に比定される下岡田遺跡(広島県安芸郡府中町)、西海道夷守駅に比定される多々良込田遺跡(福岡県福岡市)、山陽道小田駅に比定される毎戸遺跡(岡山県小田郡矢掛町)などが報告されている。兵庫県内でも山陽道草上駅と推定される本町遺跡(姫路市)、辻井遺跡(姫路市)や明石駅が含まれていたと考えられる吉田南遺跡(神戸市)などが調査されている。

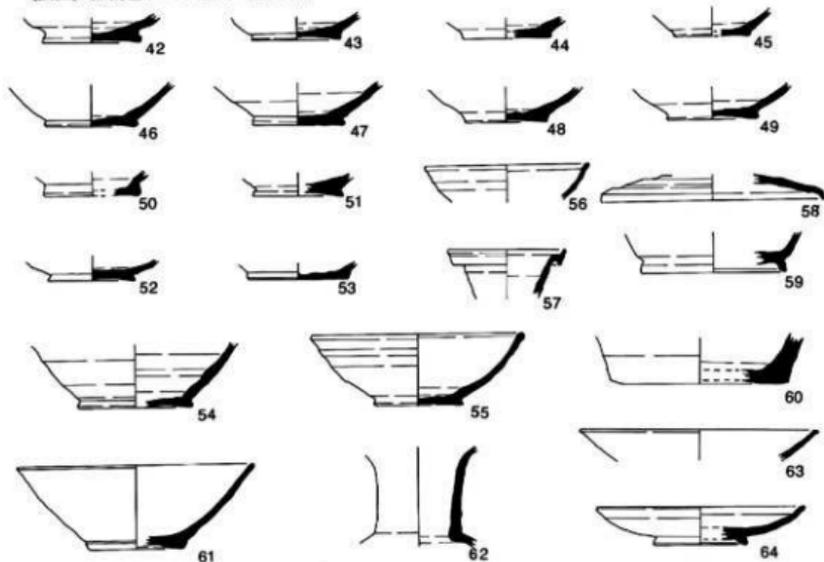
圖 面

〔西区〕 黒褐色シルト層 (上層瓦群)

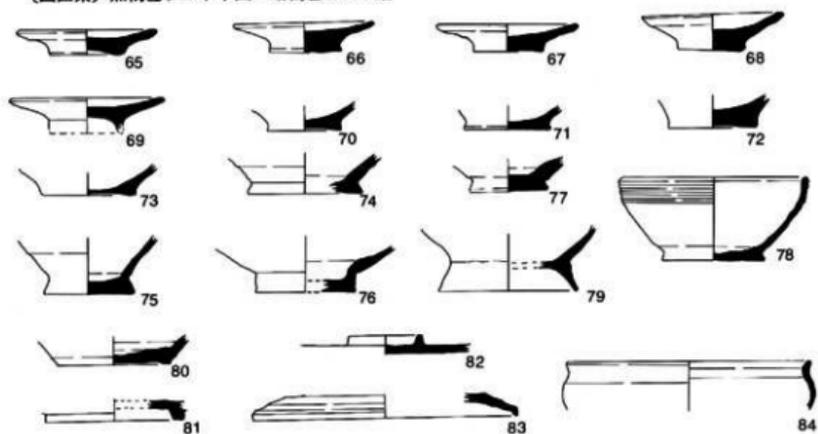


土師器 1~35・39~41 須恵器 36~38

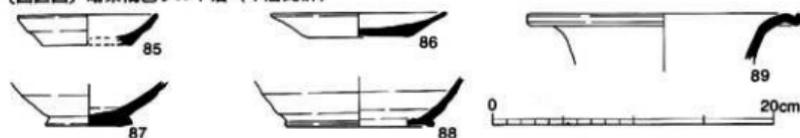
〔西区〕 黒褐色シルト層（上層瓦群）



〔西区東〕 黒褐色シルト下面～暗褐色シルト層

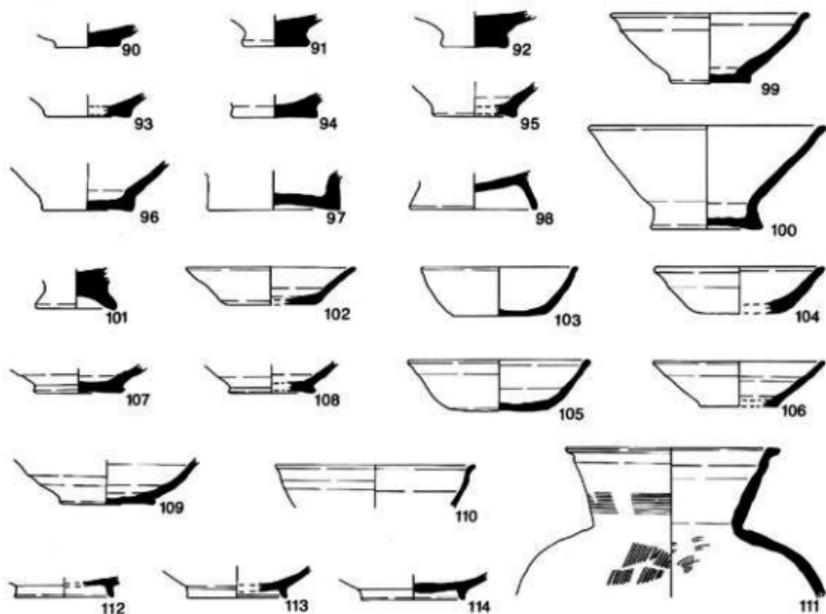


〔西区西〕 暗茶褐色シルト層（下層瓦群）

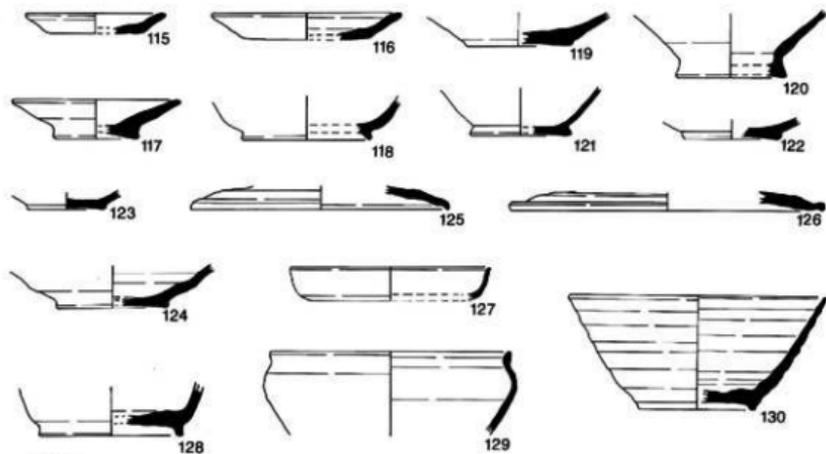


須恵器 42～60・80～84・88・89 土師器 65～79・85～87 灰釉 62・63 緑釉 64 越州窯青磁 61

SK 01. 02



南2トレンチ

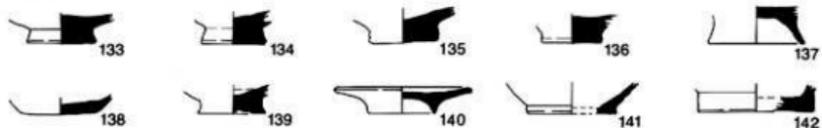


SK 03

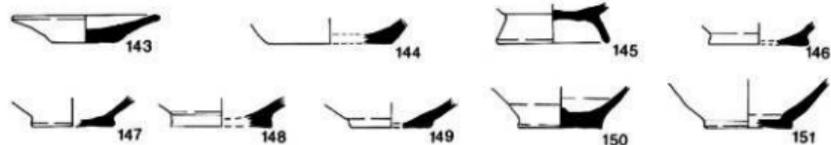


土師器 90~104・115~117・119~121 須恵器 107~111・123~132 緑釉 112~114・122 黒色土器 118

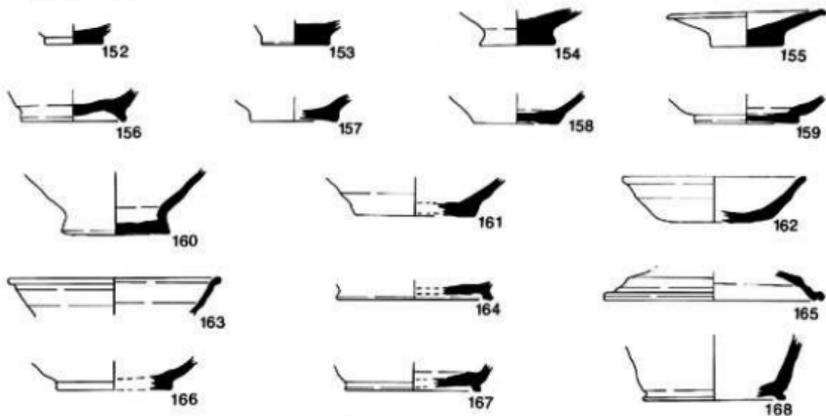
〔東区〕SD 01



〔東区〕SD 02



〔東区〕SD 03



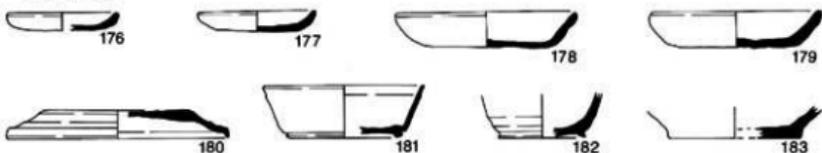
〔東区〕SD 04



〔東区〕SD 05

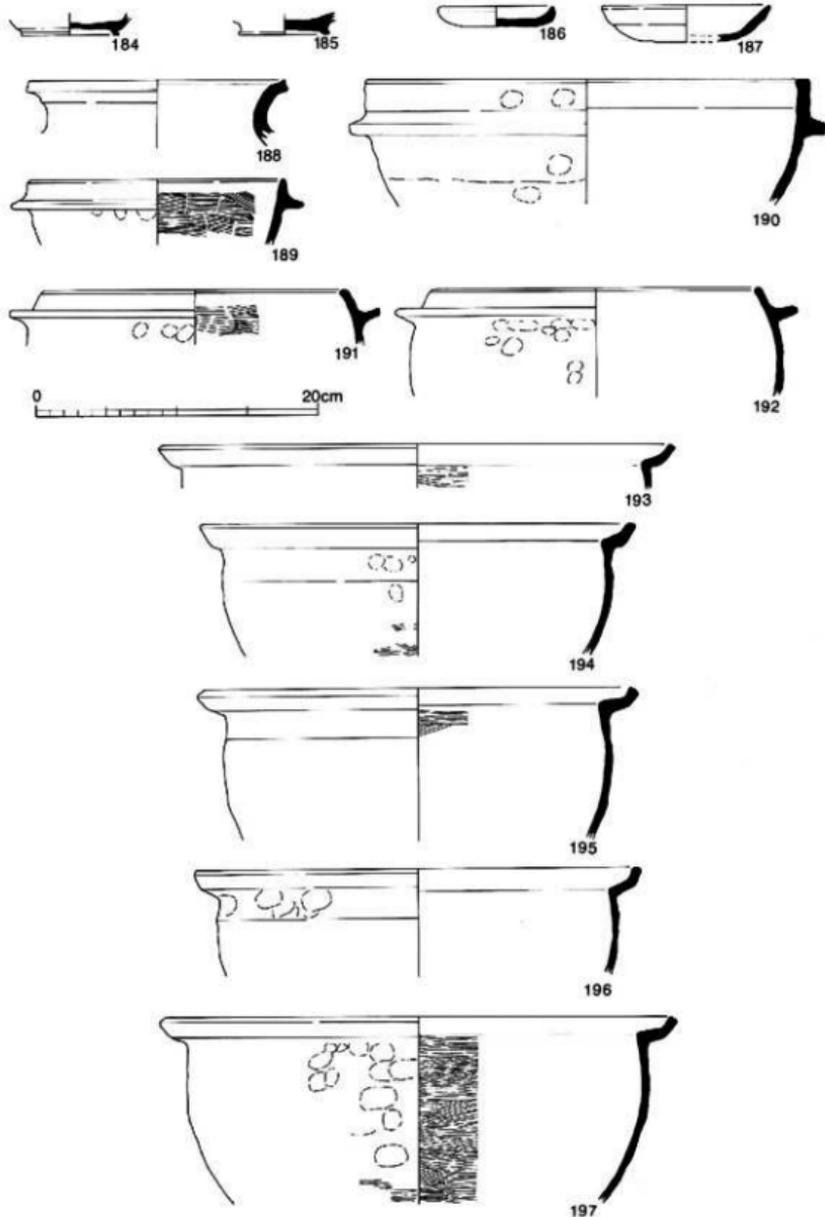


〔東区〕上層

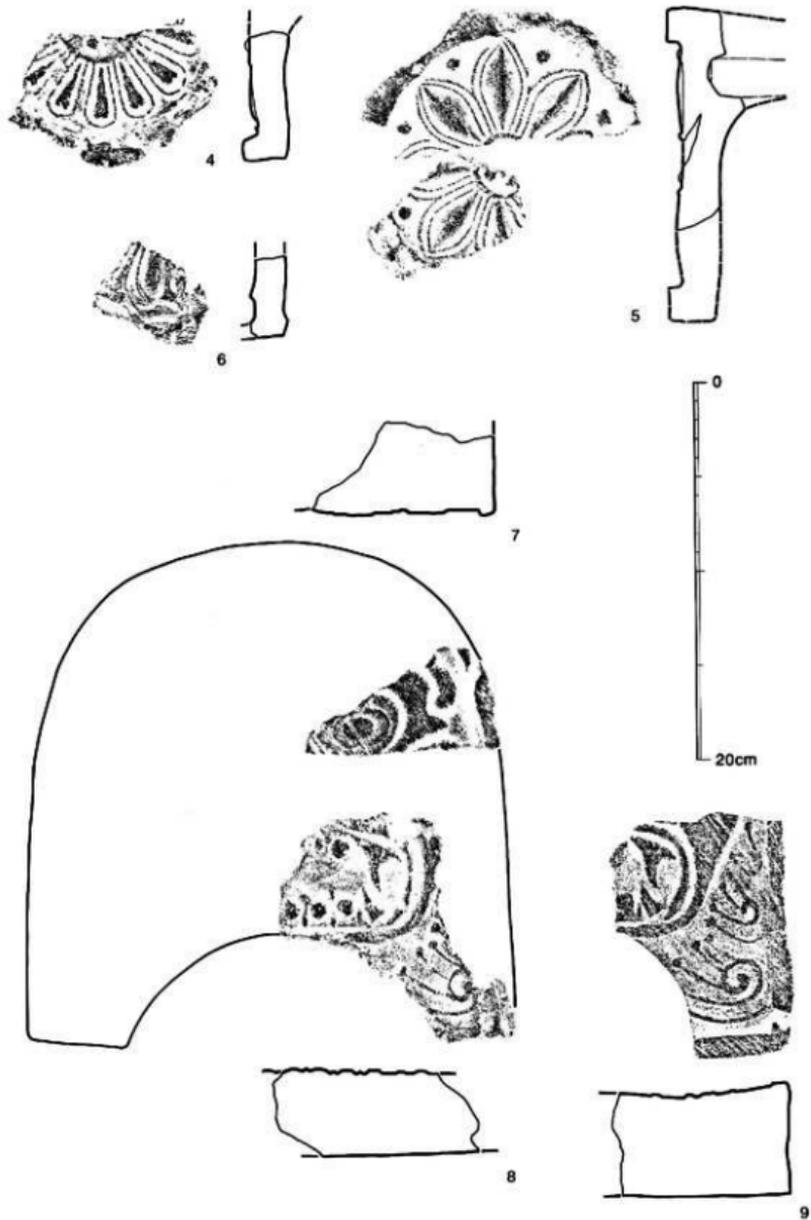


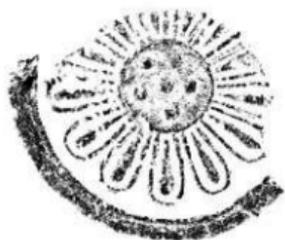
土師器 133~162・169~171・176~179 須恵器 163~168・172~175・180~183

〔西区〕流路

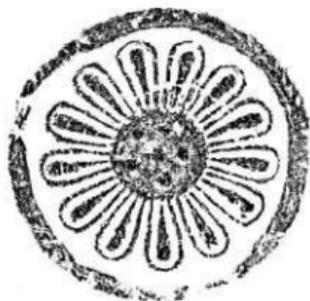
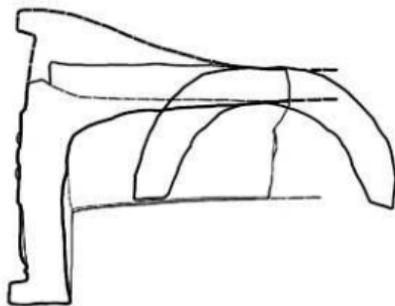


土器 186・187・189・192～197 瓦質土器 190 須志器 184・185・188

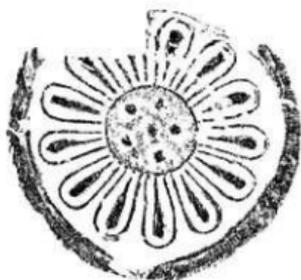
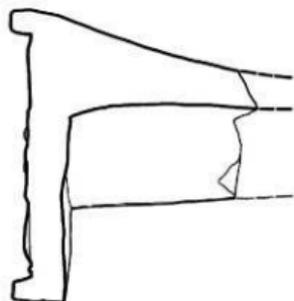




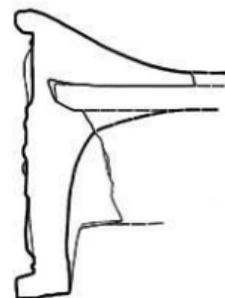
1



2

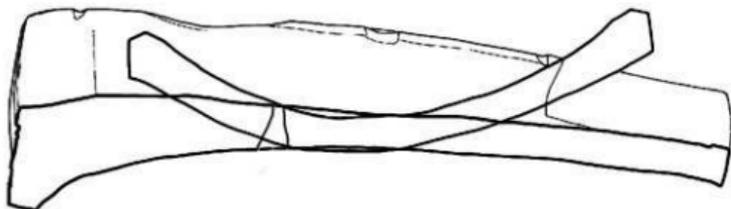


3

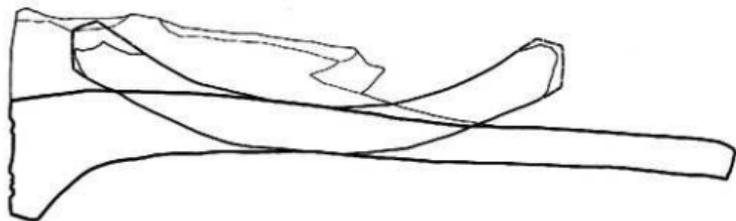




10



11



12





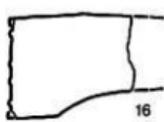
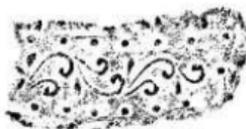
13



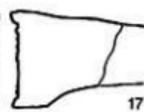
14



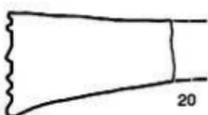
15



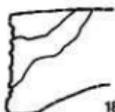
16



17



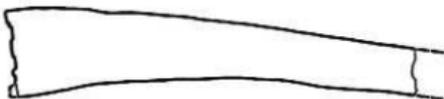
20



18



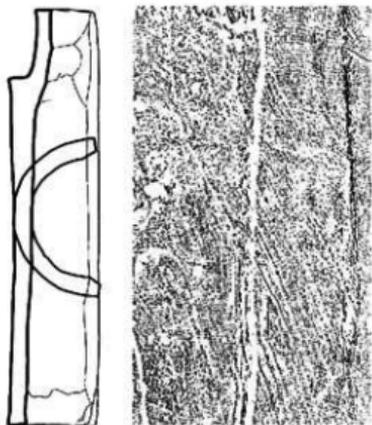
19



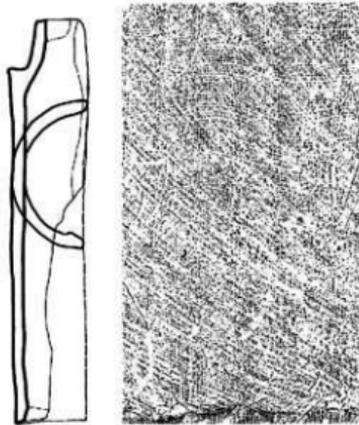
21



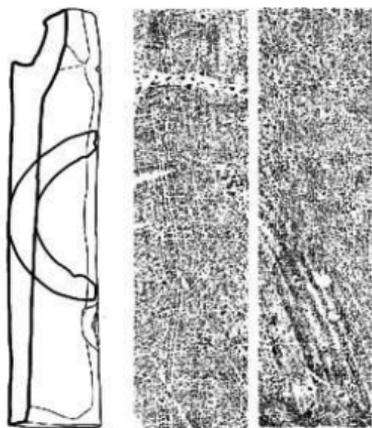
13・14 NH 01 a 15・16 NH 02 A 17 NH 02 B 18・19 NH 03 20 NH 04 21 NH 05



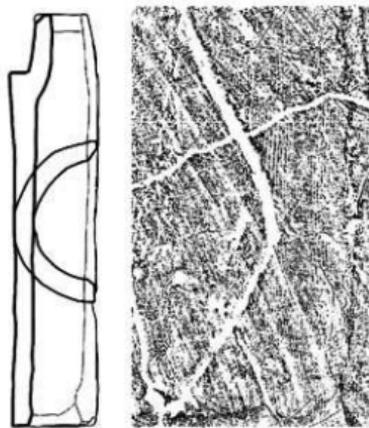
24



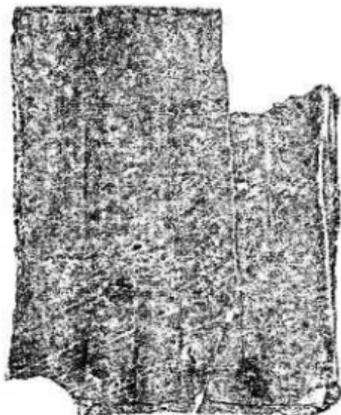
25



26



27



28

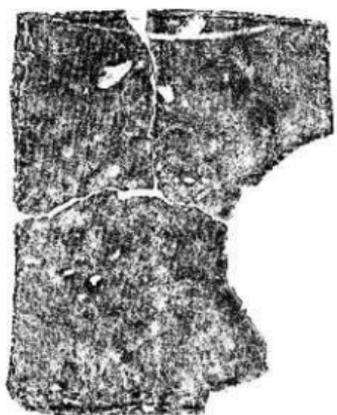


29



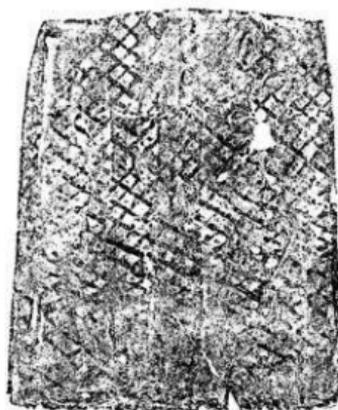


30

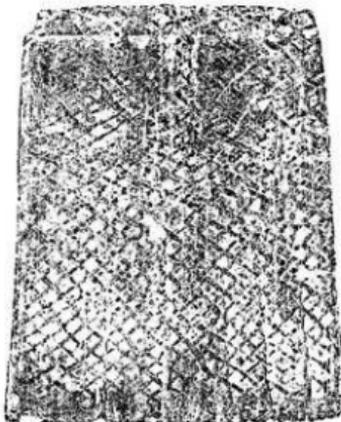


31





32



33





34



35



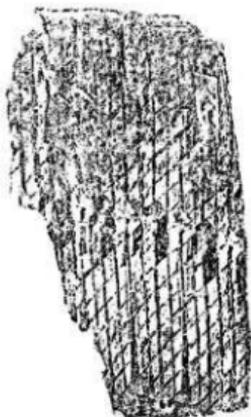


36

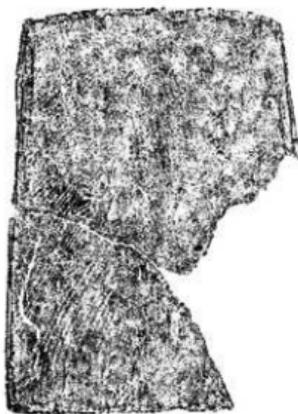


37





38



39

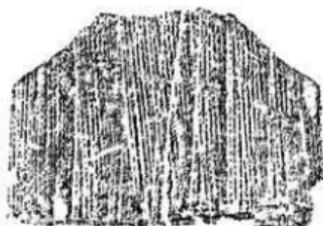
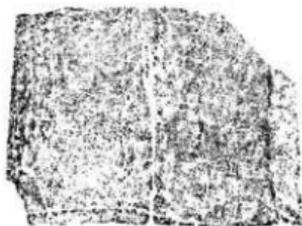




40



41

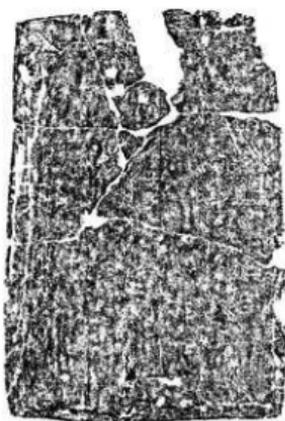


42





43



44





45



46





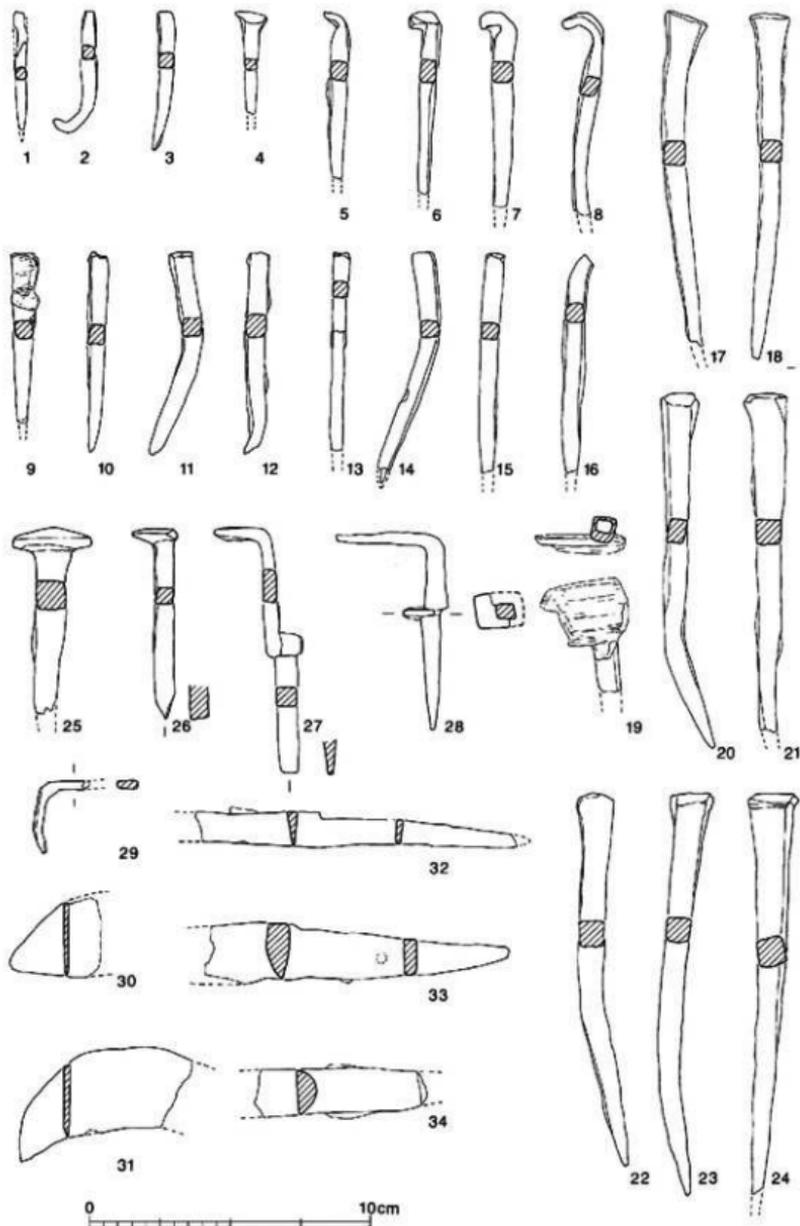
47



48



47 平瓦 Db 48 平瓦 Ba



# 圖 版



小犬丸遺跡航空写真



小犬丸遺跡遠景（南から）



西区上層瓦群出土状況（東から）



西区 SB 01. SK 01-02（東から）



西区 SB 01. SK 01-02（北から）



西区下層瓦群出土状況（西から）



西区下層遺構完掘後（西から）



東区 SD 01～SD 03 検出状況（西から）



東区 SD 02-03 検出状況（西から）



東区 SD 01～SD 05 完掘後（東から）



東区 SD 02-03 完掘後（東から）



東区東半部遺構検出状況（西から）



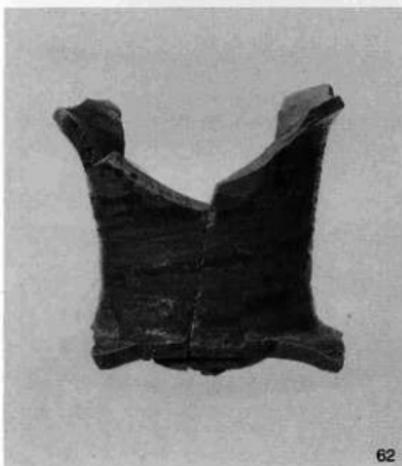
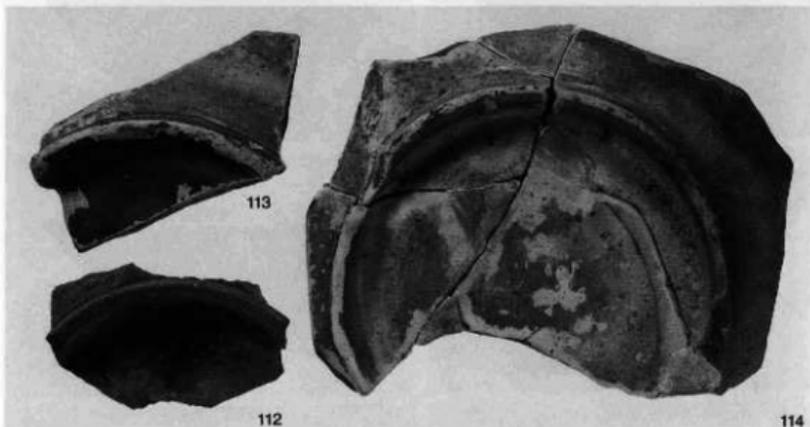
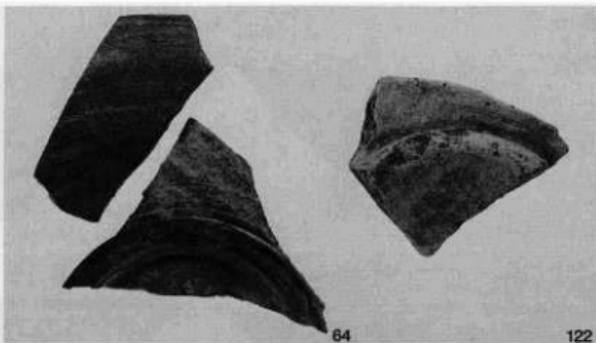
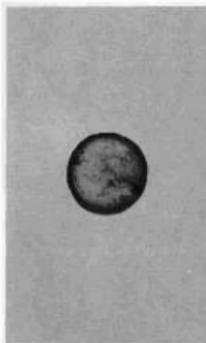
東区東半部 SE01（東から）

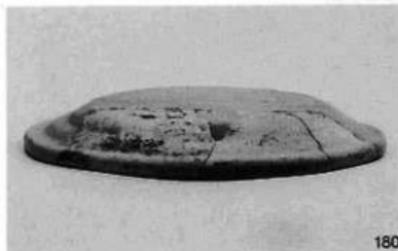


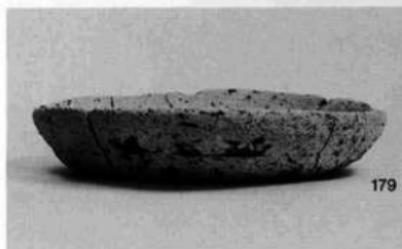
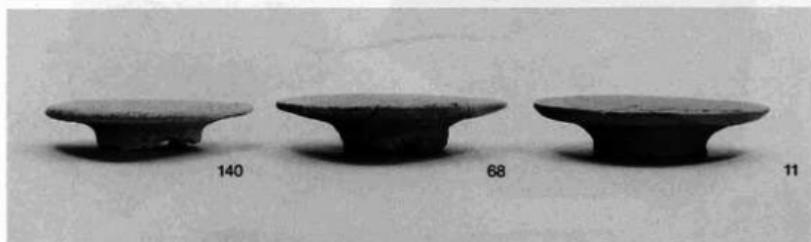
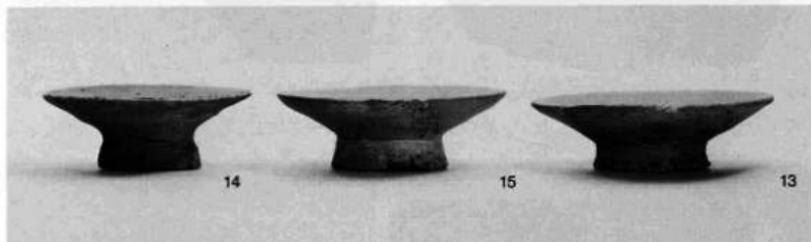
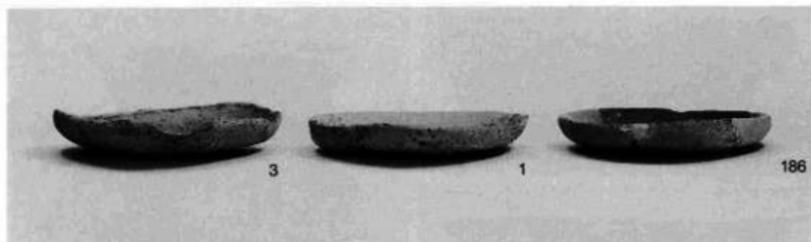
南2トレンチ上層遺構面検出状況（東から）



南2トレンチ下層瓦群検出状況（西から）





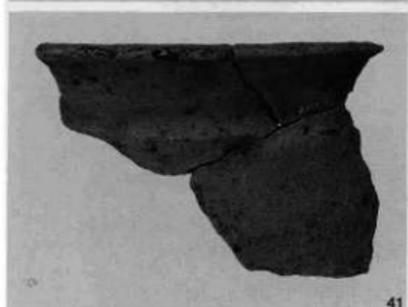




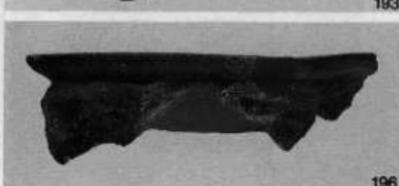
111



193



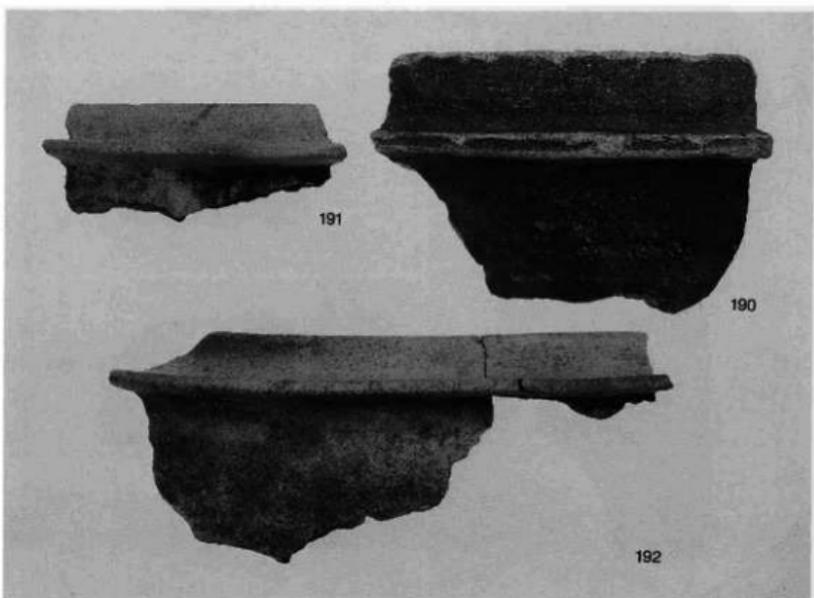
41



196



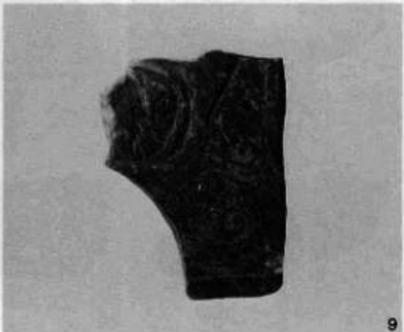
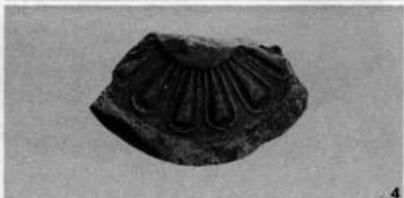
197



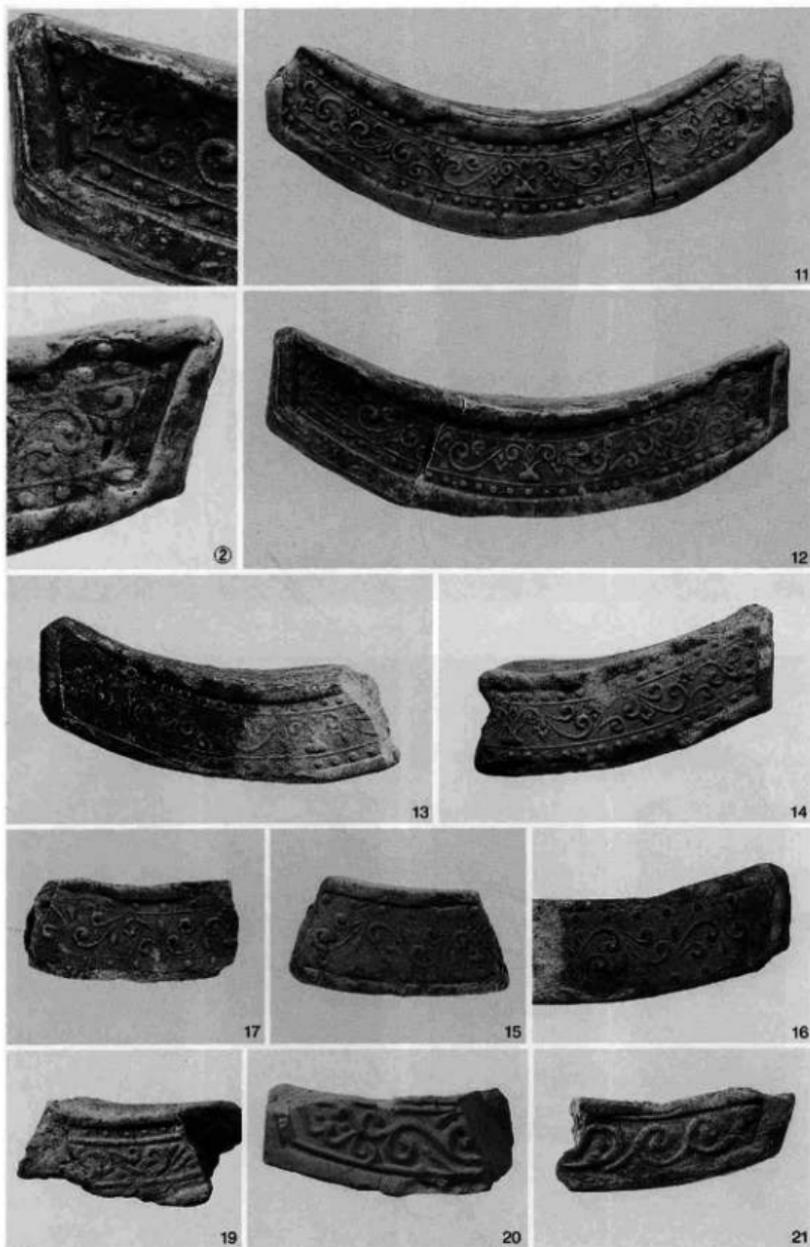
191

190

192

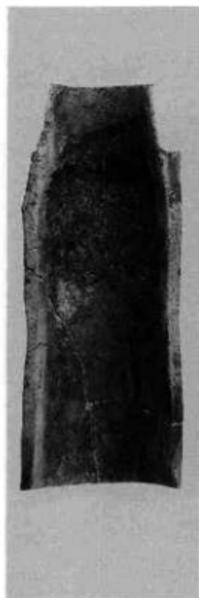


1~3 NM014 NM025 NM037~9 鬼瓦



11.12 NH 01 b 13.14 NH 01 a 15.16 NH 02 A 17 NH 02 B 19 NH 03 20 NH 04 21 NH 05

①② NH 01 b の范傷拡大



24

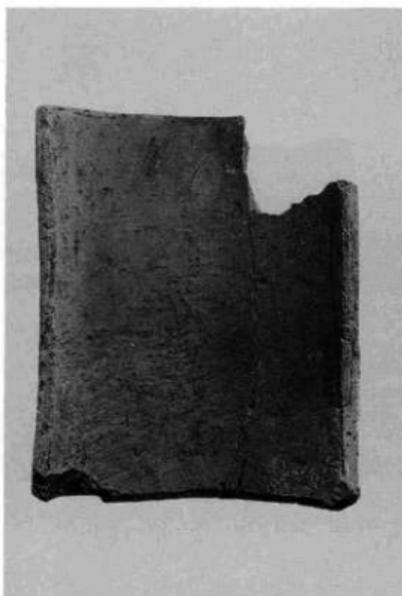


25

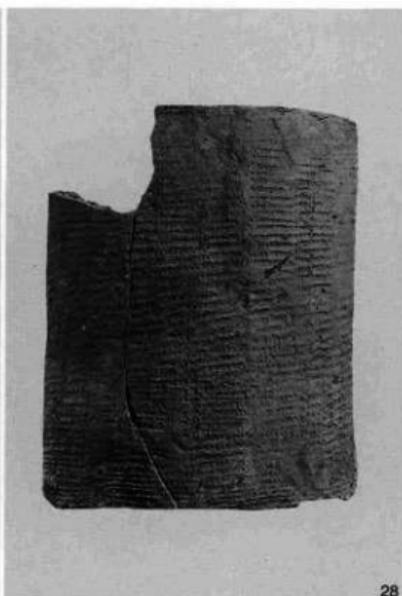


26

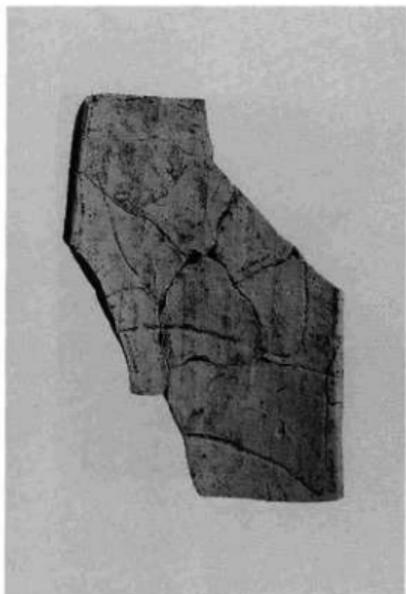
27



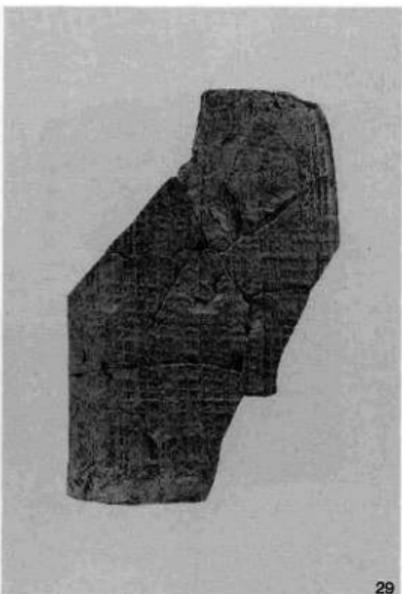
平瓦 A1a



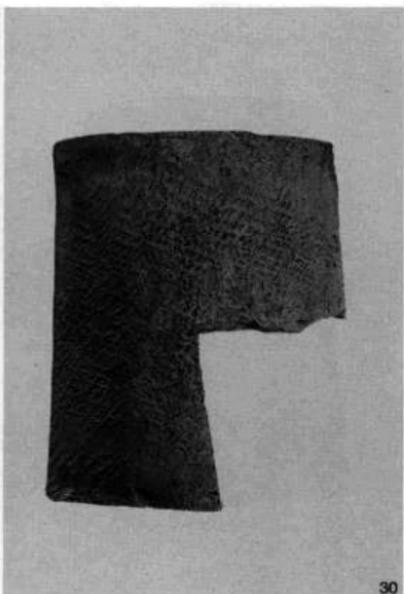
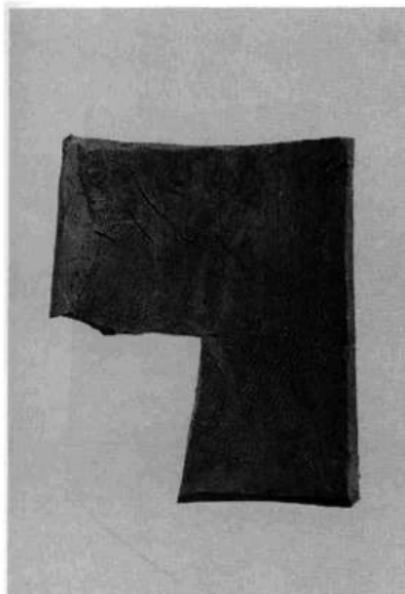
28



平瓦 A1b

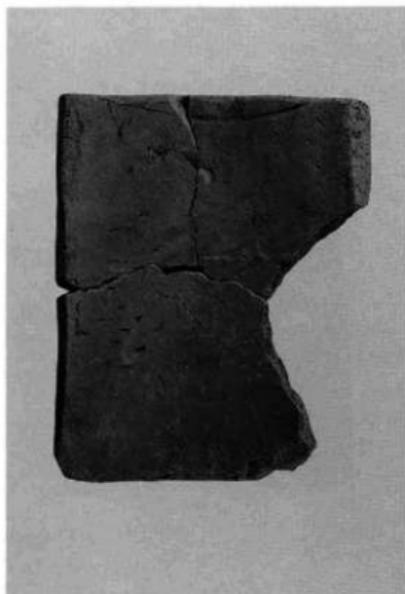


29



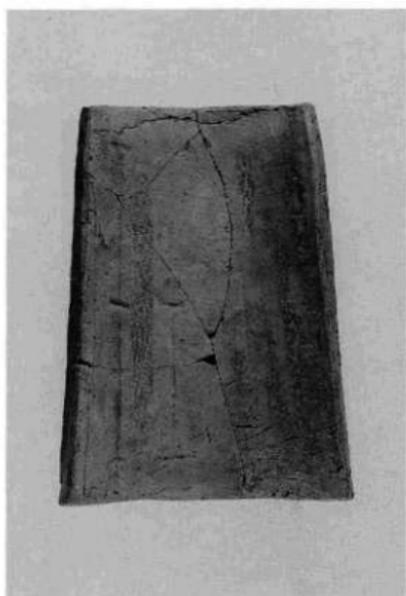
30

平瓦 AIIa

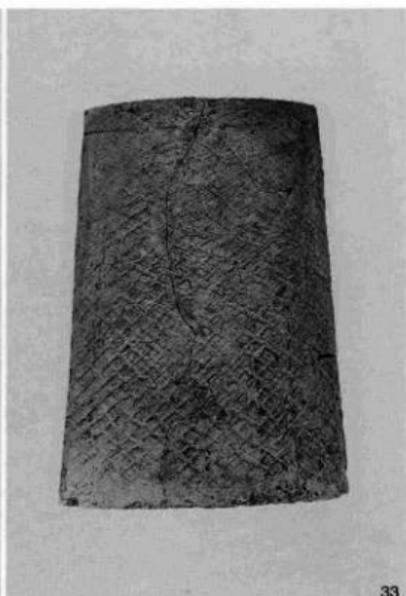


31

平瓦 AIIa



平瓦 A1b



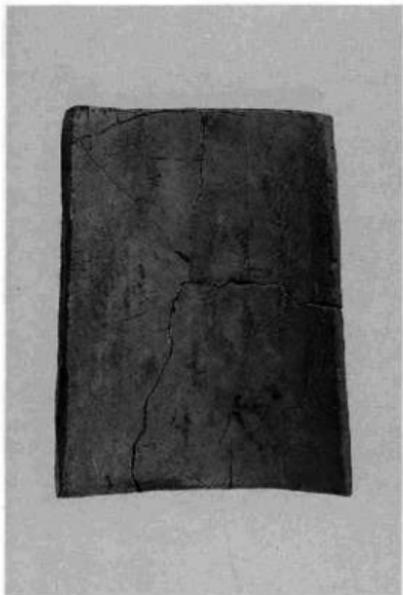
33



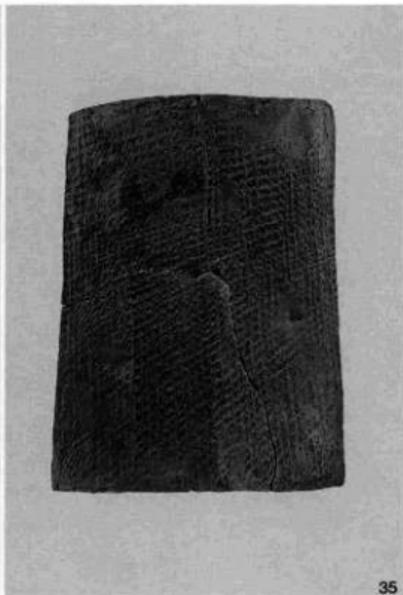
平瓦 A1b



53



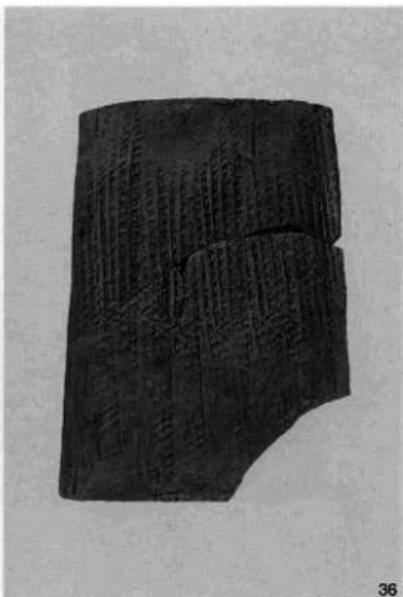
平瓦 AⅢa



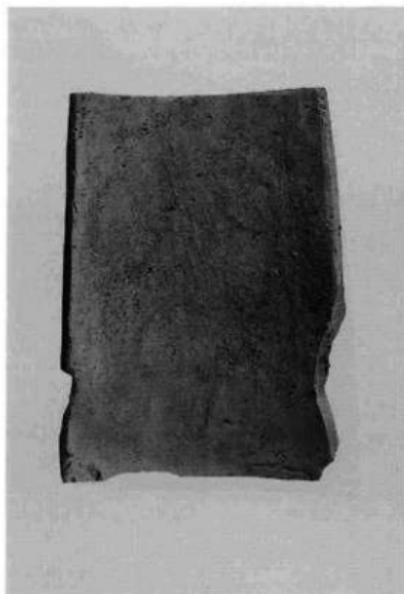
35



平瓦 AⅢa



36



平瓦 AⅡc



43



平瓦 AV



44



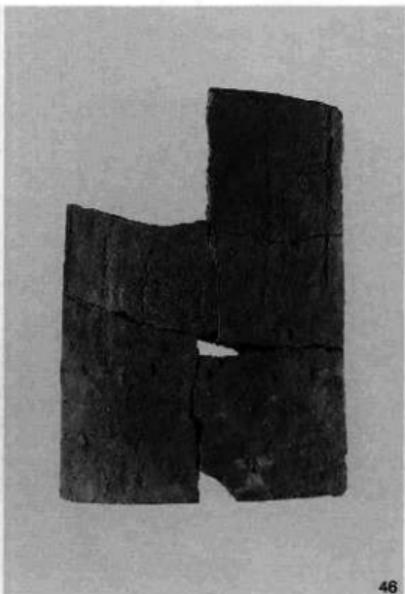
平瓦 AⅦ



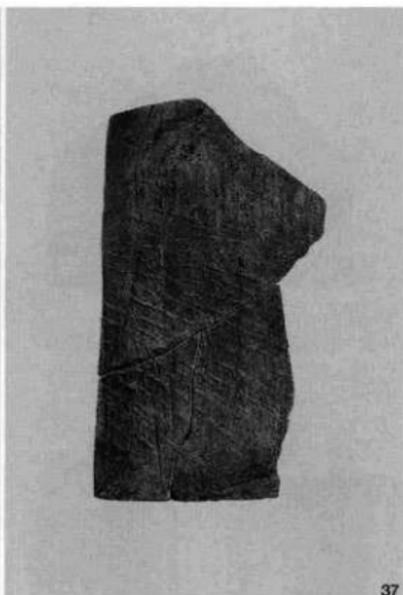
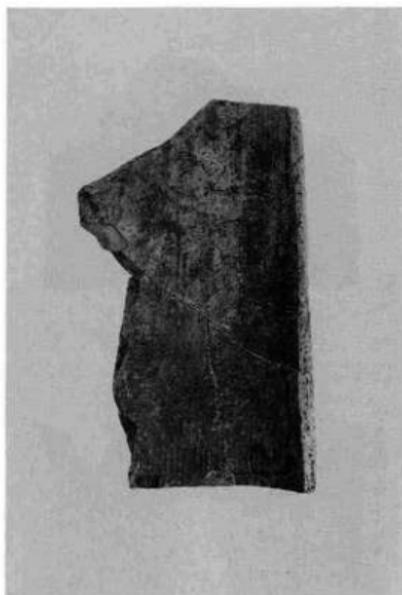
45



平瓦 AⅦ

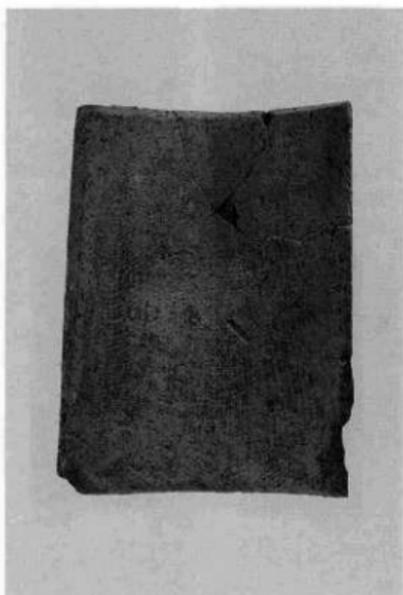


46



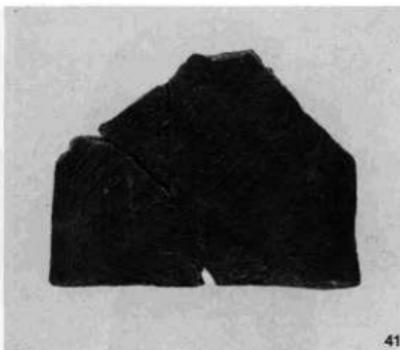
37

平瓦 AN



47

平瓦 Bb



41



54



55

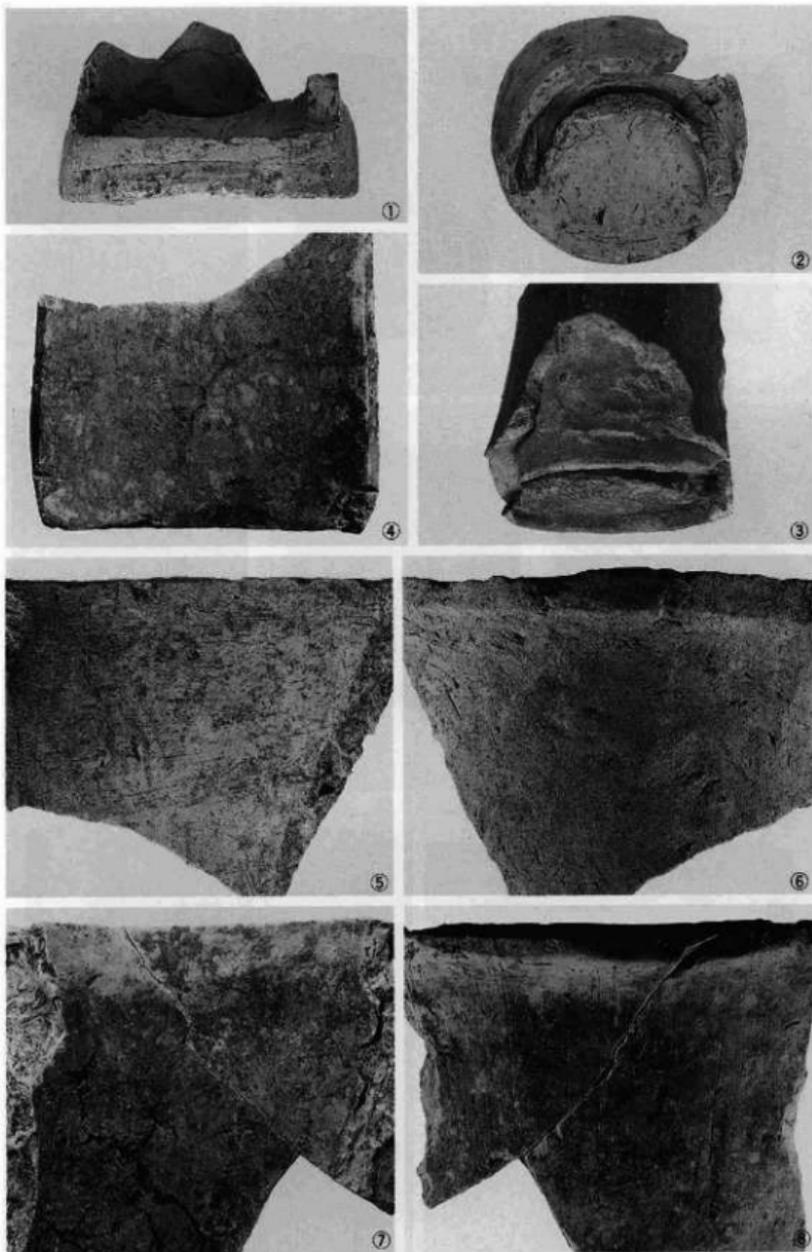


49

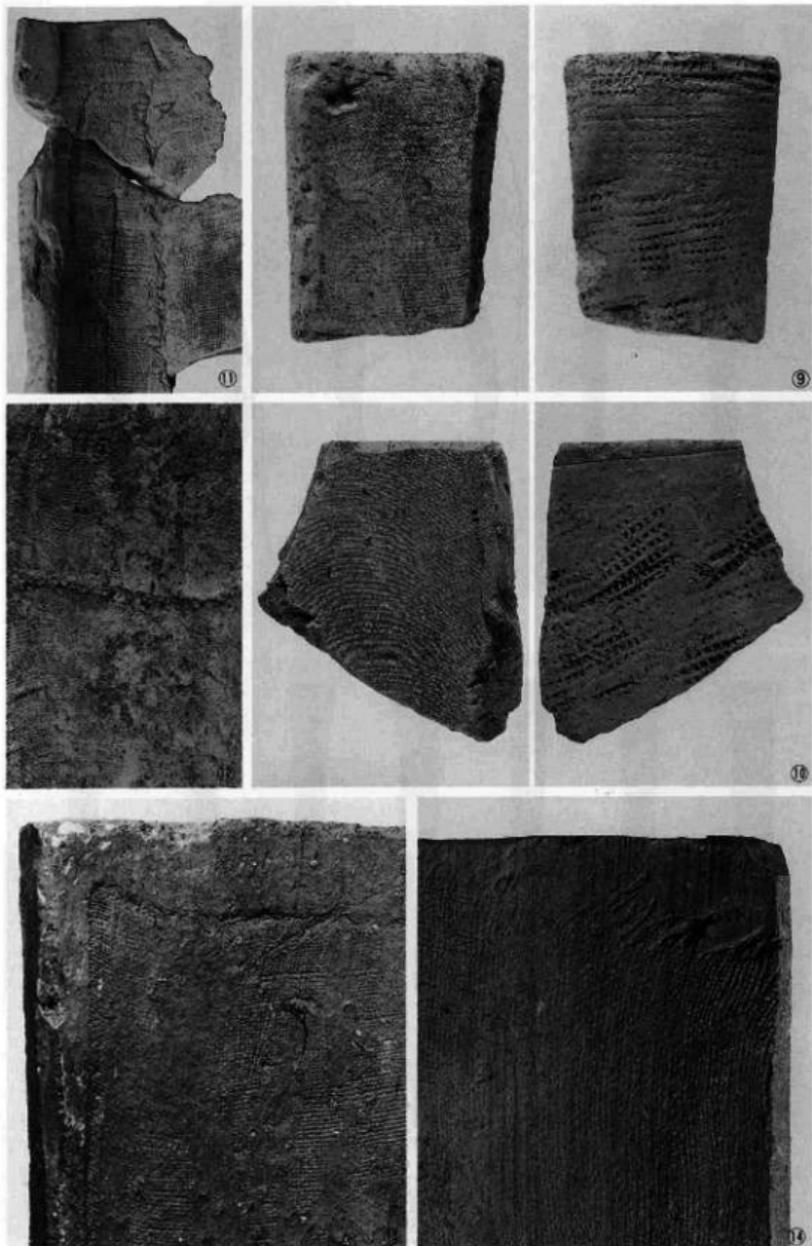


52

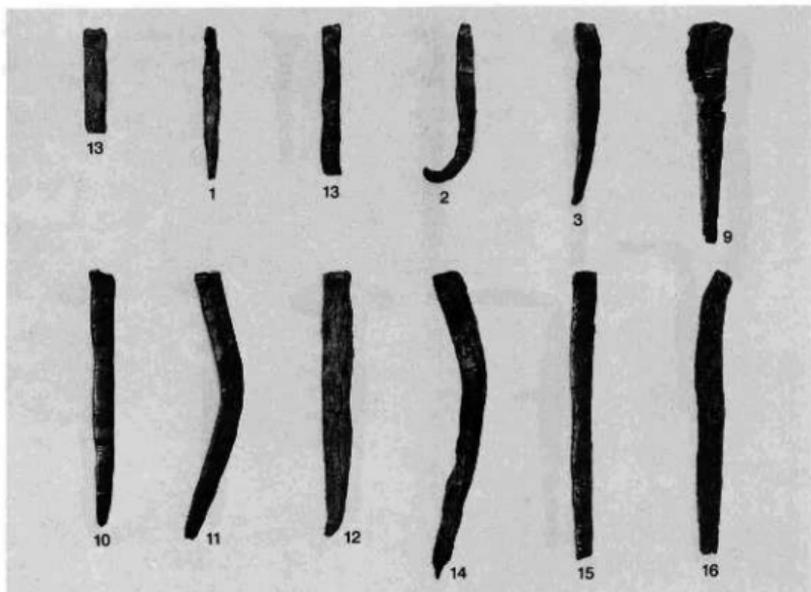
41 平瓦 A Ⅱb 54 丸瓦 B 55 王縁部に突縁をもつ丸瓦 49 鬘斗瓦 I 52 鬘斗瓦 II



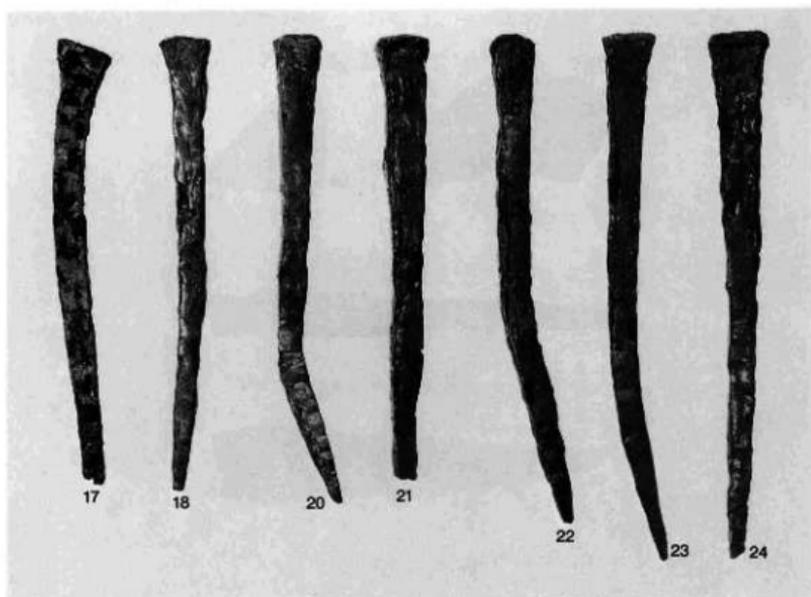
① 軒丸瓦側面の范端痕跡 ②③ 軒丸瓦接合部 ④ 軒平瓦側縁の棒状圧痕 ⑤⑦ 軒平瓦凹面の調整  
⑥⑧ 軒平瓦凸面の調整



⑪ 丸瓦 A ⑫ 平瓦 円弧印さしめ ⑬ 丸瓦 布織じ合わせ痕 ⑭ 平瓦布端の結末



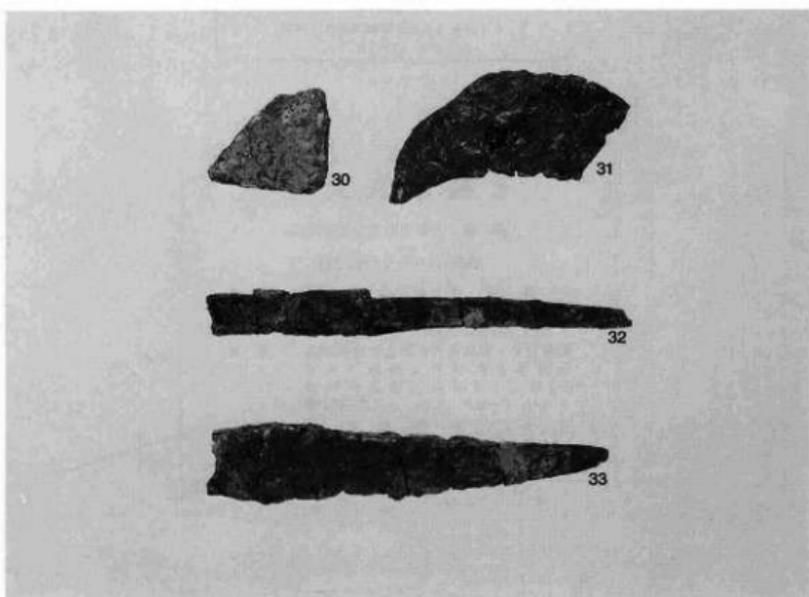
釘



釘



錠・釘



刀子・その他

# 小犬丸遺跡Ⅰ

兵庫県文化財調査報告 第47冊

昭和62年3月31日 発行

発 行	兵 庫 県 教 育 委 員 会 神戸市中央区下山手通5丁目10-1 〒650 TEL (078) 351-7711
編 集	兵庫県教育委員会社会教育・文化財課 兵庫県埋蔵文化財調査事務所 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5 〒652 TEL (078) 531-7011
印 刷	丸 山 印 刷 株 式 会 社 兵庫県高砂市米田町神爪57-1 〒676 TEL (0794) 32-1511